[illegible]直便蒙抄

自壹至伍

正方　全部

ヲ 9
626
1

早稲田大學圖書

曠然自適

凡嗜茶丁技業秀名之世而利休宗易居士其術尤精其名鳴天下世之好茶者衆不啻慕之及其孫至不審庵宗旦老人而家聲愈彰矣爰山田氏宗徧弱年之比

函 号 626 巻

不論晝夜、且走之茶亭而
掬厥道多歳或寄居淪清
泉呂茶烟或林下掃落葉
邀来賓且走感激精勤之
今之宗備以所制洗之徒弟以
而比年為方外之友頃遠訪

茶房次需記前件之来由哉不
能固辞述事以塞其責之

貞享丙寅初冬書于
遜湯之寓居

野秋楚月子

參地有一人氏山田名宗偏額其
齋曰四方菴予斷金之友而好清
之士也雖寄跡於官路塵裏而遊
心於塵外風致汲恵山之清泉煎
建溪之芳茗怡情遣興其遺世之
靜慮誠可愛也振古好茶也上自
天子下至牧伯士大夫及野僧隱
士之徒不為不多矣唐德宗宋仁
宗陶穀丁謂蔡襄僧寶志盧仝陸
羽在本朝則嵯峨天皇東山慈照

院京極道譽香松則祐釋明惠志
野村田珠光之輩其餘不遑枚舉
也中世有紹鷗以點茶法鳴于世
紹鷗以是傳之利休利休滋添潤
色其法隆盛所重于列國諸侯兒
童誦利休走卒知千氏世以爲點
茶百世宗師也利休傳之少菴少
菴傳之嗣子宗旦宗旦性好隱逸
不慕榮利秖耳淡泊以點茶爲樂
矣宗徧遊彼門有年于茲直傳其

衣鉢而以得繼利休家法之正脉
也噫近世其流漸廢而變之者鮮
矣儻若有變之人亦弗能識古法
之正式或好異樣或迷謬說以誤
傳誤往々皆然也於是宗徧獨憂
其法彌久彌失其傳作爲斯書以
授之弟子名曰茶道便蒙抄顧其
爲書至賓主送迎茶室周旋點茶
法式茶具定則乖悉不記焉其學
之者細閱此書則猶親炙于利休

而視其所送迎観其所周旋察其
所點茶聽其所談説矣然則宗偏
即今之利休也豈為茲書外則有
利休哉嗚呼利休既没茶法不在
茲乎

貞享乙丑嘉平下澣武城中根宗番
揮筆惟梅軒窓下

利休茶の湯の大概を書以
為五常僕ニ為愚子ニ需耳

延宝八庚申年五月如意日

四方庵

宗徧

（印）

茶道便蒙抄巻之一目録

第一　茶湯伝来乃事
第二　客より道具尤含名物之事
第三　座之内乃事
第四　五座居様之事
第五　炉中炭の事
第六　釣棚之事
第七　堂庫の事
第八　掛物之事
第九　窓之事
第十　床花の事
第十一　手水之事

第十二　客来る時迎ふるの
第十三　炭を直す事
第十四　膳を出すの
第十五　客より水の間座敷往返るの
第十六　花の入様の事
第十七　茶具を並合す事
第十八　茶を点つる事
第十九　後に炭を直すの
第二十　薄茶点るの
第廿一　雨中の露路の事
第廿二　道具を見合するの
第廿三　床花掛物并持物数寄　褒美するの

目録終

茶道便蒙抄巻之一

第一　客組并人の事

一　客組と申事ハ何日何の時分より茶湯催し相客ハ誰よと仕てと書付を使を遣しても又おのつと連状をしても可遣也

一　数寄屋ハ何日何の時分より御茶進上申度候相伴ハ誰誰と仕候と書て何とそ其時分も御座候は久しく客

一　客の目録おもしろき後に来て見る者は一礼あるへし客の方よりも自身参り候て御礼有るへし

第二　客より道具見合并の事

一　客の中に亭主の道具を見たき道具あらは亭主へ断るへし

道具ハ出しておくまじく候。又一方に掛物の掛所の如くすべし
不苦候。茶事も是にて心得べし。但絶ハ茶事の外なり

附三　床之事

一 無掛物とかけ置し床は中程をとるべし。床の方へゆがみて
数寄者あしと世の嫌ふ事なり。よくよくすべし。無掛物は中をとる
一 床に掛物は常に掛て置ものなれば、客の目にかけ置事なり。目をとめて
のぞくべし。床の内の真中に無掛物と花入を置は、床の方の見るより客ざしき
より見る程に掛物をあしらひて掛るときは、床の柱より客の方へ出し置べし
又掛物の上下とても直ぐと見るべし。床の上へ掛りたる所を
又左右とも中程に置べし。床を出して無掛物
無掛物ハ中より上がらざる心持すべし。是等ハ茶事にも同じ

一 無掛物の長さ九分。其外掛物の長さはしるべし。違ひあるべし
より以上のものは世に多くある事なり。床は中にて見るべし。長さ一寸
長掛物も一寸ばかり下げて掛て見るべし。中と上げ掛物
かかとりたるは中をとるべし。又掛物も中をとるべし
花をとるべし。花をとるべしとはなに事ぞ
一 掛物は其宗匠の好の絵の掛物ハ掛けども墨蹟或ハ道人の書
或ハ祖師の筆の画賛などを用る事ハ茶事の外ハ無之。其
事を好む人は用
一 床に掛物を掛る時、掛物の先とくるりと巻て、掛物の床の柱とも
床の掛物の方を上にして、掛物の先とハ床の向の方をいふなり
一 掛物を掛る時ハ軸先を床の上の方より真中へ

壺ノ網と云るハ口覆とするハ兎角あり様ハ門一とせうち
結ひ紐のとまり口緒の糸をハ結ひと思ふことも用ひざるも有

一 網ハ無造作ハ縄のことをいふとも上へあし真ひとむすひのすること

一 口覆を角の方を並へ〆し結び緒ハ輪の方をとむへ折すへし
と云よ掛かりけれ糸にして真むすひ其ひかゆへ輪の方を
たるよう輪の方をおもてへ置くべし外ともひとくよ結遺へし

一 かんがへやうハ是へし

一 口覆ハさま〱ハ緞子金襴錦金入金入もとも様々あり
いはすれも用ひ不申し

一 茶入を所持して地盆に載せ地紙の糸より口をすべく向へ用へ
其の方ありとも寸法程に置く其の方の遠近ハ茶入

の大小によるへし盆ニ而別書にあり

一 聞香炉ハ名物ハ様々の物あれとも出しかけとも茶入などの風なし
所持して是ハ小ぶり地紙真中に置くべし盆を座より
向ふよし灰ハよく〱にしてかけ香を炷
雲母を九分四方に切り一分のめんをとる前より筋違へ重
ならへ飾る也是四分四方にして香筋横へ置し聞

一 香炉とも置ハ其の口穿なし

一 聞香炉あまたく手獅子の類所持して盆の糸をも
地なる茶入の所持して用るもの也灰ハ香炉ハ香をも炷
の獲物やう有同じ

其後 五徳居様同

一　風炉まはりへ居る事と云ハ、座敷のかまへ方に
し、床の間の右へよく見合して、兎角風炉一ツ斗つゝ置
れたる右の方に居るべし。委細絵図に記之

一　掃除の釜仕舞の時ハ、掃除の掃き残しなき様に付中寄せ
よきさ、置き様にて座に居る也。客の時ハ掃さんを
右に掃しさへあしくハ、ゆびを入へき掃除、置き様にて居るべし

第　炉中灰の事

一　口切の時ハ、いまだ世の中暖かなれハ、灰多くハ、湯をわかさよ
てよし。炭を置く所も遠くへ、灰の寄せやう、湯わき
にくし。炭ハ大小を三通りに置き、底をさぐり置き
なくかくして、置く所へめでたき程よし。客大の

時ハ灰もすくなくして湯をわかさくして、炭を多く入るべし。
炭は多く入れ置くもよろしかるべし。又ハ釜の大小にもよりて入る也

一　炉縁の真塗ハ口切より合せ塗にて、又ハ炉ぶち
縁ハ口切より冬中用也。元日より洗縁を用也。塗
炉より前も世の中暖かなる時ハ用ひてよし。かさ
合して凡そへんなき也

一　灰ハ立つ中に溜め置きて、灰を入れ用也。
物に入れ置くさい、ひぬ様に汁を用ひてよし。又わかさぬ様
ちいさくも置く灰もらりをしたる
雑も成しかたなり

一　炉中広さ一尺四寸四分、炉壇一寸五分へし。釜を仕舞ふ時

まつ灰を能して、炭細炭まても並へ置なる細かなる
火を入るへからす
一 釜を能かけし内に水さし大口より水を漉し釜に掛る
やうにへく炉へ仕舞へし

第六　釣棚の事

一 棚一重の時ハ香合を葉の方に置へし、葉ハ方と云ハ
と二寸程先程遠近ハ香合の大小によるへし、置かたハ
傾のかたちにハ四方の真中に置へし
一 二重の時ハ下の真中に茶入を置へし、上に一重のこく
香合を置へし、二重の間一重置ハ下て棚計に置へし
茶入ハ傍方の様子しだいに棚に置ぬへし

一 釣棚に茶入の棚と云有り、寸法ハ右のことくして、横竹下
より棚の上ハ寸て、寸法ハ分よりも、湯末(つゐさはうのさ)棚表へ分
まわりさ三寸内一分切ぬいて置へし、此棚ハ或ハ物数ハ
茶入の茶入を盆に此棚の真中に置此棚用ハ茶入を
床と付る事もある又床わきとても名物の茶入を
香炉を飾る床に置時又茶入床にとくに飾
此ハ此棚と用置し、細きとも名物を様出る
利休好や

第七　袋棚之事

一 棚の真中に茶入を置へし、傍若よりに次第置たる
湯棚の花時ハ此棚傍にも香偶に香合を置へし

置て。袋棚に用ひ。乃真中に居申を置。上に茶入を
飾る時ハ。下の底に居申を置もし。左時ハ底に居申を
下に置。下ハ横二つ折一つの緒にて真中に置也。
内の袋ハ口の緒に飾り蓋を結ぶ。小袋中結に為す事也。
此様に結びてよし。是に置て

一 床の前に差を庫と付る事。五十余より以後也。
茶を是に用也なくて此外ハ此物の如く。又の
釣棚を二つ置にて用候。一寸足らぬ元に居候

其八 釣燈籠之事

一 座敷に釣燈籠を掛る事。座敷の内中ハ下へ置き通し。客の
居所に影を写す。暗からぬやうに。釣燈籠に常に置也。

内の前の戸と柱との間の方へ置て燈に横五寸程の紙を張り
用ゆる道ハ書におさめり。燈盞ハ焼物を用ひ。但の如く居えて一
枚下にかさねて。下皿の上に置て茶ハ下椀に居申。
八分に切ておいても。其上置なり。下皿に水を入燈心
茶菓子に楊枝を用候。火を挑る時は能紙にて並べ置
後ハさしかへておりゐて候事也。たてまへ
其外の事ハ釣燈籠に書

其九 窓之事

一 釣燈籠は床前にかかりて消しても用ゆる窓にて戸をたつべし
菴を結ぶもの。能所に仕る窓にて
隣へ障子

うつくしきてもあまり作らくちさきんと云るし。背面の所を
家の方のあらハことに垣なとを云色し。さい縁まても家主
水かゝしさなしてよし

第十　庭池の事

一　水をまハす事。中くてハあしゝ。雪隠の前の手水まて立木も
樹木花石の所のとなし。客人の時まで。水を手水鉢
なとにもし水をかけ。雪ハ通りの道。垂石。花石のところを
よろしてよし

一　縁側より行燈をと垂色し。燈なと脇の。垂石より膝元の
所橋。大方道筋の見るまてよく。風吹ハあまり行燈の火消
とあまりさせて垂。風ゆへにより行燈の掛の燈をかけ垂也

一　行燈の形寸法の書よあり。大石下四方の如し
燈籠ハ木にても石にても。形ハ数多なれとも三筋也
月の入る時ハ位置へても見るし。位形の所に入る細きと
見合色し。燈籠ハ道のあかりともに操物さびさる所望
し。形のかたちの寸法よし。居様ハ庭池よりも花よりも
半月なるやうに垂る。高さハ四方よりも見て能合
またまへし。石燈籠の障子ハ火をとおさで時ハ入れて垂る

第十一　手水石鉢之事

一　石鉢の穴丸きよし。石ハ大小よりも寸法まて水ハよく
なとよ三つ四つ垂るへし。水のたまり所ある故よ角ある花石
と用ゆ。尾とても見合垂色し。さびたる様に。構ふ景と

これを又栖敷と號する也。亭主の栖敷の居様は。右衆の
肩席とさし合と様子に依て。肩せざる時は合をとり
ひけ亭主栖敷の前邊に居て。見物の時。前客に向ひ
あなどりこひゆるゆへに能様に亭主して。見物は大かたの
客衆の大かた栖敷ともなり。小児栖敷と申す。能見物の書
にありて。様子なし作る。書院と申は大かたな檜(ひのき)也

一 書院の又ちかき客をとむるは。客衆に此を申さぬなり。但
盛なる客の衆と申すべしとはいへり

第十二 客をむかひに出る事

一 小座敷へは。御中にて案内をとる。則ち中に入るとひとしく。客の
前の方に氣を付。中ぐらゐへ燭を持出ては。右

ゆへに亭主げんでてまいる客人居よまでとりけ。一礼致し
上下にわたる事とて。燭と同じ様に右の能人にあり
と見合てなかひとつもせず。おかしげなる事は無く候

一 客ひとまでむかひに出る人は。同輩ならば敷居の際まで
の内へおくて。草履をはき。客の上ぐらゐにぐらゐひ一礼致す

一 又客より先にひの者を中へ入置べし。詰
敷の座敷のきはまで御くだり。座敷にて通し、わきとの
様子あるべしまでや

一 客貴人ならば門外まで迎へ。御礼申上。客ゟさきへ
あがるべからず。御供へ先に亭主まかりて客をわけて
なかのもてなしなり

一 掛ものゝ時も床の中并に乱を付、座敷に入くまてより
へひらきて所作などありける也、勝手の障子をひらき
立て入べし

一 客座へよくとゞきて床にて出て間をとりて勝手
障子をあけ一礼をいたし、但座敷へ出る時見苦しきをたゝく
勝手口にて其身障子とりわくるには無礼し、勝手口
をも礼なり、足音など能様に座敷に出て障子
とをあけ茶能様にとりて座敷へも閑かに坐にて

一 座敷へ出て茶湯の前に出る、座敷へ進みよりかやうにもいる
の様子あるべし、掛物中より進み出て一礼して亭に
向ふ人などもして進み出て付てそれより後にて[illegible]

難渋など致し、たゞ之出るべし、客飲茶にて其より濃茶
いらぬものは水差と替て、茶入茶碗を並へ合、建水に
柄杓蓋置を仕込れ、其上に替て、右の獨盞を持て出、茶
と之茶せん茶を仕込、後道具をも替手へもちて入べし、然
道具を其の月替て右にてかへり、身茶を並てかへる
座も如何にもかろく事なし

一 床に香炉を置付、客香を嗅にあつへ、勝手より床
置かけ、香炉に火を入れたる方より左の方に置、右方に香合中に四
に香筋火箸立て置、其の後客の前に香の[illegible]
とも香を嗅廻して客を不移の香を焼て、香炉[illegible]
[illegible]及第一持、掛次より付香炉を持て勝手へ入べし

一 席に香炉出る時は香を聞すまして後に勝手より出
出て香の道具を取出し拝見を聞終て香
炉を左の手にのせ盆の上にのせ持て勝手へ持帰るなり

第十三炉の火入出る事

一 炭をあげて釜の紙燈台をのけて膝の内に置前の時のごとく料
理出て後客方より所望し炭斗を持て出る時は釜
の紙燈台を取て座の下に置勝手へ戻り手燭をとれば下
座の方に燭台を持て出勝手を紙燈台の下に釜の紙燈台を
持て出手燭を膝の前に置畳の下に置羽箒をとり
すへ置炭斗の上に置きて置火の下に釜の火箸をとり
箸を二本に分て茶の湯を出す環をたゝみて置なり

一 席に釜かけ置て茶をたてさする時は炭を炉縁の上に
せかけて置し又炭炉あらはに座りの時は茶碗の置へと
寄せかけ釜の蓋を取茶碗の紙を懐中より出し置所に置
此紙を釜の蓋の上の折目と表の方へ向け二方の紙の切目を客
の方へ向けて置し又袱紗の蓋置は炭斗の上に置
見れば裏表あり裏と炭斗の方へ向表と裏へし
釜の蓋を膝の前あたりに置様に置左に肘を
膝の前に置炭をとりて釜をあげ茶碗の上に
あまりに膝と並べず釜の環をたゝみて二つ
置たの内の火の環の縁に合せ置べく
次に合炭斗にあるは灰の左に置火箸を取出す

とをし。火箸に白炭付ずしてハ箒をあしくしてひ。ろ
箒持かへし火箸を炭斗のふちに立。ちりをはらひのせ。と
ころさ。箒を炉の内にをき炭斗を炉の内へよせ。ち湯と
なる炉のふちにをき。白炭を上けし。隅のくりまはる所をとをス
やうあ灰を捨さ。ぬきれ下へをし。箒にて敷なる灰を
ならさ。箒を右にをき。炭斗をとをり下へおとし。火
箸をとりなをし炭をすくひ。火箸をあてゝなさ海まはさる大炭
なり。火箸をとりて右のなりにまほして炭をなをしおすくる
火箸あけしをきてかけよし。枝炭をとをしよれ持あり。
茶巾の炭をあかり奥に入枝大へ立る炭を次よ
をきてよし。鐶をさのをあけるをも一しけらく

をき候。香合をも畳をと炉のふちにをき。羽箒をとくへ蓋と
をもとし。此時客より香合所望あらハおかきとしてそのまゝ
此時ニ炭斗へ入羽箒も火ニ遠く近く二ふちによく掃ふへし。
多く掃かハあしく初めてを膝にをき根に火に近くに
くへ掃ハ炭に火うつり後にあらハ出ることを考へし。
多くも色てよし。精進の時ハ甲香を入れる羽箒をと
取用御釜を用意し。鐶をかけ釜の上に湯をくるに
炉へ水をさしてよし。但昼も會ハ時宜によるべし。
て時に持出炉に左の所に茶碗の上にあつる
茶巾をぬくと茶所ハ右あり所ハ左ハ
通りの座に茶釜の前に茶巾をたゝみあてる

後ニ而て銚子乃臺を取盃の座上への縁の臺をとり
とのけて盃・菓子抔すへし盃の臺をとる銚子乃ふたの
うへにすゑ其上に盃菓子をはの通りの座にすへて水と
はくはらり鍋つぎ次に下に盃菓子あしはのけ銚子に乃
前をとりよりはうへのさし菓子抔かうの盃の臺
とりて菓子あし盃をかさね五行の上をかさねるのおり。
はく銚子乃臺をとりてはなし菓子に盃と提子のはの人の入なし
ひ銚子へ枝の木状大中小のこうすに盃の人はかなりとみれ合せ
中よりも同様や濡銚子にとおもての前流すへ其見さて盃
よなれく濯と通のしてずしやうも無様も物附
と其のうらし鍋盃をうけ其濯をなして後に是も盃

盃の底と懐中して盃乃ふたとりのくゆび返し左脇と
其の方袴のそくよ合ろく事也句をはなれに於
及鍋濯をとりて炭汁へいま提子へ元入のし押菓子と
元行る盃の上元かへりとえてさ提子に口へ鍋の
菓子と其よ盃盃乃臺をかけ燭臺を左提子へ入置。
鉄居とるをとりて鍋ある様中にあり新様はなと
なさやと伺てうし家より提子に入事にて置
其附提子に元様子なとるてへあり

第十四 膳ハ持出て事

一 客の提子前よりすゑも膳と提子・提子に口よりくびの様
子をあけ膳とともにうらさ附る様子をなしさて

汁也と客同時に人々汁へ移て出くる所あれ前に喰
食へし。其時汁をかへ扨ひ入てよし。初手の汁を
手の内に置汁ハ又座へ出次の人の汁を入て、次の汁をおき
お入次の汁をかへ、前の人すへ汁をおく、あひさ他の箸を
箱の上にさしておき出て入、次の座に入汁を移しておく、飯椀へ
こなさハ出て、入に後立出酒を移して出る。立て一度に
敷ぞれてよし。又飯を取にきたる時ハ指扱次第におき
なりたる吸物を出の通りに酒に献数過さば湯ハ無し。
湯継を通ひにおなじ吸物湯の子おなじ湯桶をと盃をおき
ともに正客の前より通ひにかはせて、お湯とおなじ。
此時も湯子と立てよし。客よりきたる時も湯の子に立

おけあつかうよし。湯盛をく時かうより右より出る指扱ハ立る
所存てよし。但あかよう成へし

一 食の湯をあもと時かうより座北へ入ともし、手水の水をもちて
よし。客と主人の時ハ座行口より出へ湯と又則行口の右の方に
立ぞと水門の方へ出もし。此行口ハ真実に傍人ハ座客
の水盛の右に水のよう仕来くかさ合せの実用に此時
あやとおきたし。客と主の時からへおおすてよし。指扱ハ
あおけとともにあ客に膝直へただちに置もし立もし

一 茶菓子の事かし。傍ニとさるてよし。客の手水をとる時
菓子の事をとれへし

一 茶菓子ハおさ出して。則膳の左に汁のあと汁一種出。

一 揚枝と云ハ座するをありハにしあ物を多く揚枝は
座するをあり七八寸一葉の俤ある軒花の付とる
事なり

一 第十五 床の間花席様之事

床へかざり置花乃本寺と称風帯ぎハまで手おた
床の本の中と称床の本まで置花と床より
おり床まで下ひ床の上に掛物と置風帯
とさんの本の中は女仕と称掛まで掛本中まで
風帯と称女弦も折り本へ押紙掛物と申まで
まり出る流れけ下流にせんかの筆に得

一 窓毎にハ帰ならとかけ床をかけたと揚る三つ亂れ

一 よりておりゐをんと作くさわけ花さかい長短と用也
す法によりて花と尺八入りよりて作くさわけ乃作りかとさり
長さ七寸三ミ分之中よ二つ梅しと入れ、但来方増より
二寸七八分ありてすりし花と用る時て行ハ来と下に
て切くちハなるへ作くさわけの作りかとくみ揚るへし下
と同花梅花瓶とさとのこひて花と入へし

一 花篭仕込様乃事 花を篭の真中よ立て花の方にハ
たの方ハさんよれ水盤て茶申よと立床のた乃方よ
薄板より茶申立て花とへ水と指ほ京但茶申ハ右
ささ能あり

一 とく花への付て薄板と床乃真中に立かけ奥へよせて

一 よしなひ人のとさらすなかだと奥へ入をしらいさんとといふ草摺
引合しの重くうしろの胴のはなしの定にすへるなかだち
への大小がありて重石法乃手本としる蔵を一寸ほど深くよる
さてもらいさゝ花のまへ丸板乃合しよしとて附の吊へ肩つまの道
一 ありし向の手くぞなりし前ゐむせでうし後は通し前板九板計に草摺
とがくさ合をゆるき人の甲乙よろしく勝はへたる地へさゝさ合
よし傍をとくさ合と胴口二つ立つの寸法は奥の鉄にまよむ
一 とつかふ人底すてさ時は勝に鉄の上手にとあけ宮にかりての前
所の重き前板さ後の上手にとあけ丸の甘くくりしてを附を
重くいてと勝に鉄の上手にと立竜し
一 家臣このともかし二寸五分の鉄の行乃向と板立くの世てと述

一 おりつを附の板の四方真中よなり人と重ぴらも板取りしよ
重へしい定ゐ衆奴嵩よ絶もて
一 勝もて大すの笥竃へかけて通し前板よのつぞ所成の東の
とよ重てうし
一 かなぬのなり入おがれよすぷ形と八分めのたんれよめし肩の板あり
所をすゑしびとんとたつとり乃総をとえたのよよ草摺中と
掛座よれ係揃くい前後の上并重し
一 鉢のなりへ今の地鍍地組地瓢行しぴ行よ切板三とあり
一 まを切二三寸切又八切もたれなり鉢のかたち所の内ぴらの乃
従成の板又へ左衆の偶もも行ありなりへの板又小
よろびげ不損無とふお遊そまりのとだれ行すべ法あり

一花入ハ四季ともに露をうつべし。但時によりてぬぐべ
きものとあるべし

第十六　花入様の事

一立花のごとく中にすぐに立て、へだてなきは悪し。様よ
りかゝりをしたひ、なりふりにかまはず、さしくの事にてまはと
うしろへさゝぬやうにさしくべし

一なへものゝ花入は[illegible]かたをとおのへてよし
[illegible]の道具を新に[illegible]も同前也

一竹二重切に花入る時は上の重を第一の入所とする時ハ下にはいけぬも
かまはぬなり。下の重は[illegible]

一鶴首も[illegible]しげ[illegible]肉の方直なる中に[illegible]

銅の花入は当代々胡銅によるべし。花入の人ハ
大かたは[illegible]すまじ。当流には用ゆ
ることなし。鶴首も当流には不好

一花に梅を好むは当季は[illegible]を用ゐるべし
時々のはなむら[illegible]今は花の[illegible]をよしとす
此心ふかく[illegible]白蓮花一つ入れ用ゐる
事もあり[illegible]古今集秋の下に大
池の辺にて[illegible]
大沢の池の方に菊植てあるを　友則
一もとゝおもひし菊を大沢の池の底にも誰か植けん

第十七　立合の事

一 水指（みづさし）何事にたゝみまでぬりし物は下に置べし。但真の
手桶又は真塗は置合せぬりさしばかり。真は手桶を
炉の時も風炉の時も左の手と横に置く。柄杓は右手と
置合せし。二つともに置合せ候。柄杓及蓋置は勝手にて
茶入と建水の左は置合せの外より出る目の間大工の三
目の間同前に置。但茶入の大小によりて位あるべし。花入柄棚
又は書院庫などにても。此時も前のごとく置てよし

一 老人は茶入茶碗置合せし。柄杓蓋置も柄棚の書院
庫に置ことあり

一 書院庫の時は初めより棚などに。茶入と建水は左に
取りし置。ゆへに縁には茶入と置合し書院庫は

必書院の物ハゆへに書院庫の内は棧に柄杓とうけ蓋置
も手下に置く事をさす者もなきにはあらずや

一 座敷を掃除して道具置合せ、お客を待て。客の座に入は書院
より出るの戸を立てあけ置べし。亭主も見て手
水を入てすゝぎ。又此時くゞりの戸あけども銅（どう）井事あり。
亭は古織より初る。古織作候見て居候時、数寄屋より
勝手まで往還さゆへ、座敷の往来の為へ出れざれ
付て書院の為に候とて程よき座敷を
下は勝手出入もし。人毎に候と申す事なれ心得

一 客へも茶碗申することなし。茶は早く花入置の後に出す
床の方より程よりも茶碗に置てよし。物を座へして

亭主と客人着座極時ゟ勝手の障子をあけ出べく
なとりんやう次第とらるへし

第十八　茶立様之事

一　客座よ入着座の時亭主茶碗を持勝手ニ障子乃際まて持出て障子をあけ茶を立へくさやうニ客何ひ様拵へとかくの茶碗をたて乃手に持水垂乃前へ持出て茶碗をたての上へ置茶の入をとんぼさせ垂れ茶杓を置茶碗をたての手にもちて置よきく亭主座乃とうし

一　建水の内へ蓋置を入柄杓をのせ左の手に持勝手ゟ出て其手にて柄杓乃柄を持ちて置へしと候へと持候へ少引左の手にて蓋置をとり右ゟ上そ把ね乃柄杓をのせ九蓋置よの前に置とめ同しくて置へし此時客へ亭主居たことりしと云へし

一　茶碗とく立たるを左の手に持出る事なる柄杓とも建水のに持く蓋置を入れ其後に持て柄杓をとんぼ持出て置く建水左の手に建水持出くへし然建水の内に座くくと其時老人へ自見の身をはなの人へ出たる事くまて持出へし

一　蓋置の事は引切の内へ用ゆ後ゟ時なれば前ゟ用ゆ事下手…風炉の時も行の内柄杓の柄の通りへすへとし置て其生新へ置と行乃

一　同しくハにしりて水指ハ足一ツなきと竹の間乃方へ置て
茶碗を左の手にもちて右へ移し右の手を添茶入へと右
の手にて茶碗と我膝との真中に置(ぷ)をとりびんの縁
と申ハ中ゆびをしおさへてくりかへしむすびめをはなし
のゆび二ツ先ふくへとさへのぼりて置(ぷ)くりまして茶入へと
指(ぷ)茶杓の通り(ぷ)はりざいと掴(大ゆび)まして左へ(ぷ)かけて
茶入の縁は左乃方一筋茶入へ引さ落よとおかとのけ(ぷ)一
先ゆびを引とまし(ぷ)をもてして向の方と左へ押出し(ぷ)左乃
手と茶入のよこにかりひ(ぷ)はりと右のゆび二ツまてかへ(ぷ)
左のゆびあてかくとあと袱紗の中へ押して引出し(ぷ)むすふ
の袱紗膝(ひざ)の前とをまして引乃(ぷ)茶とうりの(ぷ)

右の手にて茶入乃上より掴あげ(ぷ)左の手の内へ載(ぷ)せ右の手を
向へ返し掴(ぷ)みの右ゆびにて袋乃口を押(とし)くりかけ(ぷ)ゆび二ツ
ふくへ向ける網引の通りよりさへとして袋の底
と掴み袋と下の方へぬくさらし(ぷ)なんそこにふくへ茶入へと右に置
右の手乃ゆび四ツ袋の内へ入(ぷ)掴ハ弐まて茶袋はたまえ
下より茶入の方へ掴ぶら廻し(ぷ)右乃ゆびをくるみ紐乃通り
座とす(ぷ)右乃ゆひ袋の内より出しさ落よすとるの方下
より中ゆびと緒の間へさし出(ぷ)掴と緒の方へさし出(ぷ)を緒
とり出しむすびして(ぷ)それを通よ中指の袋より置よ(ぷ)
とるも右の方まなるへし

一　中指さしむすびの方膝の前に座の内へ袋の上に置

一 さて袋乃庭を持たは紐をとく又へ押やり是をはしの
方より前へ折かへし時に折り無れ方よ乃しめさをとり
とらへめくりたれゆびめくり引出しとめ下へ置
擂ての方の捨せれはまれ無乃此時をおしとめ揺たれ方
よ成へし

一 茶入の袋ぬく時たたれはぬ茶碗乃右に茶入よりは
ちかくへ置へし

一 帛紗さきよれの縁よりさぐりたたみ左膝の右前より
指経前より向うへ折りて茶入乃蓋のうへより左手にて
と拭き左手に蓋を取さ袋のうへよりさしひれの拇よ
うけ右手にて茶杓をとり拭きて茶入の上に置なり

蓋の段二にて茶入よりて蓋は右合わせのぬくの躰に
右わりひらくぐく盆のふちへ茶杓の上に置き帛紗を重
ねたたく上にのせて茶を残りに二つにたたむさて茶
杓のしずび時に茶杓れ左手を出しまはりさくれを茶入をも
蓋よりはせ置く茶入の九合へ縁あわり

一 茶筅をたてて次に袖をそれ置れし茶入より右合とて
そそ右にやく茶巾を左れ水差の蓋のまれそさう倶茶盌の
右にうちふりかへせ茶渡し蓋の時右茶杓を拭き
納めて拭くさめく蓋乃かへりを拭くくぐらずにては
拭く取次方へ二つ折りそりを拂指にて拭くかり

一 柄杓をたて右手にて左手へ移し柄を握えて上げたの膝の上に

かさねまとて蓋柄杓の合内の上方をもへ見へく掛釜の
蓋をゆび二つかけて元の蓋を置よろしく小置へし
一 柄杓をとれへかさねより下の方柄さきをよくおけんなく柄
さきを右の則たんまをたゝみの内まて持る掛置さむつゆび
のちからハ柄杓の柄なりこに遊しきるへし。猶道具へすん
わ様其なくて簡略なるへし。掛湯をくみさ後より柄杓の
合にハ強くくてもよ。掛を食指中ゆび(大ゆび)(ひとさしゆび)二つあてゝ下の方へ
ひ○つゆ釜の蓋へさし也湯を汲揚くし汲置ハ合なくてむ
下りよ左つかみて置し。只合とおさへのけくる付るとのつ
湯合一ていよ入こて附をゆひなくひ○つりぐと置し
て湯ハ釜の底をとらて水を上を汲くへし

一 茶碗をすゝぐ湯の事。掛きる時ハ茶碗右の手の時ハ湯
を合すへし汲茶碗へ入掛柄杓を釜の口よりかけ置。茶碗
を右すゝぎ湯を捨。又湯一つくい汲入柄杓をとりたゝみにおき
釜の蓋をとりて蓋置に柄杓を置へし。掛茶筅をとり
茶碗へ入茶筅二つ三つ点し。扨さ後に持つりすゝぎ茶
の水に置附。塵をけがさぬやうとりてよりおきあたハこれに
なくハ右をとらず置合なし。茶筅にも表裏あり
一 柄杓釜の内へ合をと入つけ置すは扨こかと猶とく湯を
合にかけるとあまりし釜の口のうへ持ちよ置遊され置之柄の通り
右釜の蓋を左の手にて茶碗の右の方のきはめよ置
一 茶巾をたゝみなおし建水の上へ持ち行。指を上がりあまそ置く

ごとくなる持だなく茶碗を右湯を持て持さ候は持となり。
湯を汲さくさりとすて茶巾茶碗をふせ候に茶巾を
茶碗の下よりさしてつよく拭さ茶碗の内へかけ
拭さ也し内の底をふきさ茶碗をたゝみて下に
をきてまた茶巾を入れて置て茶碗のうちをのごひ
さりしまゝそれ水指の蓋の上に置ゆべし茶巾ハ茶碗を
拭ひ茶入の蓋ひをりてそもそも茶巾に置き
一 茶杓をたゝみてそれ則右の膝の上まで置て手
かく茶入をとりてに茶杓を持て茶入を引すへ
茶入の蓋をとりてこれゆひの内食指と蓋を持て
よし蓋の置所ハ柄杓を釜にかけ置たる時柄と茶

碗との真中に置てよし向茶入茶碗の真中通りく置
蓋を左の方にある時も右の膝合に置べし柄杓茶杓をとりて
柄杓茶入をとりて茶碗の上に置かれて茶杓を右に握り
入て茶杓をとりて右に引て茶杓を茶碗に付かる茶を茶碗
の内へ入れてすくひ則碗の右の方三分一程に茶杓を
あとのけて置茶入の口に茶付たる茶をとりて
出て拭蓋をとりて右に置候て茶入をもとの所に置
茶碗をとりて茶杓を右にあく茶をとくとふくみ置
しぶ茶入をとりて持あく茶をとりて茶杓に
付たる茶をとくとたゝき茶杓を茶巾の上に置
茶入に載置なり

一　柄杓をとる事は釜の蓋をとり湯を汲事前に同じ。茶碗に湯を
汲入柄杓を釜にかけ置。茶筅をとる事をすゝぎて茶を
掬り仕置茶筅を茶碗の真中にてぬくゝれ右の方に置
たるにあらく茶碗ありて客へ出すとき置所なきし

一　客茶碗とられ茶湯の色し時茶を入られ入釜に置

一　置たる柄杓とれたへおさし釜の蓋をとりて柄杓と建水
乃上にかく。其後建水の上の柄杓の合ぬ内掛け建水の表
の方三分一ひけ。柄をば膝の前へ節返。釜の蓋を右の手にて
元柄杓の柄の下建水の中通りより一切の樋を表の方へあけて
釜蓋の方へかか向茶とのひすり。茶碗入んなうしあらはに
ちじ。客へ渡し蓋釜とて右の手にてあくかれなし

置たる右の手にて釜の蓋をとれ。茶巾をとり右の手に
てかの蓋の上よりかけ釜の蓋の上へ移し置。水指の蓋を左の手
にてあけ右の方へ置。蓋の内茶杓の方をむけ建水の上にて露を
きらし。右の手にて向の方より前の方へ拭て、客の前の釜の左の方に
て柄杓をとり、右へ取直し、前の方を釜へ二三度かけ、指添て釜に置き
かけ。釜の茶碗をとり膝付前のほとく我前に置。湯を汲入
茶碗の内茶巾付たる茶筅右の指にてあらひ捨し、やがて釜
でわけとて湯をすて茶巾にて拭ひ。さてまた
前の方に置。蓋をあけ茶入をとりて仕置なるがよし。柄杓をとれ水
を入る。又右の茶碗を取、一二三へ茶方に二ツ入。柄杓は釜に
かけ。釜の茶筅をとりてすすぎかけて、あらひ。茶碗の釜茶筅の

下る方より入りやうに置しばかりすゝぎ茶碗の縁により
茶せんをおいてひしやくを取りあげくとふちめしたるはよろしく
茶せんを左の手にて置茶碗の水を捨その捨碗の右の方に
置くし柄杓をかまへてのごひ茶巾にてふいて下に置茶
巾を左の膝へ入柄杓の柄をたて中を茶巾にてふき茶碗へ
さきに置たる茶入よく茶杓にて付る茶ば柄杓茶碗より
柄杓にて茶碗のきれいへ置て出して柄のみじかくあてやうにまで
置茶杓の柄へ付る茶かけ茶を入れさせきれいあへ月の
ごとくたの膝にもたせて茶入を左の手にて蓋をし置合せ
置し柄杓茶碗を左の手にてもち左へ持て茶入と置合せ
て蓋と置合のとかへ合せたるとし

一 柄杓を左にてもつて能能釜の水さし柄杓を左へ移し釜の蓋
を取て柄杓を蓋置の上に左の手にて置て水差
の蓋を右の手にてひらき蓋を置とすゝぎ時ならば茶
入の口に置したる時茶碗を建水の右へ置し柄杓にて茶
の手にてかへし茶入の蓋をとり其茶の
入れ口の内を拭き蓋を置して茶入の右の方のごひ客の方へ
出すと柄杓をたて左の手にて蓋置をとりて柄杓を前へ移
建水をたてて勝手の方へ出る蓋をし挨拶をいたし
勝手へ入るや
一 柄杓を置き蓋を取り棚へ置き勝手の方の障子へ入り置く
一 客人の所作ある人は茶入茶碗をとり棚へあげ柄杓へ

一　隅に三ツ並ぶる柱に並ぶる也　置合ハ下にあるべし
茶碗をたゝみ置くべし　但其上を茶碗へ添て置べし
扱し客の方へ向る様に道具へ並べ袋を取口を前へして水
壷の其上に置　茶入を乗て置し　客より袋の緒の方
も見る様に口の方を客の方へして出す也　下座
の客へとりて茶杓を碗と共に取くる時正面を床の方を
客の方へして　おき直し又袋の方を客の方へ陰子を差し出
て炭取炭斗へ組入るゝ時　又袋の時は陰子をとも
如く据て　菓子の出方を直し

第十九　後炭へ直る事

一　菓子喰仕舞時分に炭斗を持出て膳に並て置

子に蓋を取て入る　炭斗を持出蓋を取見の前に並陰子を仕舞
火を直るとて前のことし　掃炭を仕道具炭斗へ入る
事　次第は前に同し

一　此炭を直る時釜中は湯へ入るべき内水指を持出灰を入る
まぐりあり　当代は是あり　下地の湯を出してし　一切不
仕得ぬ事也　客への心持あくなるへき所肝要　茶
の湯仕舞に時節を見灰を仕ゆへ茶の心に合
て客によりて様子よく様子になれて炭をとりて仕分次第
当代は客より此時席へ灰を直し　茶の湯仕舞の時
を見へ仕くて下地の事大方客より下地
あれと申せし客に任せ候へ釜の下を仕合あるへき也

掛けたるや。揃ひ時の炭も茶の湯よりかろく候よりも見
てのよく直しかるべし

第二十　濃茶の事

一 濃茶を淡なく候こともいつも先に濃茶立る
よしと云て於ては当流は濃茶の時も淡茶の時も
おなじ事なれど釜の湯の煮えざるのしかりよ替かけ
るべし。但道具をいれおき地なくよし。水とか中かも置く
も茶入を濃茶と入く去と棗よありハ。其流計り
立合かし。濃茶入引の地よ入てかし。但濃茶の拵りと
濃茶よ立る時も初めの茶入よ入てる後て出合立てかし
も袋なれ入や

濃茶立る時もし点ひの仕様あり。淡茶をさきむかる事もをも
ひてはからくいと立るし。濃茶ハ立ていとあけきはおりからる筈
なり。茶筅とてる茶の立様と真よ拵たるし。扨て濃
茶を立候一通りは熱き流にし。方事の前の茶碗拵へし。
此中へよ宗易も濃茶立る一通りぞ置る立得よと志
めしるなとなり

一 濃茶立る仕廻の湯なんと云時。後一炭の地をも度らの
あるとわりへ事を早く下の拵様ありへき事也。達てらしむ
時も結合て湯よ入へきし

第廿一　灰撒く炭仕様の事し

一 炭斗も拵と拵出るしの茶入よりし。但道具並べ並釜

揚の事も前に同し。下火とる時は灰を遣し。ちゃうとも云
に遣ひけりも白炭とも云ふとけし。そこ○まるの灰を
も作くろひ火の上へも灰を沢山ように炉中残り繕て
て、ちゃとのけ。炭斗を遣し。香合と火箸とをとり
蓋初後火の上灰の多く残りしるへよりなくし。撫炭
ともなさしぶ炭に鉄ねどいでうとやうにあんしすべし。
火斗炭数ちかく云ふところよりまた一くしゃ火遣しに附
りし後ハ客へ客よりて炭をかけますことあり。多分へ文
事ニ逢くのも湯へ釜をあげしる時も而て見し。茶湯
乃御遣へハ炭を床とも下部の切者又へ
客にて乃流者すらへ炉中にく湯気入るあり文

一　とも御炭を中座とことてよし
一　義天の時ハ客乃ことおよび座流衛すてもれとおするがよし
一　炭結を〆て諸道具入れ座にお膳と請ふし。時附後の
礼の事は様後そへし。それ後で客より請け取後をと立
入客者とおもひて○れ人とさしてけら
近く引付けとにまつそくのうへとあけ遣りて出べし。
茶より座よ亭の方までて遣りてくうし。万事能者に任

斗廿一　釜より炭斗立合の事
一　大きなる釜ほど炭斗ちいさき附て炭斗
大きなる一段。大小の間もも釜高くさき炭斗下ク。

釜ひさくハ炭斗高く寸法相違ハ茶筅を組合せ炭斗
と用ゐ候へハ熟し候ま侘ハ各別一段よろしからず

一 同 火箸を据る九合の事

一 夜之茶の湯ハ手燭さうり燈火炭を用ゐ燈ハよき程に炭ハ
茶桶の火炭とも火箸大ハ中小九ニ段ありて炭斗大
するまゝ夜も炭に中小ともふりわけ候を能所なり

一 同 釜にかり水さし九合のこり

一 釜と炭斗との九合ハ同前なり

一 同 茶入より茶杓九合にて

一 炭斗と火箸との九合の内にも茶杓九寸法の定と志る
ゐし板より茶碗二ツ置出し此時ハ数寄者の茶杓入の法

一 同 茶入より茶碗九合の事

一 釜と水壺との九合ハ同前にて候へく茶入大小形ニて
ありて茶碗の形よりて九合之分別可有之候

一 同 香合九合也

一 夜ハ燈台ぬ茶やさし物と用ゐ候ハ夜之御所合点を
ちて燈台と用ゐ候に燈台よろしく甲乙あり程及第

一 同 茶巾帛紗九合也

一 茶杓ハ茶巾よす法を定め茶碗に大小あり布
よ応ずるところ茶碗よりさし能々吟味して一段心得
さき九ハ能くて八寸ハ小也わきと置合と二寸
を用ゐ寸法ハ八寸二分より九寸よし

一　同　袋掛并掛緒差緒の事
袋の口の緒中程より結目下へ一寸五分計上に利休ハ頭
緒のかけ付古織ハあけてひきく付候　宗旦ハ栓
をとめ七分に割并て此結目の方に付候　捻紐を
用ひられし捻紐とかけ捻されより三寸計の
て其緒の末は先の掛緒差緒の栓ハ風炉先の方に付
栓ハ先に出して大方其左へ余る所の方へしめ置
ありて方へ結ひ置て　尤掛緒差緒用ひ候事　尤も
さびたる所ハ掛緒差緒の形道具の書とあり

一　宗旦云　露地掛物松竹梅并塵穴の事
露地の飛石ハ山の様を見せ　中一の松ハ松　梅　紅葉の類

露地ハ外にて雅及草木を取合の心得付候
花の床にも入る草木をあひ露地にハ植へし　古織ハ桜　楓
など植え　是を好みし　利休ハ中の色をも花を嫌ひ摂大
臣の庭に枝をちらし落葉を刈やは新敷所年を
経ての露地の作様ハ茶道の肝要と一周云謂るとぞ
利休露地の作様ハ花と一同に取りまし　所に
心を付て見る　ハ山の家作の野の景色を見る様
もれの景をもちと見るやうにしたり

一　塵穴の事　露地の塵穴の角へ石をもやし　ちりへうけて
塵穴しかし近く露塵箸ありて中にくく長サ一尺
に割して置　四角ひろがり方にてめんをとる

宗旦云、古へハ庭へ宗ハ松葉などれ見へつけく掃すり松
露地よ松葉をちらすら自然の躰を撰乃葉をゑて、
よし是ハ　桜乃紅葉ぬるよ数行けりの奥山寺の道
そうはひ、さながら古寺の躰をあらしめく也とぞ
申されけり

茶道便蒙抄巻之目録　二

第一　茶之湯御数之事
第二　茶之湯に約河之事
第三　露地入之事
第四　進物之事
第五　座入之事
第六　膳部之事
第七　膳盤之事
第八　後座入之事
第九　茶立る時之事
第十　道具を見る之事

第十一 炭取置之事
第十二 客怠之事

茶道便蒙抄 客方二

第一 茶湯御案内之事

一 茶まゐり何時にても御茶進じて度との招請の時は
その返事にて参るとも不参とも返事をいたし相客の様子よく聞得
其意を得て後に亭主の方へ礼に可参ことのよし
一 さて礼に行くとの時は先通りまかりして猶又茶まゐられん事
の通り申されたらば亭主宅へ挨拶すへし但し事によりて相
違あれは不参の礼に参るへし亭主の方へも如何よる
伝よろしく頼むへし間断要なり

第二 茶之湯に行時之事

一 朝茶といふは世の中刻より以後に行ふ様より以前は解事

一 あり〳〵云事中ハ名利ぶの上懸時方ミ如く之表より
儀式時と時ま一葉内ヒ見へ也し。屋内云ハ依午時剤
五葉内見へ也し

一 桐ぶの所御同道故し给そろうし能まへく桐家
の作宅満り同ク所ぶ時ミ御方如く御合ヒも十
御来ヒろうぶ又ミ出ヱよ葉方ミ入给ぶ能くいひ合を
也し。去入気给そろ時又葉方ヱ入葉内と云入れ家の
れ来の所来ヒ此の合うミ方ハ見ゆて来そろうしヒ通
也し。其時ヒより桐ぶハいかゞミ所時来の時しも。此れ入
あまヒとの事しぶハ同家の様故の時ミそ九合よ侍て
入也し。そミ云出事時ハいきまヒ御合ヒも也とミとうし

達て少。桐家の御合入也しむ時直よまろへし
付之 座地入し事

一 葉ミ己むろひよわびむ一孔ヒ下。上下れ此へ上の縁ゆうハ
様故に出よ故也し。むミへヒそ通の九時そミ也し。
梅ミ戸へヒミうけ入ありぶそ時其修入也しもヒぶ様子
まて入去るヒれも時。おゆへ前後れ時直まてく西家
入り入候り

一 桃云の時ミ己よ楊ヒ称おくぶるヒ九同ぶかよ垂也し
ミ様ヒ西家の様路く侍ぐヒ道のろ申うやうにお手
入てよ気ヒ付。書屋よむまて所名地ヒ也し。
桐家如ヒ能の人ヒろやうにヒ也し

一 貴人主人の御給仕の時ハ手燭を持御出あれハ参るへし

一 座配なく相客の中に何程心安くとも耳新しき事云出す事ハ無用なるへし言葉ハ無用なるへし額ある茶入ハ其讀事無用なるへし尤無用なるへし

能々も勝手口より外の御はなし(?)けうへし

一 釣釜にて茶の時ハ其茶を給ての後(?)茶を好む人之

但茶は(?)ひとりしく手水も持て出るに半に及ハ脇氣ともめん

茶之座にて手前の打から其ハ茶の相よ茶とも言

跡にさし置ありて茶を続まいらせ手水を持て出て勝手へ出

入べし候へく出べし貴人主人の

御相伴の時も御手水とも可申候

一 手燭にて手水構見るに出べし能々ぐるまと又ハ相客

の跡よりまゐるも遠慮なく前の御方へも通るやうに出へし

夜咄の時ハ跡より御通の衆の縁下に出べくもうし

一 夜咄の時入口に行の手燭あり其燭なくハ続まいらせ後

行に出るの後ありて手を前にまておくしは座敷へ

入さ後無之ハ出ても不苦かけ出へし

一 かけ物や同客の時も手燭あり貴人主人の御相伴に

参る時ハ同棚に燭台を出し燭に紙をあて所々燭の

様に立かけ出し扇にて乳をたてて座中へ

持くらし候ものあへくさとて候ふ可申候 但

同案内ハ右列の事や

一 くちを人とあけば先内の様子を氣を付て見るべし其身は
とりさて膝をつけてむかひて入る時に又膝を入て向
は其方へ取うちゆりかへさるべきこと也で下の縁に
立居の内客数多乃時は雪踏をぬぎて上座へのべからず
貴人主人の前相伴に参る時は必草履をぬぎて上るべし

同 進物之事

一 主人へ客より進物致す事あらば茶の湯道具など持て
参りて出し青木の類ならば其外の物は進上の物を一つ遣
たり物もいふべし前に見て置くべし
菓子など持参して置く
口伝 座入して挨拶の事

一 正客座敷へ参る時は床と其外の飾物を見物して
其の後其座の上座の方へ先へ通る座敷の緒
あるべし次相伴衆は嫌われ又は棚の道具をもとの所
を見次第に其後の時座敷の様子をあけて見るべし
次に正客は道具を見て内に次の客座敷に参り座敷
をかへて見て後座敷にして其内に正客の書付座
の中程に座をしめ正客の見物をしてから次の客
相伴衆へ参り其の上に三の客座敷へ参り又其内に次の客
三の座に着きて三の客相伴衆へ参り其時正客の座除へ
詰次の客も同様に其時三の客末座に着きて也
多く座中二人三人あり相伴あるべき事一同なるべし

便蒙抄巻二

正客の座席へ続く座てより一間の本勝手ならハ上座と
あけて下座に座へ三人ならば書院の方にて其の次へ客まで
も一客の者くもし心得べし花又絵掛にて紀も。一
客より三人まで其三人をおろし座て居て曲尺の座に
居るハ悪し此座の我縁より目の下に膝ゆかぬやう
やうに出るへし むかしにて帰り居るべし

一 茶を出す時亭主勝手に出るとも亭主へ挨拶 茶菓
あいく茶目礼より亭主を茶菓に饗せよかかるとも又
茶菓ハ台付をもちても亭主に挨拶の後ハ出すべし茶菓
とのことなるべし

一 本の礼儀は茶湯世の人の難儀なるべし 夜の燈火林間にて

料理なとありし時ハ茶の湯道具或ハ膳具の類なと
あまた並べ置きて花の茶器をとり出し半書院の床
中あくべしやうにも先ず挨拶せざるよう心得べし
其の時茶菓を出すへき事あり

一 茶を出すく膳出して其の時亭主の同客
ある人挨拶して出すへし肴ハ亭主膳とすゝむる時こと
御か続れ候さ亭主茶菓をもてなすべしや

一 炉の時ハ縁の方に炭とも亭主の参を上げ。
其茶に小道具と出して火箸を此時亭一同より
よりして火をとろん炭と見て後へ入れ候て炭
一つの亜とて後の座にて一同よろしく茶をかうま

老人気よわくなり座結ゐ一同よ見ぐるしき事勿論
又の扱事も茶菓也とく色香合並とも付香合の
見せあまきと茶むべし

廿六　膳出す事

一　床と結ゐ膳とおかしまりて必膳とも出すべし付
かりしと座りて給仕は右とみれりしや膳と中まで膳は
載せ下りの並べて付次の事座給仕いたし向よりきれ
れ通ひと必出来しおまきとやしてうし膳出しともに先
またても茶の膳とすみりすりて付あり一同よ出
れ通ひの者と出来し先れ合後いろへきこゆるとやるべし

一　飯れなきをりくひ給ひてもとより食盤の不出付は膳で

あまりと申しても付てあるくとも通ひの者まてと食盤
おし出し家の膳先よ並かねて付合の盤とされ自
身とりてうし汁とかへの付かもあつかれよらひ
て遣しと申し膳の箱よ人箸あるく引物は茶は
おかまよは先へ出下りへとや膳の自身よりてうし

一　通ひの者おかまの膳先よ並らるはそ速されてどうの廻し
きりがうしあまりくもそ給並く後は廻し又壺皿
の平皿あるく引物もそあるべし

一　膳よ菓子の楊枝付ておきて先箸出しりの前よ楊
枝とられ膳の物よ並くらし湯との給ゐとらや菓
子の出しめとらひてうし亭主の人へそつしめもあく

楊枝汁付おとしすることあり。其時も楊枝おして取べし
前のことし

一 酒出る時は必盃を取おくべし。取て後に盃を付て酒を
うけ肴出る時は段下に置とゆるし初献なり一献といへ
ども其かたによりかはる事あり

一 さいの内ぶさらしの汁を付て箸を付ざる内に箸を
付る時は右の手を椀にてあぐべし。猪口かうじ物を
とりて飯を食し後に汁を椀。皿膳の内へ組入べく
うし。先わし膳のまへに皿香の物付る時二つ置べくから
あし一つの内へかさね置べし。一汁一菜の時は食
椀の内へ汁椀を組入。則食椀の上に置て一つある皿

是は其隅の方へよせ箸遠めして箸を膳の縁にかけ
どもそれゆゑに一の膳の中に箸遠く置べき箸を膳の
縁によりかけて置ものなり

一 湯盞にて通ひ給ふ時は湯の子酢子焦椒(こじつけ)童の世話
と湯盞をとりて其上に置湯の子を取て後に湯
の子を入湯を注ぎ酢子をとり湯盞に入て後に
遣とて飯を取て焦椒をも入てびるかへ
湯盞の蓋をおきてのけ香の物をも入べく
其時の湯盞をとり香の物一とれて膳に置て汁へ
湯盞を取て湯をつぎ左して入物のおきて
よくと飲みて後に其方へよせ置べし

一湯とつぎは出す事も膳をとらるゝ時出さる時あがり秘録
とりてすゝへ渡すべし給はゞとゝへ出すは後又後よ
まれなし此時次の方より入膳とおし取民方へ出
すべし揚をも取礼とすべし
扇は香炉あまりとし香を嗅がる時は膳とゝ汁の菜
は為ぬとすべし菓子盆をも扇にて出へ置るとて召とある
べし其後も座敷へおろしてすべし　細かくも後に
もすべし是は如何と申すとや

一菓子菓子出す時は多くよく出すべし　扇にて出さる時は
解難とは菓進と称してよし　木具の縁をあてるべからず
まいらする時は菓子よくひねりてもよし　口伝

懐紙の時くはし残しをる物を鼻紙に包み懐中すべし
又入物残れば包みてさし出すまとしかさねて持
其の方へ仕舞ふべし

一手水に出る時貴人主人の供相伴する下座の者一人
先へ参り草履を直し供の縁側より勝手の縁側へ供
すべし　下座の者も肥満の時は下座よくくむとあり
下座の者道をあけて上座より参るべし　上座より
下座へ参るよりは先にて付の時は手を出すべし　末は時宜次第
給ふべし　同席の時は下座より参るべし　下座より
参るべし　挨拶には文無心ならずとも参るべし

一第七　勝負の事

一 客中同輩の時は子細なし貴人主人には御給仕の
時は膝行のごとくにかがみ居て見物けいゐと
手を付てまかり居て見物の事
一 亭主座敷の真合出来ずは来客同前の為にかへて
花をかけけれは又人をぞこらとすると付なれ
花を人見る時はとちいてひ人と相客主人の時は床の下よりめ湯
と又名所の掛物とも見へしぞうるはと茶合てはにぞう
猶勿乃置候前へ可し
此八 後の花入之事
一 花入へ付けりなれば、かけやうし又三段前に書しる通り
花をば立へはのそのにくをしと見し

一 此花入の時は座敷居様とぞすなわち是へ貴人主人
御目附時の事也 扨花来れは花床脇なり
座敷の様子によりて花は何方よ通ひに付くるわり其
花人へ貴人此方の時は花をしとて床脇へ着
花をして花へは通ひよ御前と通ろゆへよ初めよ
貴人へとるひ花入へおとし後の花入の時は床脇へ出つし
てらし客中同輩の時は子細なし平人へは前後
にて床脇に着してよし
一 床にむかひ花とり見候前会合に掛物の
入様前へよし
一 此時客人花前にてする事ありても身ごうり

一 切者あまたむと入てより何まいらせし挨拶して貴人へ
出し入る時ハ持りさ申むと後座敷のとよ出るや
亀の尾入の時は鼻紙とおなじ袱紗にて出てもし
表九 茶さうの時の事
一 主陰子とおけく御茶湯を出さやと何の時にても其の
中に出し。主お梅殿と出し。ふくよせて
其時ハ膝を出しても出し 挨拶して茶と之出の時
かしこ海り茶碗とおき戴き茶湯の也出し候
度も此んのや
一 主茶と云。茶碗と出し付。四家より主人へも茶
へも茶湯より持候いたさうして乳わたへし梅茶

碗とてんれまゐしれたのゆび口ハ丸よ茶碗のふうちに
との也大ゆひと持ちれかけたる手を茶碗の縁へ添
戴きてのむ也しり茶碗のかくぐ内の内よの左ちよりなる
とれちがうずるへの持ちまたそれ口のゆびとかけは左
の大ゆびとうけかへしてくるくさのくちとくと
戴きて茶湯のむ也しまたより持くささめあかさる人
我茶へうりよせ立茶碗わかくしも出ふさるかよし。
言語り次へ茶碗とよ渡しよ進退も次れまの茶碗
と請る戴きての也を付よ左より乳と持ざる也
次の初めまえ言ひさうと戴きよへわふむも茶と戴
きまするなど次の者よりたれわの付きて茶へ入れ時に直茶

するゆへなり次も前に同し

一 茶をのむ時に二服ともに置人すへし但四つまはり一ツ
ふた音也にてあひ次にくはへつまるの音也とも
よりよりとしての角の手へも也してよしとての
挨拶は作法とも前に同し

一 正客のまへに置なり。醍（ずく）醐の時に茶碗をとく客人へ分。
吾也へは手の内茶のむとくするなりそれ故に茶をとまづ
よ吾おつとの内に進へしらんとて後にて来くせ也
まし御の時へ相客の中にて也也と断り正客へ文
也してよし吾も得の意や

一 茶碗見分の事。それ茶を吾納めたる時。茶碗御

九つ也時に正客語て見物して也とも其下座のめて
吾納めおきたる時に下座より也よ茶碗の内を湯を
しめ正客の見物の跡は也へかへしても出すへし

一 茶碗の持様ゑ見物の時は其おけさけおくへし
見物する人の事よ女持とも右ゑそも出すよ付てよき

一 茶碗底を付て見れ左の方上座より下座へ茶碗
めぐらしてよし。上座も見れ左の方へかへし下座の者に渡
下座より廻してよし。下座の功者ならは茶碗
亜方よ上座より遠くくして出すに上座より廻して
よし。此時へ下座にて茶碗の縁のまはりを上
座へ渡しまへかへしてよし

一茶碗がしもとに切肴乃入事ハ茶碗の飯よりも前
うしろあつくするまゝ人ニ底をよく敷居しるたゞ人
ゆのやうれとも也しばゆへ外印ちんれせんさくあり
一茶碗よ吾にあり。龍角よりものたんの病の方を吾は
と志つるだとし。茶をことなる時を。ぬれんの方し吾に湯
一さゞむる事。すなハ湯を持つ時則吾にれをくば。
あつき湯のやさしく吹きあり
一濃茶の好みかく。湯を好む事あり。当代ハ濃茶を
吾は色よ湯を入よおしあまとも時。あまりとし急須にて
まて湯を入ゆゑにて。されむさき事し。後茶を大切なれ
急須の時直よ湯をねむる。全くさん得よあつく濃茶を

まり茶の湯ハ水乃念入事を流布致せんとすよ湯を好
むしきれなるに。事をとるもとおよりもとちや湯ハ水入と
尸しるも茶湯打し湯を尤も茶ハ。やとことはじめとる多く
どれおしく湯まゐらする時しさとのみ所し色ある
好にハ時を。濃茶ハ好能くすぎ湯くさてハ湯あく
すぎ好くも。湯を汲へ能かげんよろし。食に付て
一濃茶との亭主の茶碗をとく時ふ守ハれんかあり。
其日ハ茶乃湯ニまつ事ハ湯を考へ相應なる事
おもとし。織よ所作汁を入おゝて出来るべけれよろしと
いひ。濃茶ハ始よ曲よもしとちやを吾ことはよとせ
是湯入出来るべく後く薄茶をと致ぞ。又ハ此後の其

尓升濃入れ所との、薄ちや出し可進しとや、世よ云は
ありまり濃入とある国分ケ薄茶を分用といふ、様抜
乃用よ仕立事もあり、附置よしるへし
一 濃ちやの練よ出しよ薄茶と云ずは、古織より初る
或は古織毎の濃茶方へ義よ被申まゝ、其後子々
仕出ミて其より事也、む当代ハ皇家御内法入をを
くよ薄ちやを不点ても若しもあまるへ御茶
いうん乃流仕立あるまじきしの所
一 当代ハ濃茶のよよ出しよ薄ちやと云仕立様之候と
名付、此家を不見て、是不分、濃茶と仕立茶子
分ども、しやうを出し、薄茶之分施し、古四炭とひよまん

四炭之三ろくあらと、へく三回その事候、其上当代
の薄茶湯ハ口より彼茶をとんぬ、此人初めて挙の儀も
前尾会く其らの事よ宿之所ノよ濃茶ぬ、水指と升
とも之あつとゝかんを付ける也、客あ、付候ハ、水急激にかと
なるまゝ仕、始終水指不升也、其上大内御ハ加付と得ずかき
つとす水さ升や

第十　道具ともを取合て見る事

一 茶入を置之濃ちやと仕出し、水差ハ其也とと乃付
茶入は守合あまと頂き也、但し、茶様ある茶後を見
よ都ての附ころてより、茶入の袋を見、其後ハ人附合せる
能く見へし、拂い湯また見事なる出来るなきぞ。

とれまへ返して置し主が居る所へ持まいり返さるべ
に置なり両手にて取なるべし
一 諸道具持出入ハ第一に気を付べし何れの道具も同じく愼むべし
草子皆持出して出す事に初めて置し又茶碗などは
一 炭を出して薄茶を立べし吉限の人は茶を出さ
すゝハ其外に飛石にてもいつものようにと
一 なむしのある所へは合子一服くと立べし

第十一　炭所望の事

一 薄茶過ぎてや何の時に炭所望と請ふ此時一家
りもうしてもよし炭をつくるかゝるへきこと
人のひとる時はやくとことをとゝのふる

半過して酒をいまだ出さぬ時は炭所望
と申す時亭主さしかへ何の時も奥に行炭
斗のゆくへ炭取りて出すべし
一 此時客より亭主へ炭所望と云ふ事もあり辞
退して頓て炭をいれるべし炭の後亭主に問
一 後の礼は亭主ら客方に申入れ礼を云べし
人に名のある時は主ぶりを合すべし
一 掛物の書物にても見るときを心がくるとき合する
こともあり客の作法をよく心得べし
一 客他の道具が出る時は飛石にて礼をすべし客の中
合ふ時も其日の礼に心得べし

一此後く孔下まくや茶碗を人への方向かへくだ
のうち純中なる物入なり

第十二　雪隠之事

一雪隠ゟ石を居物とへふ茶ミえふめく古ハ同よ之
よしで当代ハ茶ミと小便所と号し中ハ座敷よ入ル腰
雪隠とてうめと居物ハ様ちは茶ミより又大洞ふむ
志ゐる人ハ衆やりちも俗で物雪隠をつるゝるても
那しが町土月八洞ゟ衆ゟ物雪隠よ大用洞根に
傳

小川文庫

茶道便蒙抄目録　三

第一　風炉の立方之事
第二　同茶たて方之事
第三　同炭方之事
第四　盆立之事
第五　茶入底揚の事
第六　茶入の盆飾之事
第七　唐物立之事
第八　台天目之事
第九　同客方之事
第十　茶筅直之事

第十一　貴人にたつる臺天目之事
第十二　天目名乃事
第十三　臺庫之事

目録終

茶道便蒙抄三

第一　風炉之事

一　風炉ニ湯の時分を心得べし。利休は正月二日に茶湯する時風炉にて揚らるゝ事あり。是なれど前おろすべし。當代は四月朔日風炉にて揚ると云。開炉は十月朔日のそのまゝより口切仕のよし。今は七八月なくとも世乃宜しく開炉仕るべし

一　天徳寺やうの釜に為合る風炉の時は釜の蓋と風炉の肩より弐分程上るが下なる。釜の底ひくきなるにて見合をすべし。茶の風炉にて茶の釜居る時も蓋と肩と同じ位にすゑる。是は釜去るなる茶の湯する事

なと宗易時代に風炉に揚かと云ハ此ゆへなり。紹鷗時代ハちいさ
き釜を風炉釜と名付く。ゆへ此様のなりとても風炉
に仕廻る也。不審の時ハ大釜なくとも風炉の如くに釜に
合仕廻る事なり

一 釜を前の方へ少し分揚てはやすらかによし。五徳を居てもよし

一 箆蒙（のぐさ）が母釜仕廻るには透木を用て風炉ハ釜に
合ざる。透木は風炉にすへし。此風炉ハ真の風炉にても
土風炉にも成へし。透木ハおもての手あいに、長さ四寸程におつき四文にも
たゞし六七分に仕立し。釜の大小によるへし。寸法仕廻に
透木を離し據ハかくれても、ひくく行して、二つ折
表の面へ手の上漆付にすへし。妙ときハ二寸四方計なり。

なと二尺の釜にても仕廻る時ハ風炉の前より
母屋を二寸程揚わけてよし

一 灰の仕様ハ炉の灰の時と同前なれとも、下々心得前に大炭は
暑き時ハ火をおこさせ除てさけ落されん世るおつきなと
さるく立る也。膳撥の時分に二段かけ置てもよろしきなり。
まわりさりのよひちたに上に紙をしてかくすへき様を
て立て撫る事もよし

一 小板ハ釜大きさにより用ひ、ちいさき釜にハ大板も小板へ
揚まの事なし。ねかへりより九月。向を同寸法にて、すこし大板
古七月。向を付る時ハ中板なり。此時ハ大板小板大にて九月
より、大板ハ小板に八分大きさにし。掛板ハ大に。扱批月（へぎめ）と用ゆ。

同しくすゝぐ、皆ぬるくなるべし。但同し湯にわかし、手前に
もどし置て、中蓋ハ右座の右の方より左の奥へ
入、勝手の方をうけ取て置、中に湯をすき、座付ハ湯に置て
よし

一 風炉の時ハ膳前に火をなほすものと心得るとて、亭主と
釣り釜炭をなほしとくへし。但炭斗ハ[illegible]の中にも直し置
一 炭を直す時、座中ハ茶道具を[illegible]のことく[illegible]
の[illegible]へあけて火を直し、灰すくひを風炉の前に直し、但風炉
へさす[illegible]に直すへし。敷子を[illegible]前にて灰を取
て[illegible]、白炭をうけて二敷子も二敷子もしかるへし。
[illegible]ハ多クハ灰に[illegible]く、灰を直し、掻き揃ゆる

なれハ、亦に直炭とも云也

一 炭の仕様、炉にハ此三様あり。まづ胴炭とて入て置、凡を風
炉にハ此三様にてよし。然とも前の炭、初の炭ハ
横に切めと火のやうに置、此時に横にくりみせ
るやうに置べし。又細炭ハ炉、風炉共に炭を十文字
に組なし、かくして掻炭を仕置前にて、灰すくひを
もたせ、初にかき出したる灰を箔(はく)し、敷子同様にかきあ
けて置たる灰を入、もちたる時、炉の灰も入れて[illegible]
とも箔なし、掻き揃へ、又炭の[illegible]へ入、炭を置き直し

一 釜のかけ様、炉の時ハ環をうけて勝手の方の膝をたて
置、釜を膝にのせ、釜をあげ、炉の中に直さ[illegible]に膝とさげ

釜のかけ様も居并諸道具揃る上へ入る事あるへし

一 ちいさき釣釜を風炉にかけ又ハ炉にも長き鎖にて
釣りかけたる時ハ釜に附付の環しを環おろし候ゆへ掛くさ
こしあるを鎖の釜の蓋のよりかけ掛くさこしあるへき角
あるく環と釣釜と揚る時釜ひるさわり掛くさこしある環
に不和附ハあくさきあ二つあく掛や

一 主水ハ客座の座合の客ハよし 客座へ入て茶碗其外
茶入と茶入合なる事も炉の前に置へし

一 風炉の前にて茶入あらくも蓋も袋へ入へし
炉の二 茶と云事

一 柄杓蓋置持ハ客の前に置客へ膝を出し其時置とき也

柄杓をとく之居座り所へ居候ハ建水の方の膝とも
膝へひくくしてはゆへ風炉を小板のうちに掛様表にも
かひくの勝手にくしてそれゆへ戒方の座へとひくにゆかし

一 茶碗とたてる時に左へ移し客の前に蓋膝の前へ之
こぼれとれあるみ茶入茶杓掛くまゆへ炉の前に置茶碗
とられてそれは座に掛くさくきあたる座し小板の様に乃
方客の角とあくさき掛くさき膝にも茶巾とあるへき

一 入くきたり掛くにあ小板のあくさる事に座柄杓とれ
釜の蓋とれ楊湯を柄杓の合の合をのそ茶碗へ入柄杓の座
茶れ方と釜の向の方に座柄とにしく前の方に持と座

一 柄杓釜のともに座候ころろ前に向く釜の向の方にかけ

匙持つ手のゆびをゆるめ。匙は中ゆびひとさしの茶しやく柄を
持なりて手を引。それを直に今の前の様に匙さ後に
手を放。茶せんをとるに又一説には柄杓をもつてひねり出す也
に柄にあたりけるとあらば中ゆびにてひとつまみ。ゆびのは
梅(大ゆび)とひとさしゆびの方へ付くり引時はひらりと柄を合て引。
前のごとく手をとるに又一説には中ゆびひらかめてもひらかざる時は
持つ所にまて柄と中ゆびとの間に匙梅をあはせ方へちがへし柄
のうしろにあげ茶匙食指(ひとさしゆび)と柄の下部の方へ添せてそれを
匙のあとに手をとる也

一 茶碗へ茶を入る時。壺の茶をとれる今へ三杓数三杓数ほどう
め合。濃茶をよくし是も一杓数へ匙し。三杓数まきし

一 こゝろむ湯沸(たぎり)つよくは蓋取をもとをし茶を立るものなり
茶も道具の仕廻も常のごとし

一 茶を仕廻。茶入と茶碗の匙合等のごとし

一 同道具ともに棚に匙揃え入る事も右のごとし

一 後の菓子はおとゝのへ常

一 後の炭匙をとる事前のごとし

一 濃茶立る事も前の膳の時の茶碗のごとくに水をそゝぐ也

第三　同客方之事

一 風炉あく御茶一服あがる時は時によく不相應なりとも
見るべしとゝのへずして来るべし。風炉ともに知る事なる時へ。
前に入る席の方へ付け。匙ときへ風炉の茶の湯とを

一 湯て勝手まで足袋をとめざ入るべし
一 座敷に入着座ありて炉の時は羽箒を出し並べ
時炉のごとくに炭をとりあはせ出すべし香合にてこれらの
に炉の時は羽箒炭を付ずる也勝手へ入るを断り座
に直り釜を出る時に水指ひしやくにて出し入る見炭を
入くべし又元来炉より出て奥のやうに炭を置ては
一 手水に出勝手へ通の作法座入まで炉の時は羽箒を擁
前ずして則の事なし但常の炭なるべし

附
盆立の事

一 盆立にする茶入は唐物肩衝に不限名物なる時は盆に
のせ立つべし其の外は茶入を袋に入盆にのせ置べし

茶入の棚に置物あらば水指の前のごとく水指の前に
置合の名物ならざれば常のごとく茶入を置ずして
載る事あり是とて床にも棚にも不置手水の
前に水指の前に置や
一 棚飾ある時は置べし手前のさいの前のごとく手水のある時は袋棚に
常に床に置てよし置所は常のごとし
一 客の案内ある時は水指の前へ出て座入して置合を見る
座をしろしめすべし
一 主茶立に出る時茶碗を持建水の蓋より置也
一 右の通り茶碗を置て同じく手前の三畳の時に置
立つ時の座に置かぬは茶入の前へむさと茶入を置

ふにおくたるとかれはくひのかたに添ふ様なるへ返しさ給ふ

一　たるとはくびよりさあてたて返しに茶入のたれの方をとり

一　ふたみしに返し袋の結をとくまゝかれとも向前の結ひ袋

とのし様勝手にろ吉捌すへ口をあけさしろ袋にとりもとに

一　升色を向へ取しるほあかく茶入の底をかくへ茶碗の

されよかうりに置へ返しふ時刻りさ通に前のとくされ

一　てはとて茶入のりたれはくびへ置にすお添茶入をとろ

一　に置すりお持くさきりかと真に置へきたの持盆とぬ

くさし持たけのうあまけて前へはかに返かしして置よ

のそかうりとかれ方へおろりとさし添へ向結たれ方へ返し

たの結あんと前へ持さくたの添ともに前へ持さ前の添

とはたれ方へ持さて置れかに返しはとうし持くさきりと

勝によきし持茶入をたれのとくたるとは添ふ様前へ置返し

中あくたるよの仕袋られて後に置ろうのむかたへ持くさ

きぬとされたの組よそ四角とされをと引ろうとり前へ置

真に置きてさ茶入とたまに持たるとは持くさ持まろう茶入へ

添持と持くすりめ常に持くさ懐中して中あく茶入

とたるよの置返しふたまと前の通りに添ふ袋の真中に

茶入の前をとおろして返し

一　勝手ぎろ茶入とぶちてさまよすり付さぶらじめよろり袋とされ

て建水の時されに返すり前によけしてお羽ほうきや

一　建水へ勝くるはの後にあまえや　井戸座に置ろ時ハ左の

一 茶杓は勝手の方の隅よりずりだしてよし 扨又勝手より
一 かの座居なをしてもち出し 扨はじめて茶碗の右の方
よかりに直し炉蓋へ寄せ置て その座にて右へ移し
柄杓とつて茶巾と直し柄杓をかへし 蓋のごとく直し茶碗を左
手にもちて右にとり直し建水を茶碗の跡へ出しとりて
一 客より茶へ膝行出して 我座の一礼すべし 挨拶過
よ躙り寄りて居なをり懐紙をさばきとり出し 揉まて
われひろげ茶杓と拭ひ 盆は勝手の方向の
きんとつづし茶碗の茶杓の柄とりそのまゝの所に
直し茶杓蓋とり柄杓の柄をさん蓋の下に直し茶巾と直し
拭ひさばき懐中して茶碗をとりてじぶんとすべし

碗を拭さて茶巾直してそのまゝおくし
一 茶入と前のごとく清めくれ置と前のごとくおきて蓋の
前の縁の真中にいかにもしつかりとそのまゝ直し
茶杓とりて茶を入事碗の上にて茶すくひ 拭懐紙にてぬぐひさ
ならぬやうに出し 茶入の口より茶を紙のごとひぬぐひさば
懐中し茶入の蓋をして元の座に置 茶巾ととり
き茶杓の茶杓蓋拭茶杓を右にかへして柄杓し拭
さきに出し茶杓とをのへ置きて 茶碗の前にかへして置
の所へ出し茶とたて茶せんと右へ
これ出し建水のさんに置茶をとり 茶を客人へ出し
もてなしてその座にて客の方へ送るべし

茶碗の仕まひなれバとくしていかにもしめやかに建水を
かた脇へ引茶碗を建水のかハりに座の前に置て左の手へ
取なをし柄杓を棚へあげ建水持て入茶碗をもちて
入茶入は出すなり

一 此時客より茶入所望あり其時茶入を扱ふ前の
ごとくして茶入をおいて手前座にもどり

一 次に客より茶をとうむるより茶わんをよく拭ひ出すべし
所望あらバ茶入の袋を所望せむ人ハ是を出すべし

一 客茶入を見ん為の事主の真中の座へ一同に出し
待てさすり見るべし其時主客ともにかくべく
縁にも見るべし掛てハ水差とをれて持べく

入べし茶入の見様客人とんぼありて茶わんの縁を廻り
見て後袋を見るべし

一 主座へもどりて茶入と扇へ乃揚して
とらせむ客より早く下しおくべし是は後に扇へ
揚の上に置りありて主客の中にて其上に揚の事
主客挨拶あるべし

寸法 茶入扇揚様の事

一 盆茶入の扱さやうに茶わんとくやうさきを揃て其上の也
扇ハ真中へ引て其上に掛物ありて扇の上に置へし
あしらいて我前にある茶入と並びたんの縁と扇の
上三分一ハ真中茶の座にかかり三寸計置て見る

よき座敷にて我身と地せんの方へよせ又縁のたゝみと床ぶちの際に
座するなりへかへてとるともてる時座によりかゝりて縁へかけざ
つて向と客の茶入をかけ座と見くゞりゆがみ具も座て座し
亭主座する時は掃除の方へ居座る也客は中よりとゞ
又かね縁へまはりても客の茶入とみなしてかゝげて花へ
よりかゝるものや拝領の客人へ先茶あてゝみなしてくばる
一 茶入の床へ座りて茶入一入見てもぬよしかねものゝ
一 客方より床へ座しても飾りしる時ぐばん茶入の表
と向方でとるへ置き色し表の袋をかりとも此時客
見えたし也るれ物さきとなりて用由たし茶
入れ物さやの内のことし

一 茶入床へ座せて又床によりつき茶て花入と花入の下
此ゆへよきぞんずやうにんにわりなき物置此時茶せん
入ずへきと入水と注ぐ時十分によらすと注ぎざるべし
一 花入れこむ時茶巾の雑巾とおおいむへとたんよめくり
一 床によ茶巾とかけて拭て入掛床板とよく拭なへの
時ぐたよめてさん床よ雑巾とかけてたんよめて拭とおく。
拭入行乃むへも同し心得也
并大 茶入と袋の事
一 四方盆 貝盆 九盆 菱盆 在花と用ゆる茶
漆で無漆内赤し掃来る事ともあり其他と拭漆にもる
花へ四方と貝と二つともあり地に此る彫物蒔絵貝蒔絵よ

茶入のふたニハ不用。轆轤庭乃あるはりしらぬすゆへ

第七　唐物之茶入茶碗ニ入盆合る事

一　盆ニ載せしまゝ置ざる程の唐物ハ茶わならず茶碗ニ入棚の書ニ前ニ盆合るし。又初めより不置ニ水の所ニ水壺れ茶ハに置すとも置ハ茶入の緒芳ニより濃茶道具

一　茶を立る時ハ水指かたに水壺とて置。置ニ茶入合のことくに置べし。茶巾を拭ぐふ。水壺の蓋水ぢくしさまりニ勢りけ。又ハ茶碗ニ茶せんとのしてせりけ置べし。茶杓ハ柄棚か書ニ簾の棚ニ置るすり。拾合に客ニ見せし

一　棚の九座ニ取りよせてハ水壺の蓋のよニ客乃ことく茶杓置るり。此時ハ濃茶の蓋の置を用べし

一　水壺の蓋のよニたゝむ所乃置様。先ニ茶碗の内ニ仕込ニ同し。茶杓ハおとのけ水壺の蓋より前ニ又六ゟり出し置てよし

一　建水ニ柄杓蓋置を置との仕様ハ前の所ニ置。柄杓蓋置を置し。捧茶碗と茶入たニ前の所ニ仕置。茶入と茶碗と揃と取りニ於て置。前のことく飾ニ持ニより。真の如くさばきめし茶入と拭ぐさ。其後ニ置。茶杓をあけニ拭さ茶入ニの仕茶筅置合。捧茶を立るのをかし

一　当代ハ名物めしたまさニ唐物も茶筅と置合せず置之の作法ニ云。一切不合候。茶入ニ茶筅とそえずと事ハ置あまし候置ニ而るとも。茶入ニ置ニ茶筅

いかにもうすく茶碗をふりて泡をたてずにふくへ
引かけ茶巾の右につくしくる不入ものなり

第八　台天目之事

一　天目を持出るときハ茶巾を掛て茶入茶杓と
おなじごとく仕立て持出て置合すべし是ハ茶の
まへにさらに置合をし給仕人の通りなし

一　茶を点る時台天目を置て点しても其まゝ縁を
たてまへの茶天目へなして左の手にてゑんをもちて
おのれく茶筌にて置合のあしらひ茶杓茶碗
茶巾をおとしかしらひ時にて天目とまげ一ぺん
まづ湯をそゝぎ其まゝのせて湯を入て天目の縁に

ゆびにての縁をぬぐひて天目の縁より掛て置時
食籠をもちよせての掛茶碗をとりてずつよくて
てそれを置まゝ茶筅を縁へかけ置べし

一　拭くさきぬぐひて真よりかくてにて拭くさとも又
まへにて右を持ち鬼に向よりたつの方へ拭きと
きたる方へ拭ひ縁の向左より又右へ拭き其の
もとの方へ拭き縁の右の方下をもとて拭き又
茶巾も其まゝの右手にて勝手へたゝみ天目を茶
さらくとすれば茶入ぞ置合すべし掛天目を台
あらく拭き左へ移して茶巾を左の茶碗の

一 臺子の座ハ茶巾をとれ茶筅ととりよりおれとし

一 天目ニ茶を入ハ茶杓ニ付たる茶をおとすのごとく打拂
盆後構あるハ附る天目内両あし打立し盆後構ある
時ハ杓をとれ盆つゐらうまて打あて茶振と同し捨
茶筅立ておもてあれとし

一 茶杓天目ニ仕込候ハ臺子と天目との隔勢ようりだ
盆之様あり不及筆口傳多

付九 同客方儀事

一 天目ありて茶吞候ハありまて臺ハ緣とれ截こさた
てふりて臺の緣を拭ひてよあく天目を拭ふて茶
ま扱くとく拭て吞ミハ二口程吞ハありあし緣を立為拭

ま盆天目をとれあげ下座の客の前に移し上座の客の前に置
て飲膝前の邊りへ臺をのけ置て飲終吞て吞口を拭
のごひ如此してよく臺を前へよせ天目との世次へ中をあて
後とて次ありへまげ臺をもよ戴さ臺をそろへしのひ
色し臺の盆様吞様ハ前に同し

一 臺ニ天目置附る時あり天目をあまりまて拭ふありて叱びへ
されと鬼花の内へ入るとゆひをぬぐさせ天目をおとせさる
やうに臺に座こ掌をまあまあかふ心得可然

一 茶湯吞法之天目置附る時茶筅のごとく臺と膝前の客へ
のけ天目斗をとりて臺をうけへ天目との世次へ出て
半にまへまて可然

一　天目のみ盆にて出し入れする事有之也
一　台になしに仕出す事有之　盆にて出し入れしても此天目
と云ふは　茶巾を茶筅　杓も仕出するもの也
一　諸道具揃て出入　御する事もあるべし
一　盆天目は茶入を出す時盆よりも重ねて茶の前
にも置きて有べし　其時も天目を建水の前の方
にて茶筅にてとくと盆を拭き　扨とくと客の方へ出し仕舞
引の事如常
一　後に荘りの茶の時も茶碗と同じくしてよし
第十　茶筅置の事
盆も天目も皆拭きたる時は天目にて茶筅茶杓を置く也

盆台にて茶を点る時　茶筅盆に茶巾茶筅茶杓
仕込みて置くべし　建水の前に盆　茶杓茶筅と先に出し為
置くべし　盆台にて茶巾と茶筅を置きて天目を拭きて
後も茶筅盆に置くべし　我等は据ゑや　薄茶
茶筅盆の茶碗へ入れ　常の茶碗と同じく　茶筅の羽に
据へ置きて当代流の茶碗と云ふ事也と見るべし
第十一　貴人にも盆天目出す事
一　盆も天目も名物にあらずとも　茶筅盆と茶巾
置く御門個にて　引の茶碗の如く立出して　入れ替
とまで下げ　茶碗をおろして拭きさて　おき取るべし　ぞ
き入れ付けし去る也

一 盆点の時も是も天目なく茶を点るなり。二つとも台てんもく
て立る計し、能々習ふへき事也

第十二 天目名の事

一 灰被　曜変　油滴　黄天目　白天目　只天目
建盞　玳皮盞　黄天目に白天目　白天目に黄天目
といふもあり。右何れも見て候、口傳有べく

第十三 堂庫の事

茶立候者よく習ふべし。道具の並べ合ハ常のごとく
是も壮年以後の物也

小川文庫

茶道便蒙抄目録四

第一 菓子之茶之湯之事
第二 夜咄之事
第三 不時之事
第四 跡見之事
第五 雪中并朝茶会之事
第六 四畳半座并棚之事
第七 くさりの間
第八 身上相応之事

小川文庫

茶道便蒙抄 四

第一　菓子之事　茶之湯之事

一 朝飯後夕飯後の茶の湯あり。朝飯後花の茶ならハ床に掛物を
掛置へし。夕飯後ならハ床の中釘に花入を置へし。
一 床の内に花を入る時も花つけもときハ中釘へ入へからず。去
なから菓子に砂糖酒さかなどを出す時ハ茶の湯に
水をさし。此時も花を入ざるがよし
一 炉の内をあかす時ハ先さきへ炭山に炭をならべ置
炉を用兼や
一 座中茶合ハ茶前より水壺と茶入と並合にして
座中ニ水指の茶合にかさりけるものと云へし

一菓子計出る時ハ。客ハ手水ニ立ざるやうに致しかけ。
菓子と喰内ニ茶碗と持出茶入と。正客。菓子盆と取て
入。建水持出茶碗置合せし。是あれとも先手水ニ出しく。
むかふ角ニ置と楊枝ハ菓子盆ニ入て居。八棚の上二座
ニ置合色し。是角ニ居ニ有て重合せ後ハ取片付らる也

是二　表座之事

一主おもてにて。客ハ入ル時ハ戸を立て。ゆすぎとて後ハ
さんと合て。呼ぶし時。戸口をあけ置て。
有ハ入来ル。前ハ引ニ茶碗を置し
一床中ニ置合せの菓子ハ茶ニ湯ニ同じ茶から
水壺と茶入置合し。床飾茶碗ハ前の茶湯ニ

門外で床の間より出て。客ハ手水ニまいり
躙口と開き。炭と置合て。見物ニ出て。手水ハ未だ
亭主。炭と置合て。茶入を持出て。炭置し茶碗の方法
通之居の書にあり。未だ見ハ二度目ニ有ハもう
何とよりし。炭置て後の飾り替也同し

一濃茶之後ハ炭とて薄茶と立ル時ニ炭と出す
又別ニ後ニ茶と後入合よし。又主客の時ハ手をまいて

一又薄茶と立てもよし

一表座より炭と云事。何のハ是ハ床中ニて立る時
火を拭て茶と取ニ客ハ中へ入ル炭と改し
掃除茶と立る火ハ見る時ハ主人出て是を

歩く炭をしめ置きを上より炭をとらし後より當代より
炭の仕様には下火をとりてさらに其上へ炭をつぎ置し
それよりあげ炭をとりくべて又其上へ炭をつぎ置也

附之　不時の茶之湯之事

一 いつにても隙なる時分に客来り一服と望人へハまづ挨拶して
客を待せ其内に勝手へ入飯にても夕飯度まで
も茶の湯の茶の湯に勝手より出して茶入炭をとりなをし入候
則茶の湯にて一段の茶とも茶の湯の事しと一段の段

一 客来ときは時分により勝手にて炭を置て中にも茶をかまをよそも申べし
のみに湯を沸かしてたるときは多く炭の入候ものハ沸り申まじく
計にても炭をつぎて炭のあたりの吹そへ中くむひ前にひより可然

中入の時あまり住よりむかひにて出し候茶道は茶入を出し
一 座中へ挨拶しては座の始めより座中をみ置てそれより茶入
くさり入ときに則ち茶を入り入よりゆかへ入るにてそれより茶
道具をしまひ茶入と云入ざる前近くもと入置茶碗に
まへけるやうかへ置花とこれ入て座敷に置へく候

一 炉の時は茶入を出さき茶入は火を置て湯沸てあるへ
茶のまへ火をくすくとも置茶入をとりの火ハと
置しるは置しかの入て火を置ともし茶菓子
とへ置合置しく又おしかけわたるかたとかたらう
あく出しかもは解数酒吸物なども出しくし

一 菓子は床てあるに入置て花はなき時は花を入置とくべき

一よしとらくざうきれをとる入水を洗てさし入と出したるもの
なめしをかの花までもなじ蓋に組ておし出へ
取りおくし様役不申に入念し

一水差并に唐物にあつかひ候ハバ左の使にて茶入茶碗備砂茶巾
仕立庫にて二段ハバ備砂と茶巾に拵扱く盆と袱紗

一茶碗とたゝみまて手之人おろし茶杓を水差と唐の棚
茶碗の跡に盆茶碗とたゝみて扱帛紗に入茶碗と本
上ひばは茶碗の茶碗と袱紗へさし置に合なし

一濃茶ふくらに茶碗計扱は棚にある茶杓と茶碗
のせたるにて唐に茶入と居水差茶器に合也

一抛備砂茶巾盆建水持は茶道具と申すべし

一薄茶の時は緋は袱紗より後道具持出る事の為

当　添見く茶之湯之事

一唐物茶入盆合て茶入を茶の湯に点す也と茶入れ紛かく
扱ふ食籠ハ菓子に御くるまつて扱ふ所作にハ菓
をよく菓内にありの也但其外に作法茶器よりと
満つるにて近来何か入と茶入にも唐物の何かに出来せ
あまたと茶道にて茶入を扱事候しそのがよし

当　雪中に點茶と云事

一屋敷先に雪降にかざりけ何よりも濃點茶とのせし

当　同雪中にて唐物に盆棚乃事

一袋棚ハ炉計に用る也炉縁より八寸程とく入させ候へ

表より向ふ勝手の方へ廻りよろし。総道具盆
合は勿論水差も初めよりも盆袋棚のうへに茶入と
盆は天井に香合相並べ勝手の方より盆合す。但とも
置き盆様は続の奥の方に。書院に置ても飾る。又老人か
らだし。真の中に炭斗を置へし。袋の内には茶桶
よき同じ勝手茶入。又茶入一種の濃茶と入るべし。又水
れうかん。袋棚に揃敷置き盆と盆合。茶入茶碗ともに盆
合。天井に茶入盆とのせもあり。盆台の拾合は書院の書に飾
ともあり。此外にも盆合にの飾及茶筅茶入茶碗なとも

一 丸香炉をも水差棚に用ゆるにもあり。香炉の台道具
の事に飾りて香炉を用る事。同じ事なれは盆をあり。盆合

のおもて飾るへし

一 及台子にも飾りとも事なれは用ゆ。盆は炉縁ありて袋棚
同し。勝手は表より向ふ勝手の方の方へ。七月まて盆とし。
天井の盆合袋棚に飾下の盆合炉の内の表の
方に水差勝手の方に揃敷置き前に建水風炉
の内へ勿論勝手の方風炉。表に水差を置て向ふに揃敷
置き前に建水風炉の角に置き。盆は天井に茶入
茶碗盆をも飾ると。前のもの置て云揃敷置に初めより又
置へき事へし。猶又飾の書に記して。諸道具の勝手のより
盆合とも飾る不及事

一 台子にも盆に不及台子に同し道具盆合飾りよく風炉を

同無合なり矢并の為さまや

廿七　くさりの事

一くさりのとめ穴を出してつかふ方并ハ無用の道具。
出しやうハ右の手にて釜を持て出し右の手にて作る
ふたの方をよこにおなしくさしとめてとめる
作るハおもてかざりの下にて作るおもて中ゆびよりこゆび手の指
そへて二の丸ゆびとくさりにむかふうら梅と合わせめぐく
揚柄とよむこの丸のゆびとつかさどてあけたる
まし釜を鎖にてあけ揚かざとうけさせとまれてく
作るとおなじく作るふたの方より釜とあけ釜出
のよきとみえ候とて先出したれ環とくりし次よりの

一環とくりと丸より通るより先にて作ると繋丸よりに出之
一 穴を出して事なれとし
一作ると丸にめぐりたるより環と作るよりけ丸より
てつるとおなじくすり右にめて丸の環とうけ候と
丸とく作ると丸より繋ぐくさりよきつ梅釜無穴
網めたの丸めぐく作ると丸の方よりおなじく丸間てし
うずとのせ扱事常丸として扱けのきとくくりとるとを
常よ同じ釜と鎖はさけ揚のざとうけとく
さり作る丸に作りしげりとおなじく丸めてとげりと指釜と
ろくよ出して丸よとれ候并と結ひとおもく入すべし

廿八　自在の事

一身もちの時分ハともすれバ房事を指出すなれバよく慎べし
異床にてねるなれとし

一女ハあまくくだもの（を）このミ給へとゝなへ
ござとくさうミかうござ候ふ令ハよくへとしおごりぼ女ハ
とゝのへたるさまざまて女方へくだものあまりぞもとあまく
令ともあしけりやともかく事なくさけるなとし

一房ハたちにげりとうけてかざるかくりするくさりなどし。
令をうけさらる時ハだんなきにとゝのひよりうけおこなはの
内へかござとも志おこだんなる小猿のごとしとおぼ小猿へと
よくあげ令ともさらる事。能くとんやうべし。令あらく
とをしおよびふす業なとし

一薬ハ殊に身もちもくすりも別の子細なし。令ゆへが
さりやしよく心得べきことや

一ひさしくさずけねば身もちでくすりのみ不及筆に尽
くさりあまく薬とぞる事にてあるさまざまるなれ積なし。

一身もちハ五十歳にもなれ人の給ありがたくとも同じく
きハ不自由なりもの也さむ人と同じ
棚の棗やすともよ十歳にもなれ事なくさしもあまく不自
由なるハ各別なりや

小□文庫

茶道便蒙鈔五圖式目録

第一四疊半座席 付 爐ト風爐差別 置合 盆 臺子
長板 袋棚 大釜 九香臺 臺天目
第二三疊半座席 付 通口 置合 盆 臺天目
第三二疊半座席 置合 客着座 臺天目 盆 茶盌
茶盌仕込
第四三疊敷 付 平三疊 深三疊 并 無床二疊敷
第五隅有爐之座左右
第六風爐左右
第七同及臺子

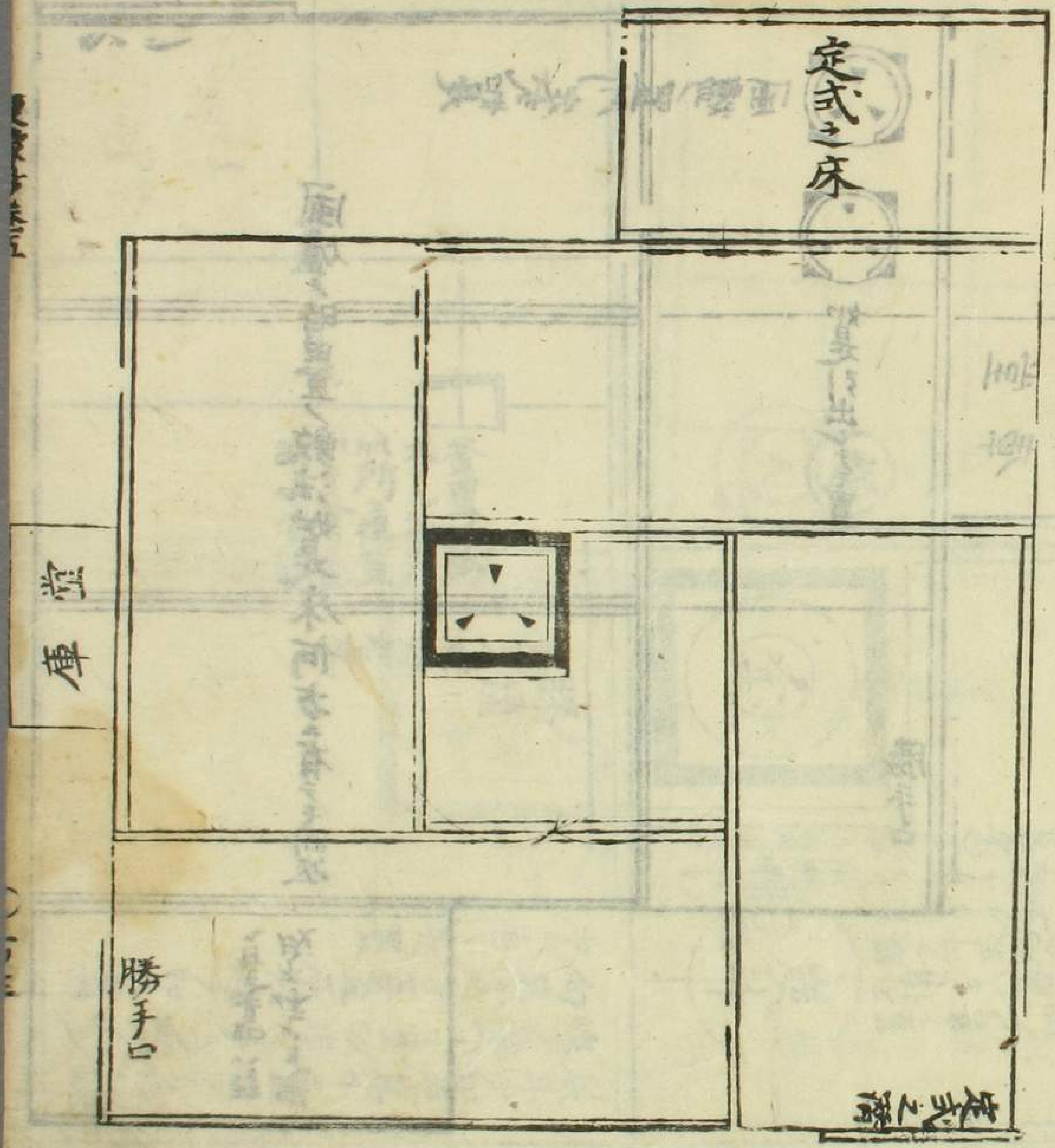
小川文庫

第八同ノ長板
第九釣棚左右　香盆　茶盌茶盆　茶桶　茶杓　柄杓蓋置
第十堂庫
第十一茶盌象形
第十二同蓋象形

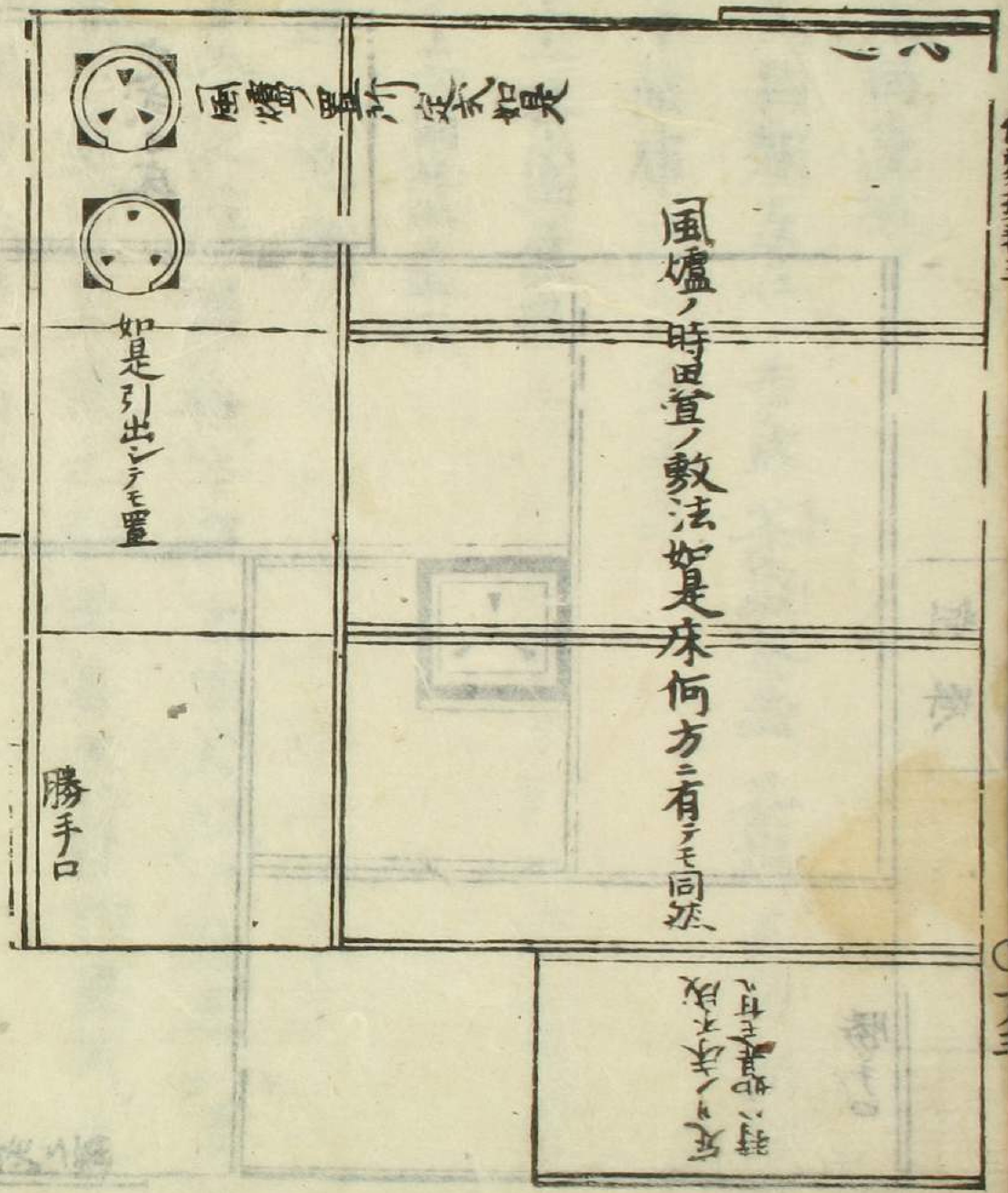
凡例

一置合之座席各本座之寸尺以テ十分カ之一ヲ為テ画畢ヲ
一座敷畳ノ中竪横之細點者其ノ器物置所ノ之為割書シ
附棚物床ノ内各同然

四畳半座席図

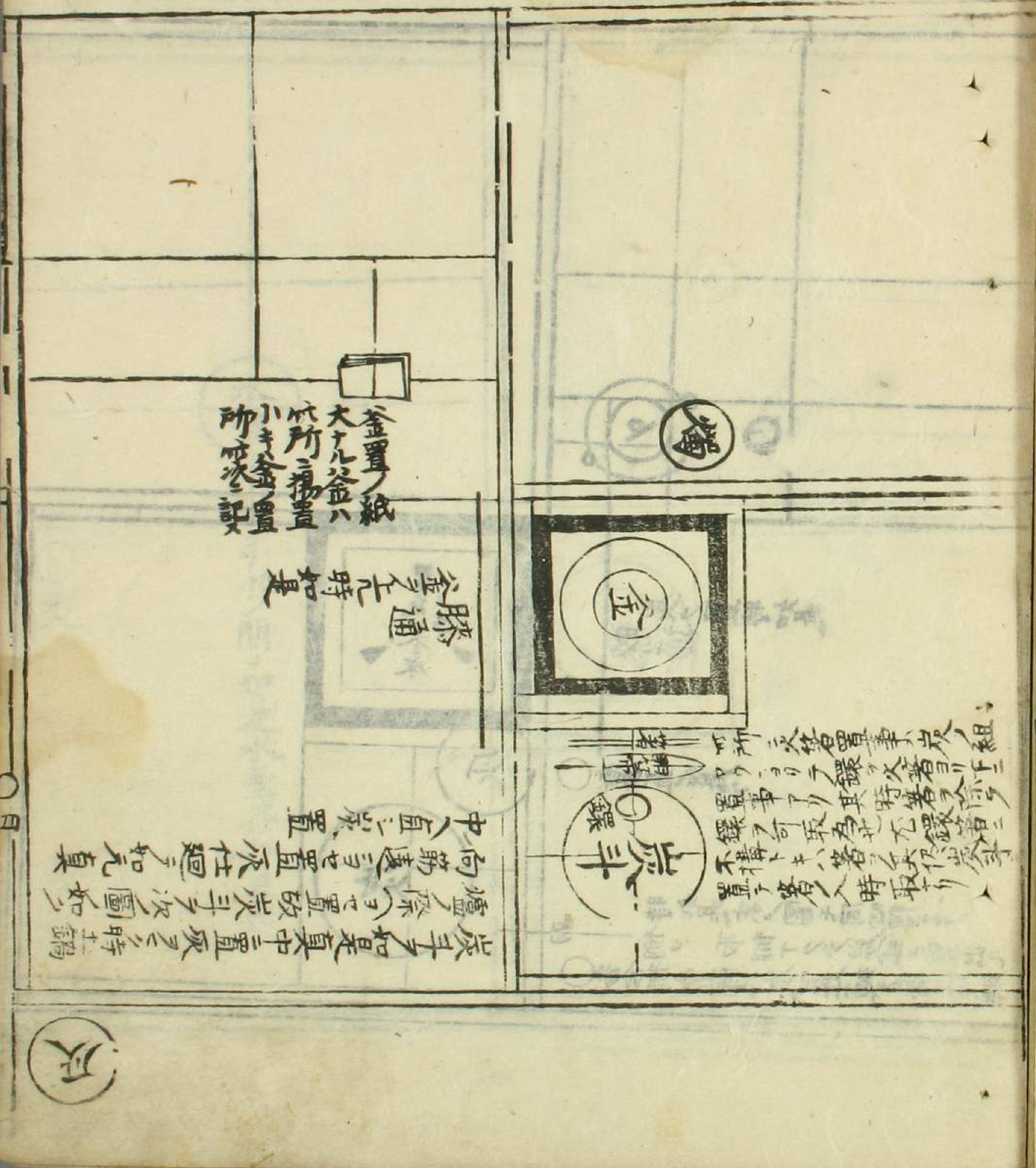


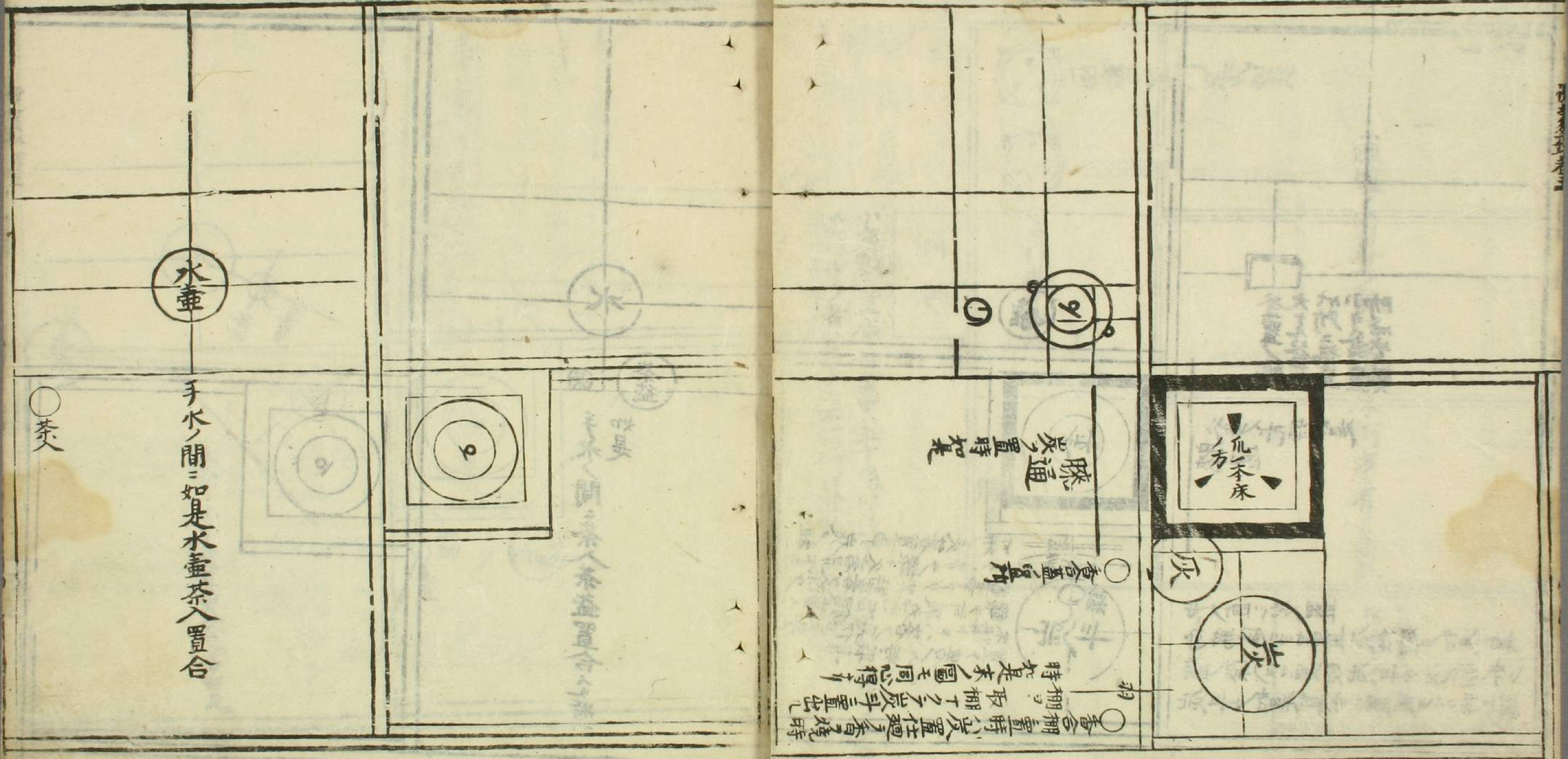
小座敷ニ床付ル差定ノ事床ニ置名物ノ道具所持ノ者ハ左キヲ塗テ用名物ヲスヘシテ勝タル掛物カ茶入葉茶壺香爐カ所持ノ者ハカマヘチヲ丸太ニテスル一種モ持サル侘ハカマヘチヲ不付踏込床トテ畳ヲ敷ナカレニスル也又一向床ヲ付サルハ其次ナリ何畳敷ニテモ同心得ナリ

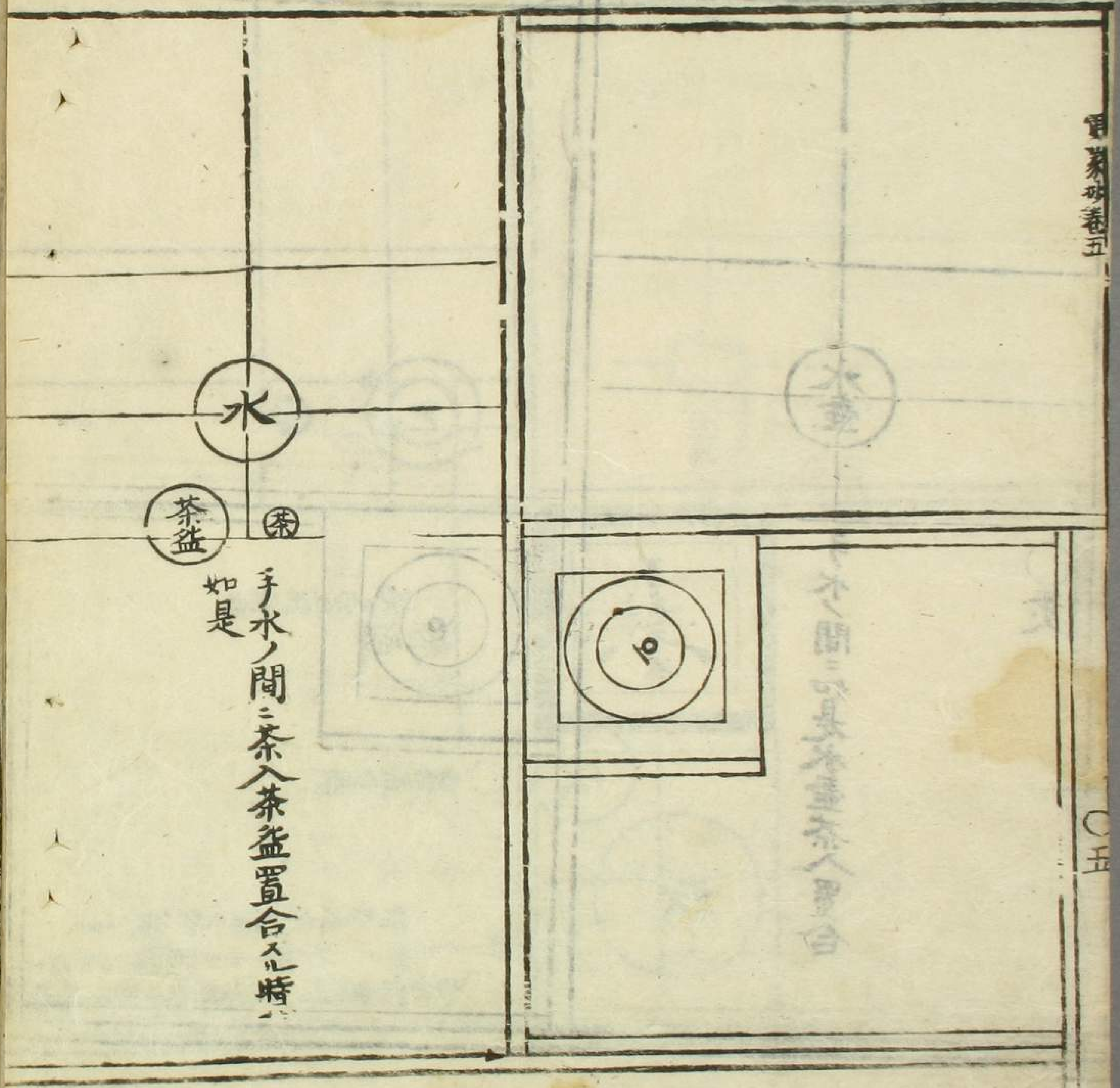


小座敷ニ堂庫付ル事ハ五十歳以後ナラテハ不付若年ニテモ
行歩ノ者ハ付テモ不苦何畳敷ニテモ同然

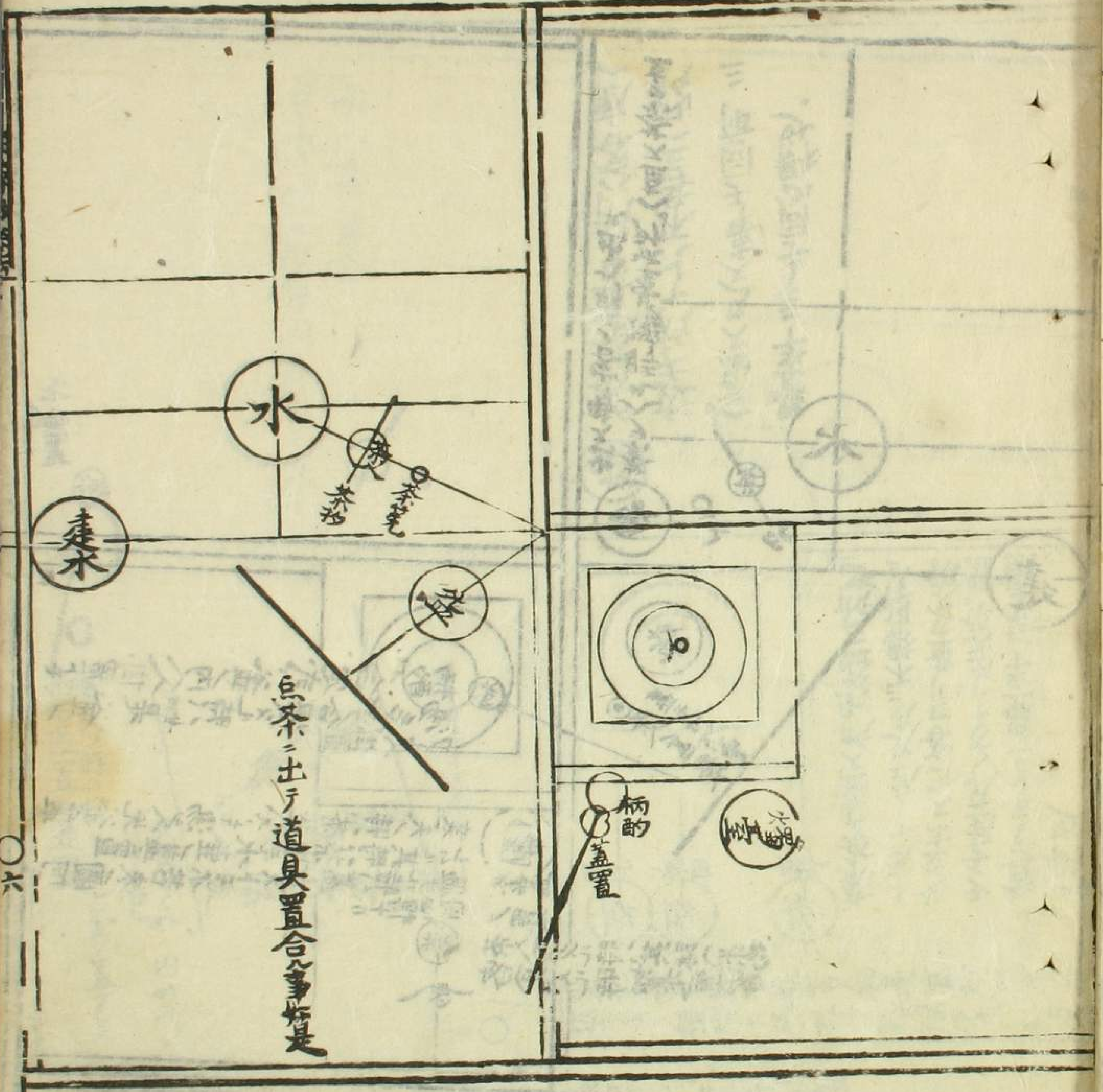
畳半置合圖



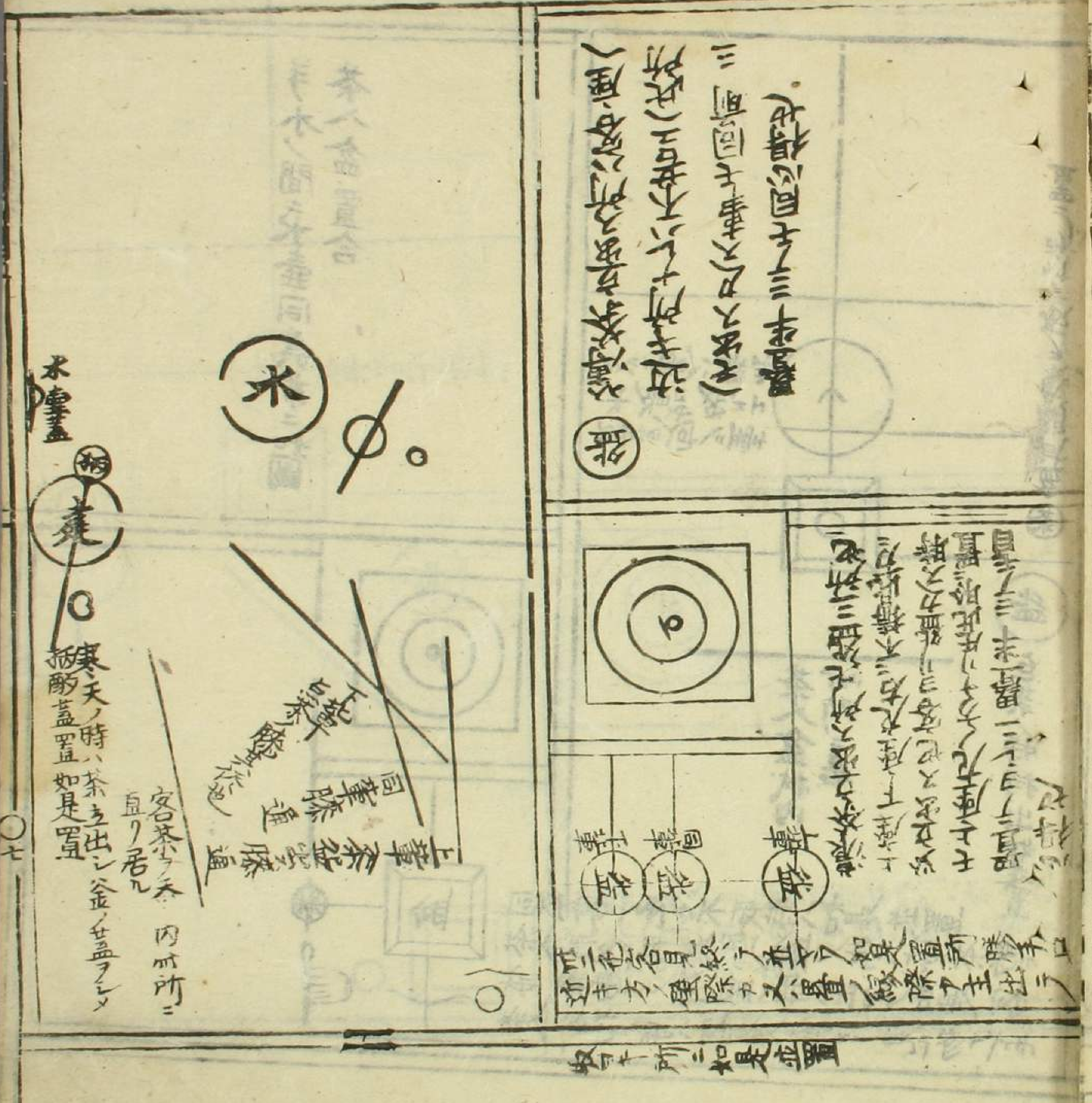

水壷
茶入
手水ノ間ニ如是水壷茶入置合
膝ニ通
炭ノ置時扣ル
香合置ノ所
床ノ方
灰
炭
羽
香合棚ニ置時ハ炭置仕廻テ香合ヲ運ヒ出ス時
棚ヨリ取テ炭斗ニ置出シ
於是表ノ圖モ同心得ナリ
時

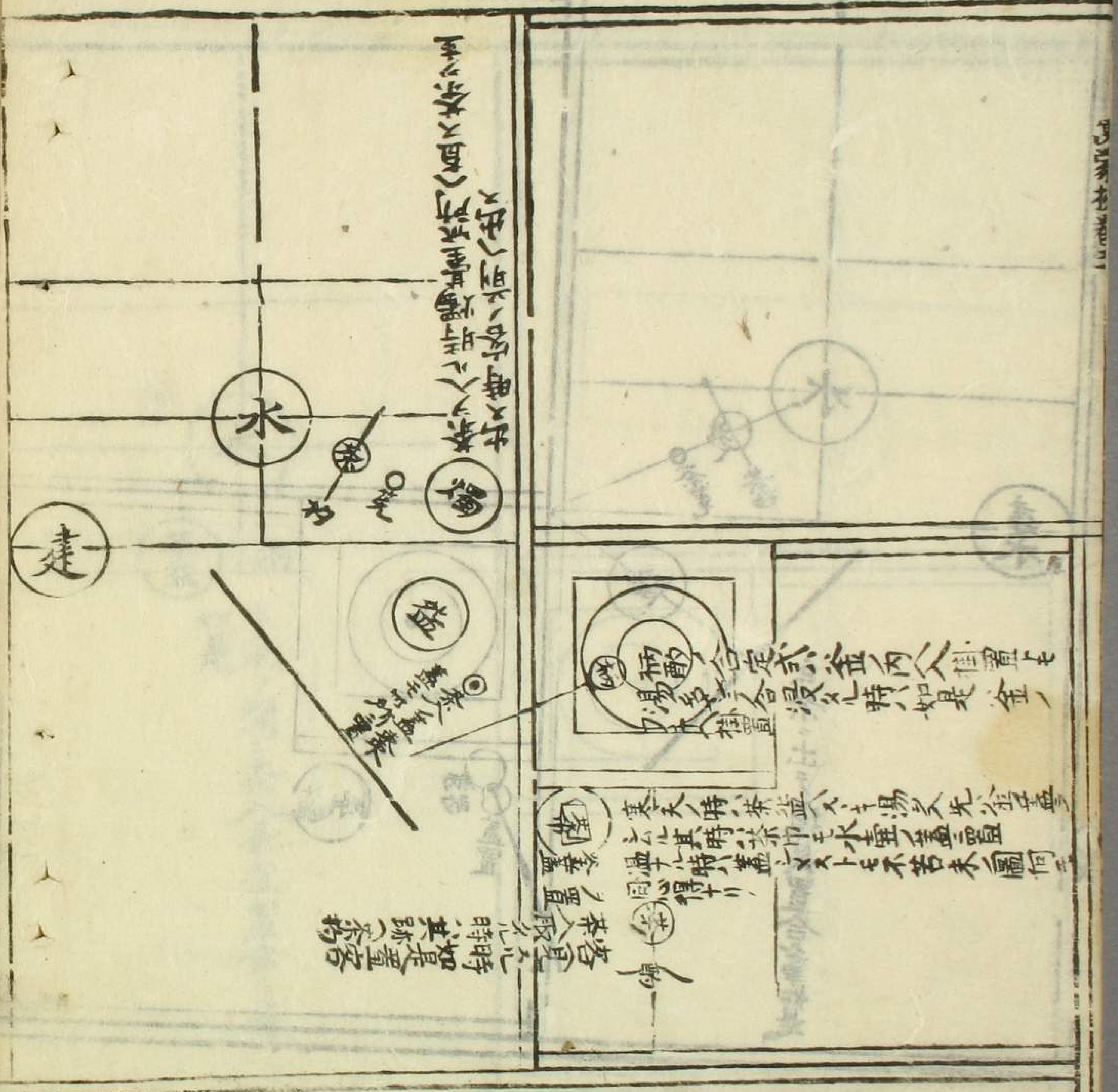


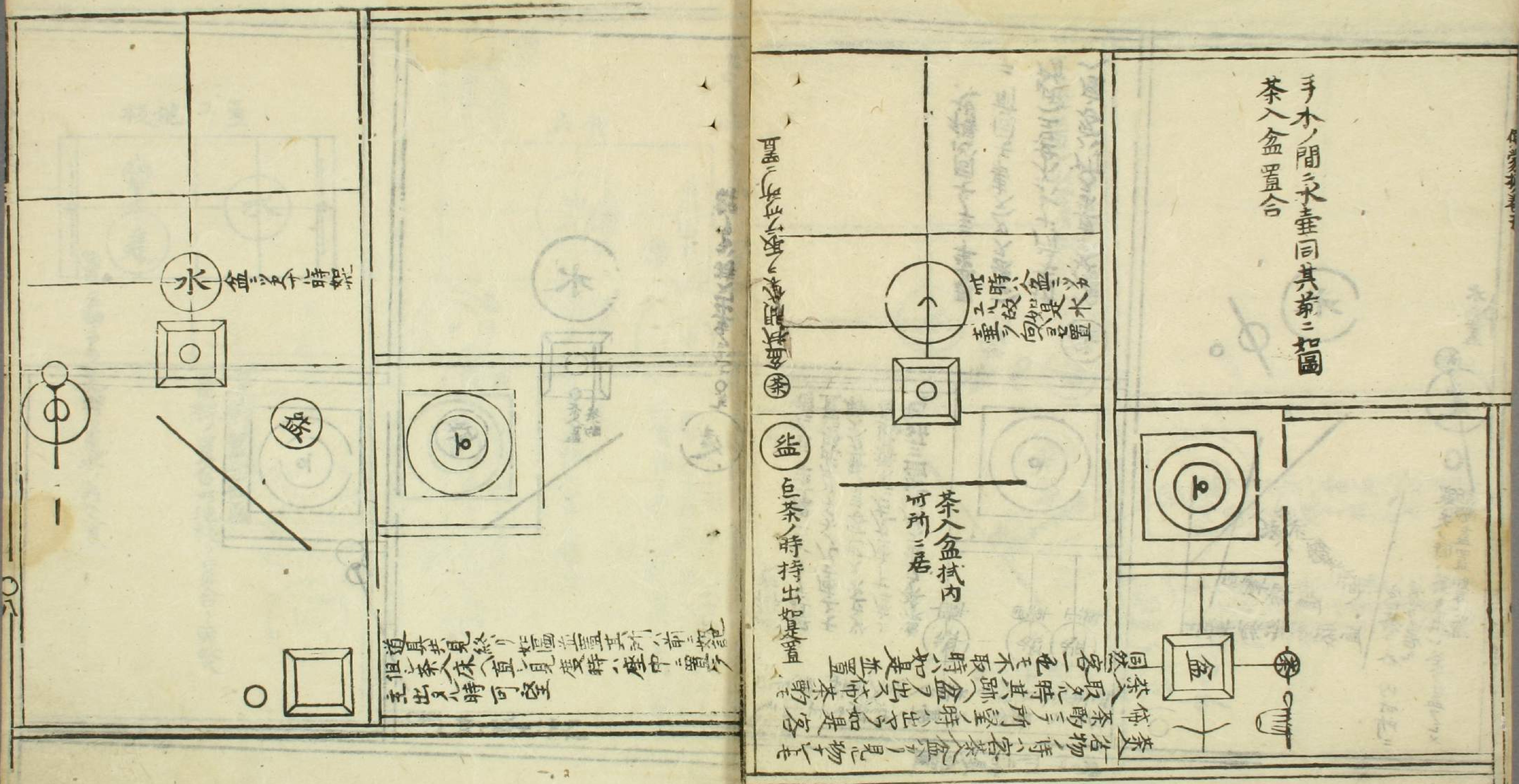
手水ノ間ニ茶入茶盌置合スル時ハ如是



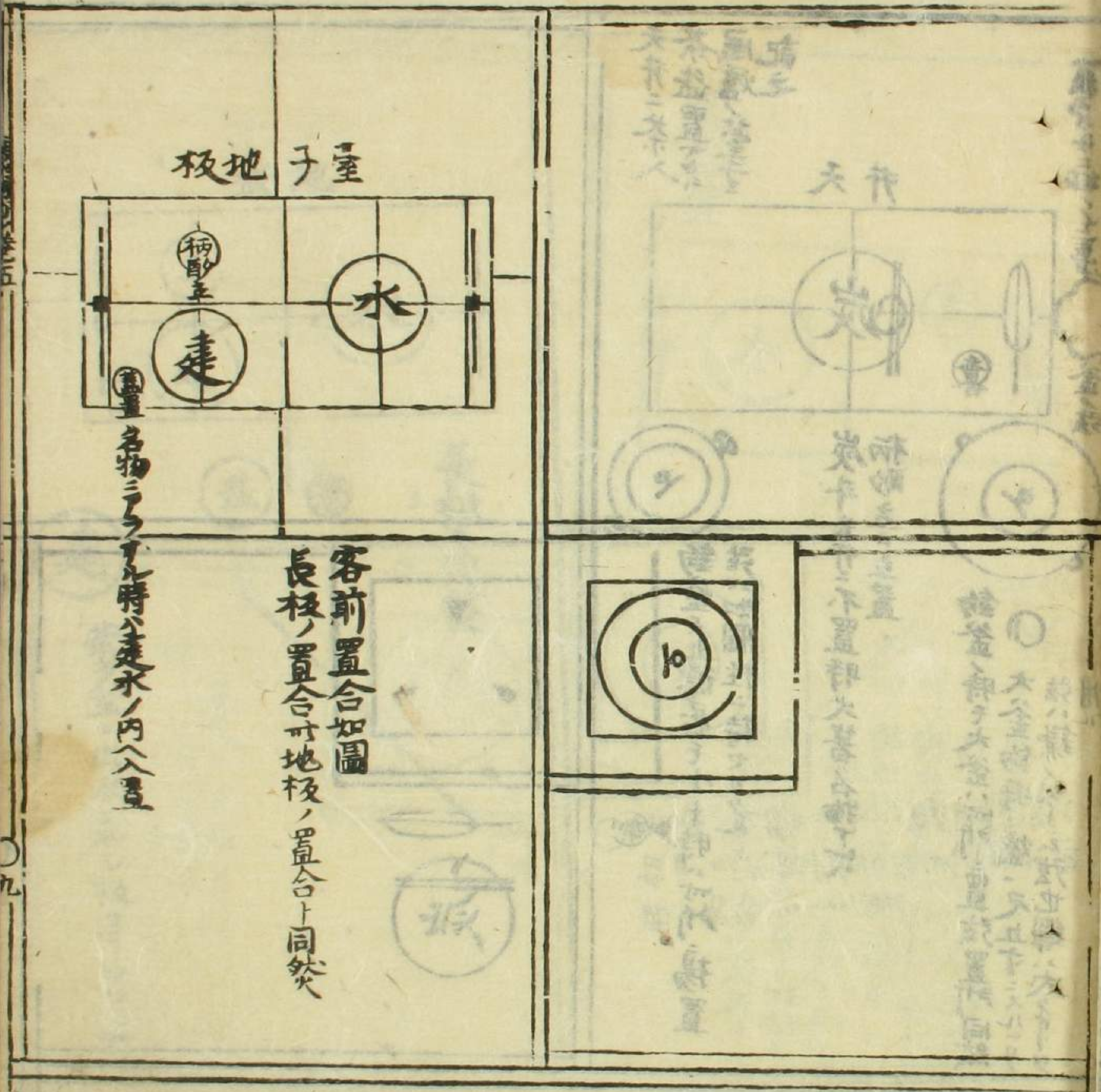
点茶ニ出テ道具置合スル事如是

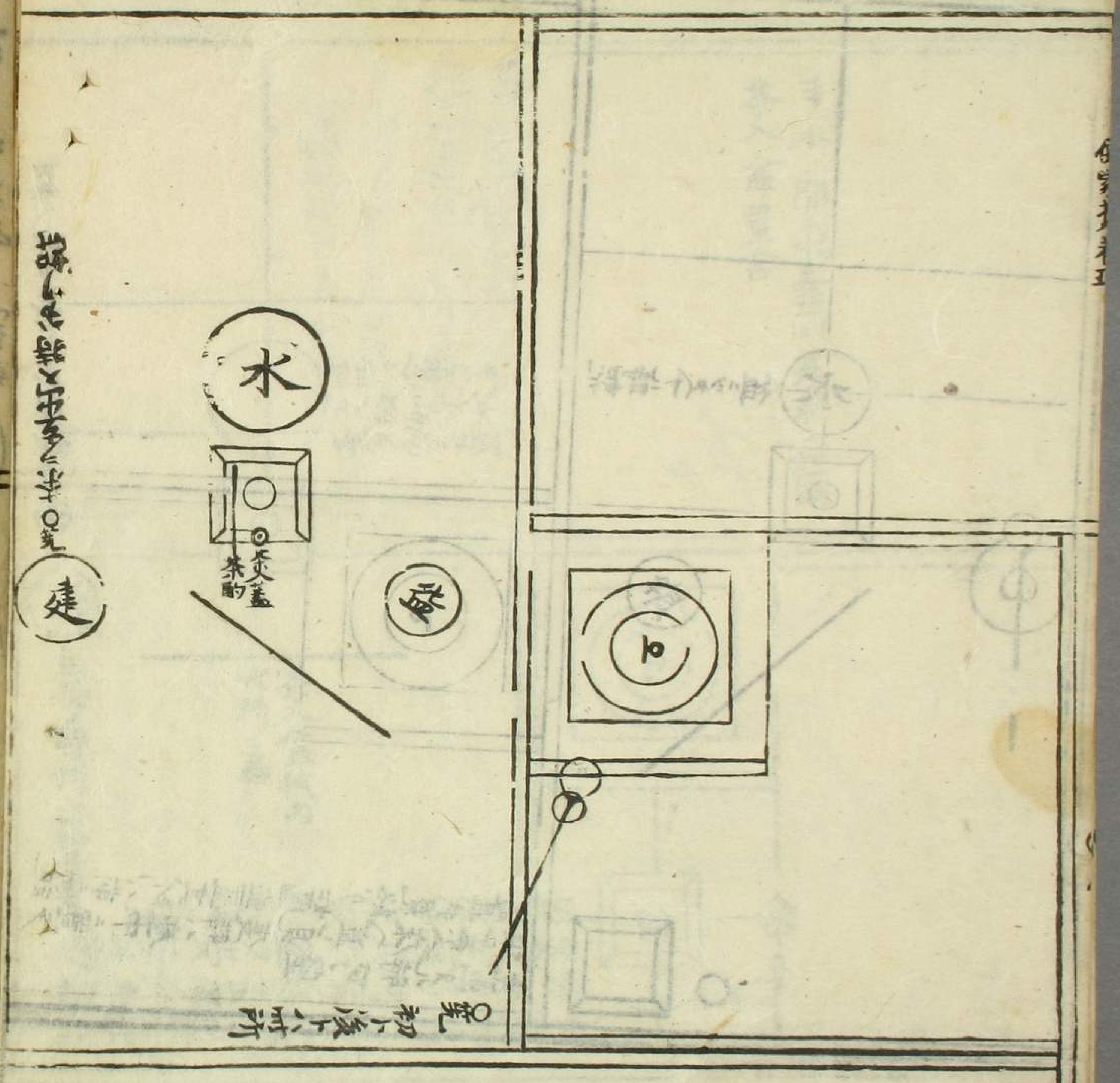

水
寒天ノ時ハ茶立出シ釜ノ蓋
如是置


水
建

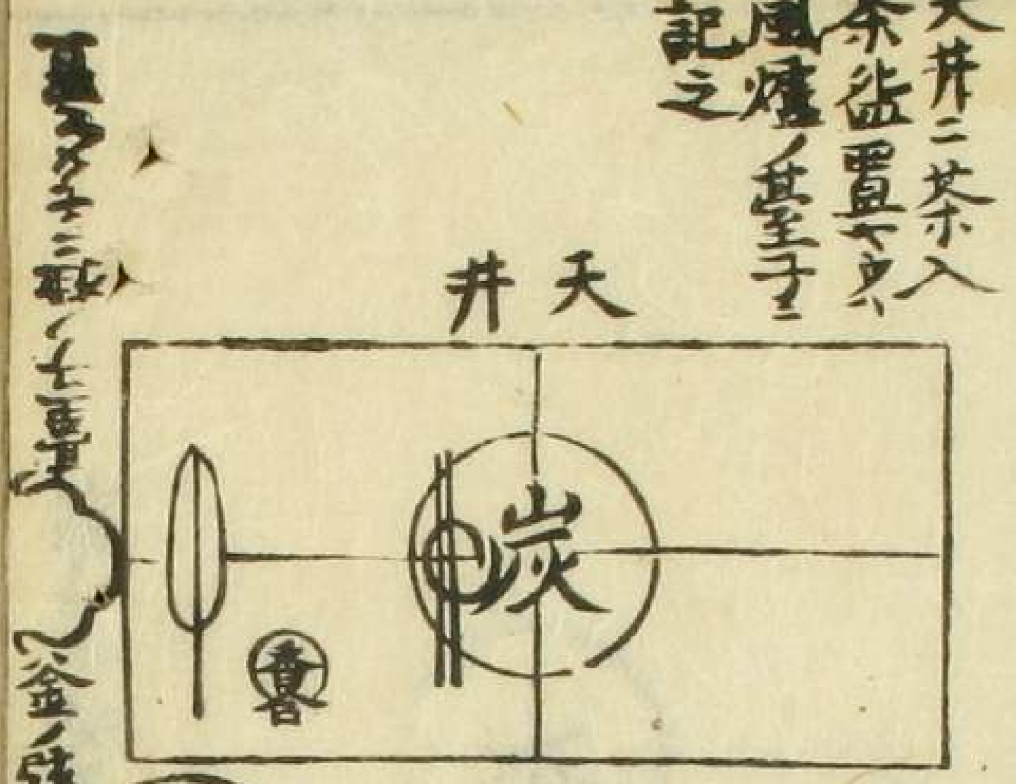

手水ノ間ニ水壺同其前ニ如圖
茶入盆置合
茶入盆拭内
所ニ居
盆
水
茶

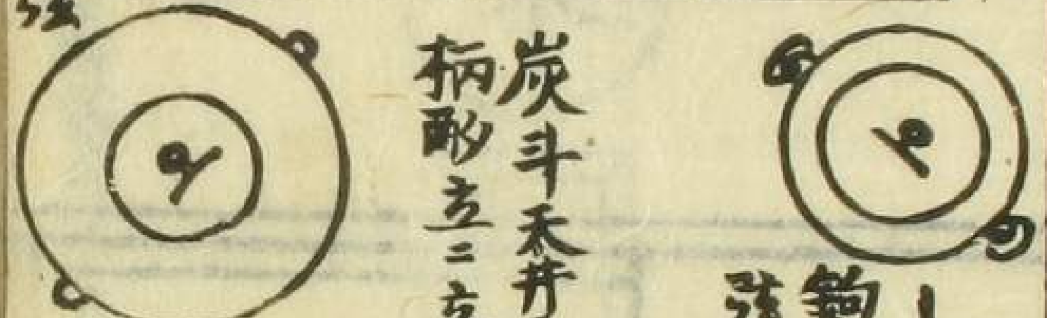
又臺子置合圖


臺子地板
柄杓蓋置
水
建
蓋置名物ニテアラサル時ハ建水ノ内ヘ入置
客前置合如圖
長板ノ置合可地板ノ置合ト同然


水
建
○茶ヲ立出ス時分ヨリ始
茶入
蓋
茶杓
○炭 初ト後トハ此所

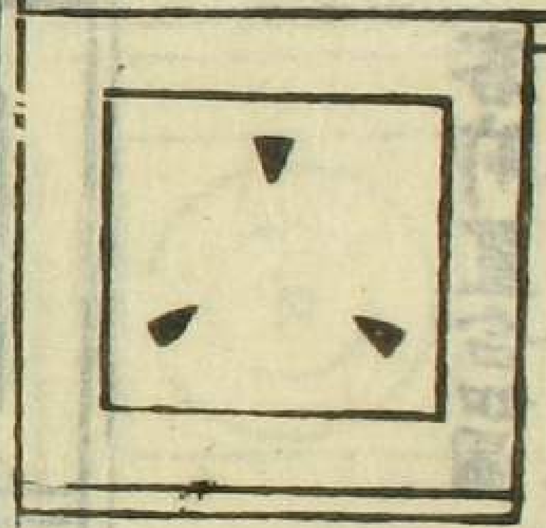
天井ニ茶入茶盌置ク亦風爐ノ釜子ニ記之



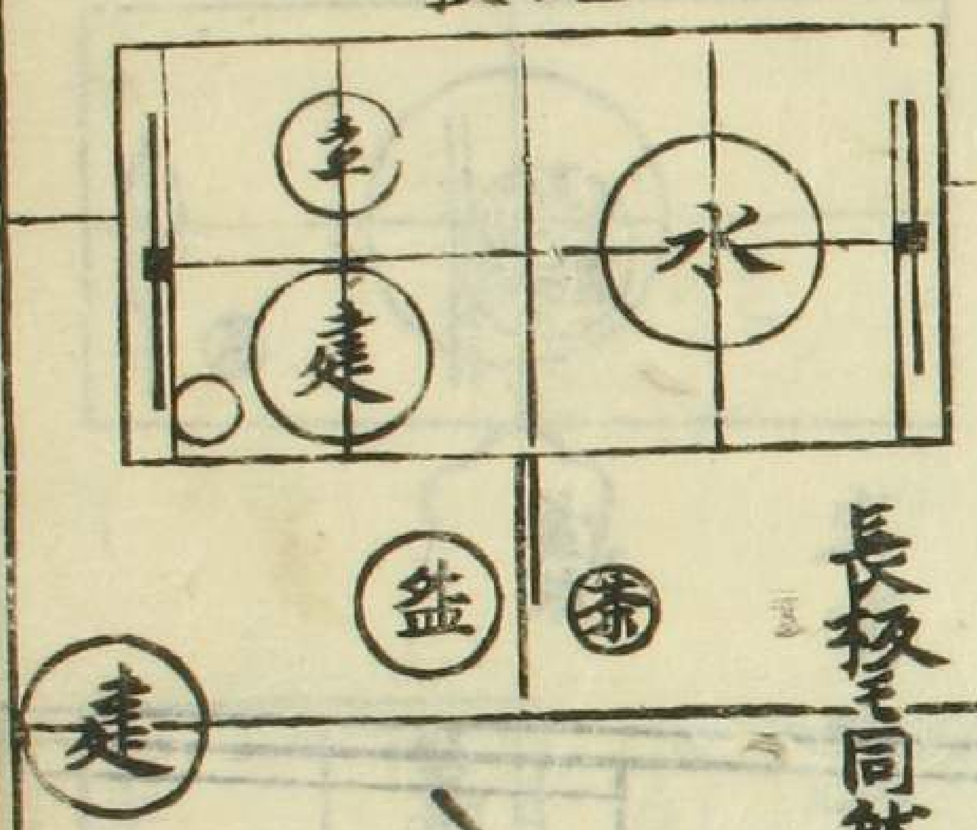


炭斗天井ニ不置時火箸名物ナレハ柄杓立ニ立置

釣釜モ五徳居モ小キ時ハ六所揚置
弦ハ如圖柱ニ持セカクル

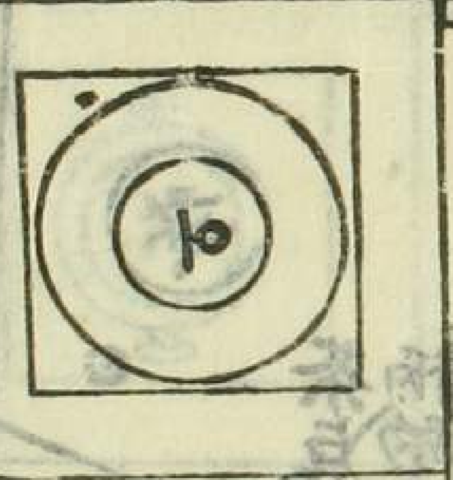


○釣釜ノ時モ大釜ハ六所ニ置弦置所同然
大釜釣時ハ爐ニ尺五寸ニスルナリ
弦ハ鎌ノ刄ト云弦也鐶ハ大ノオリシ用ル



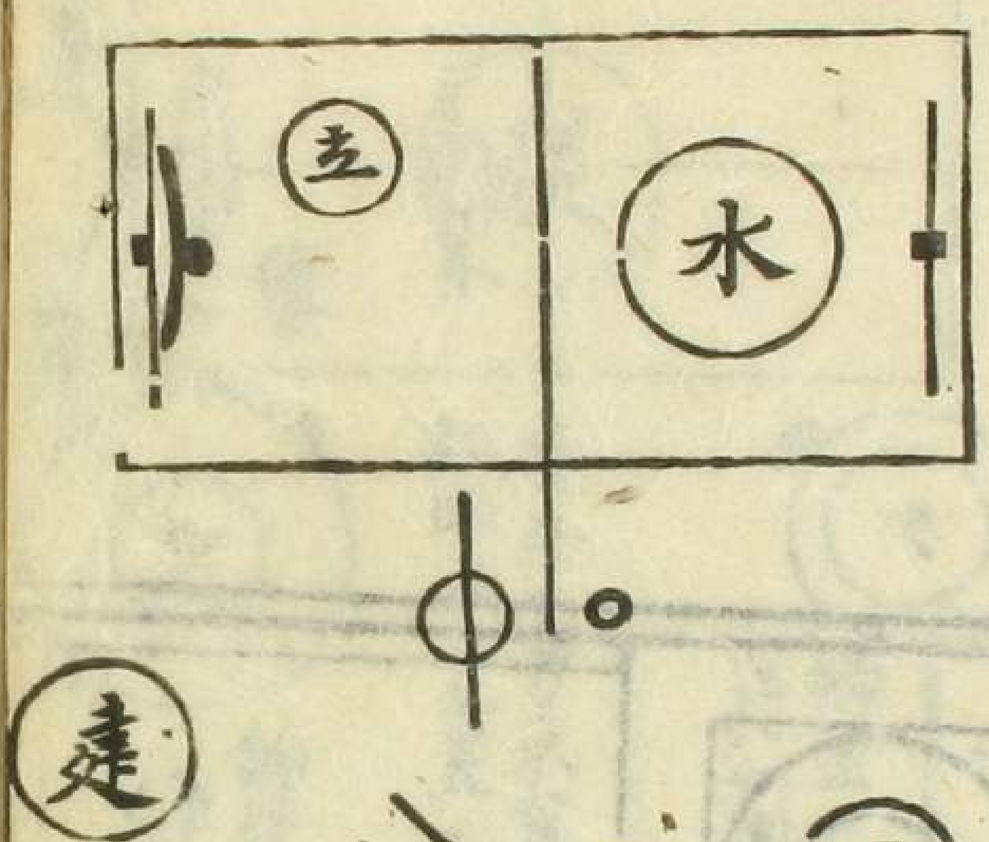
長板モ同然

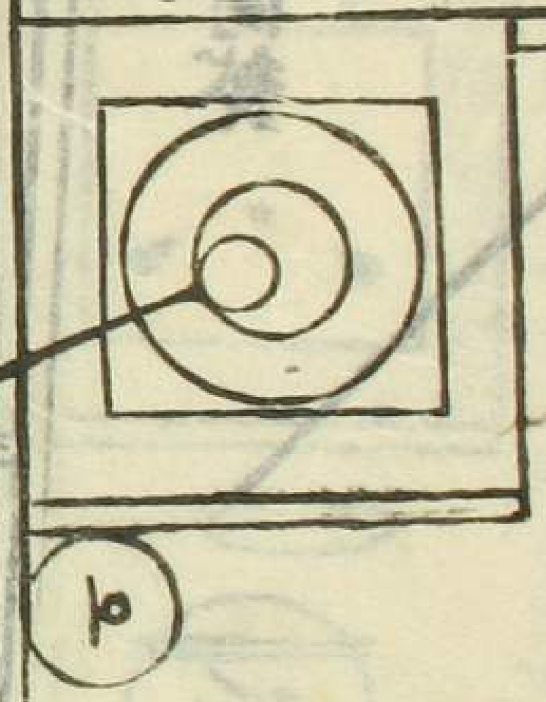
茶ワン立ニ出水ニ水シ板ヨリシロシ如此



○点茶ノ時板ヨリ下ニ如此置柄杓ハ
初中後ノ不置合釜ニ置又合ニ不置
時ハ柄杓立ニ立置

長板同炭

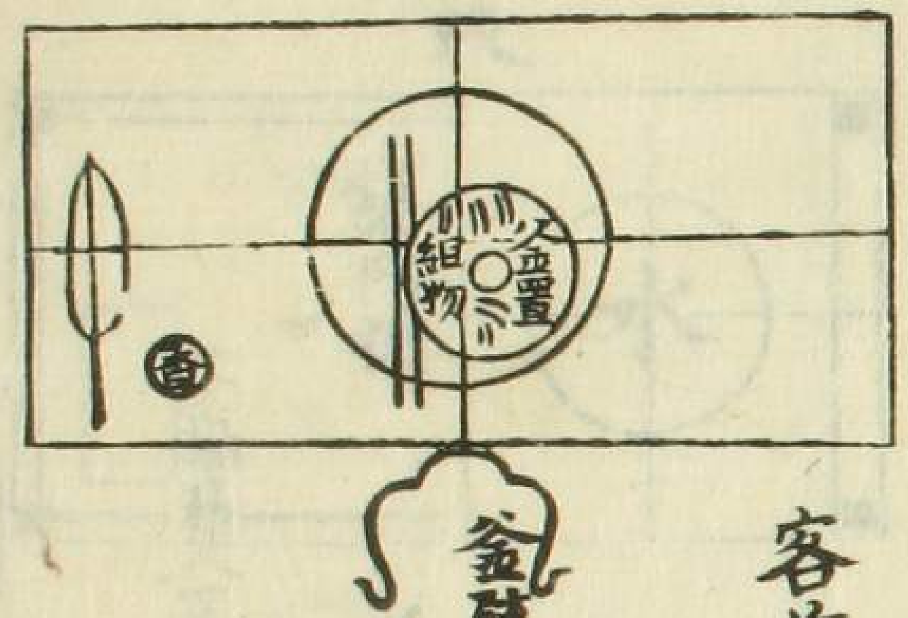




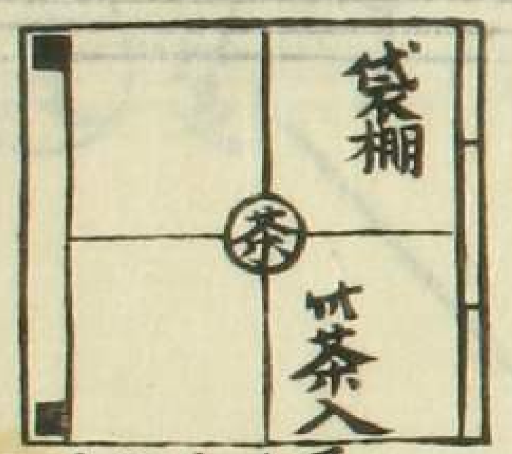
茶臼仕廻茶入茶筅天上ヘ揚柄杓立置蓋置モ如始建水ヲ勝手ヘ持入洗拭テ持出如始地板ニ置扱勝手ヨリ水ヲ持出水壺ヘ指添ル茶巾ヲ客ヘ出シタル時ハ茶筅ノ仕廻ヤウ袋棚ノ圖ニ記ス

袋棚置合圖

天井



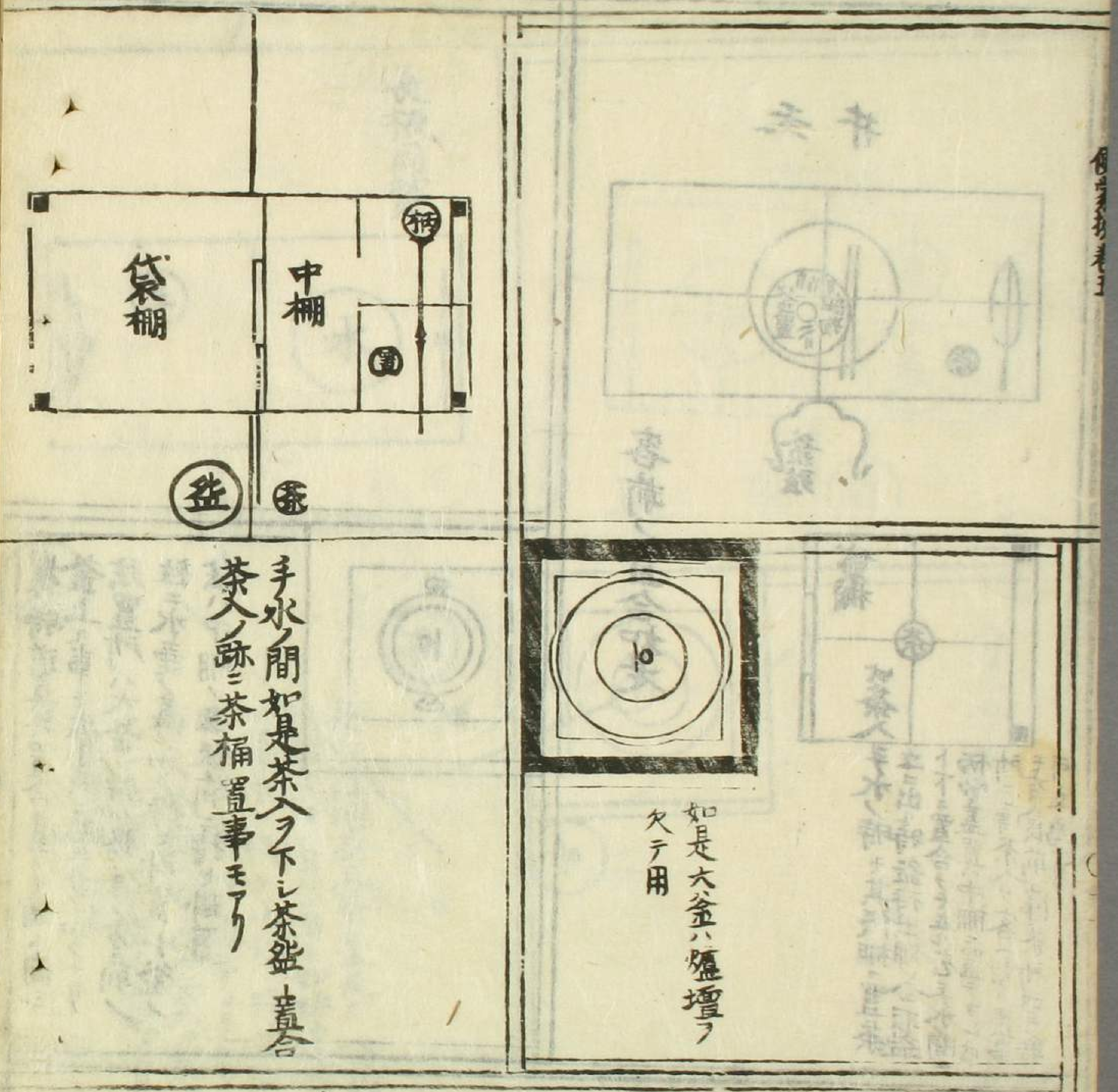
客前ノ置合如是

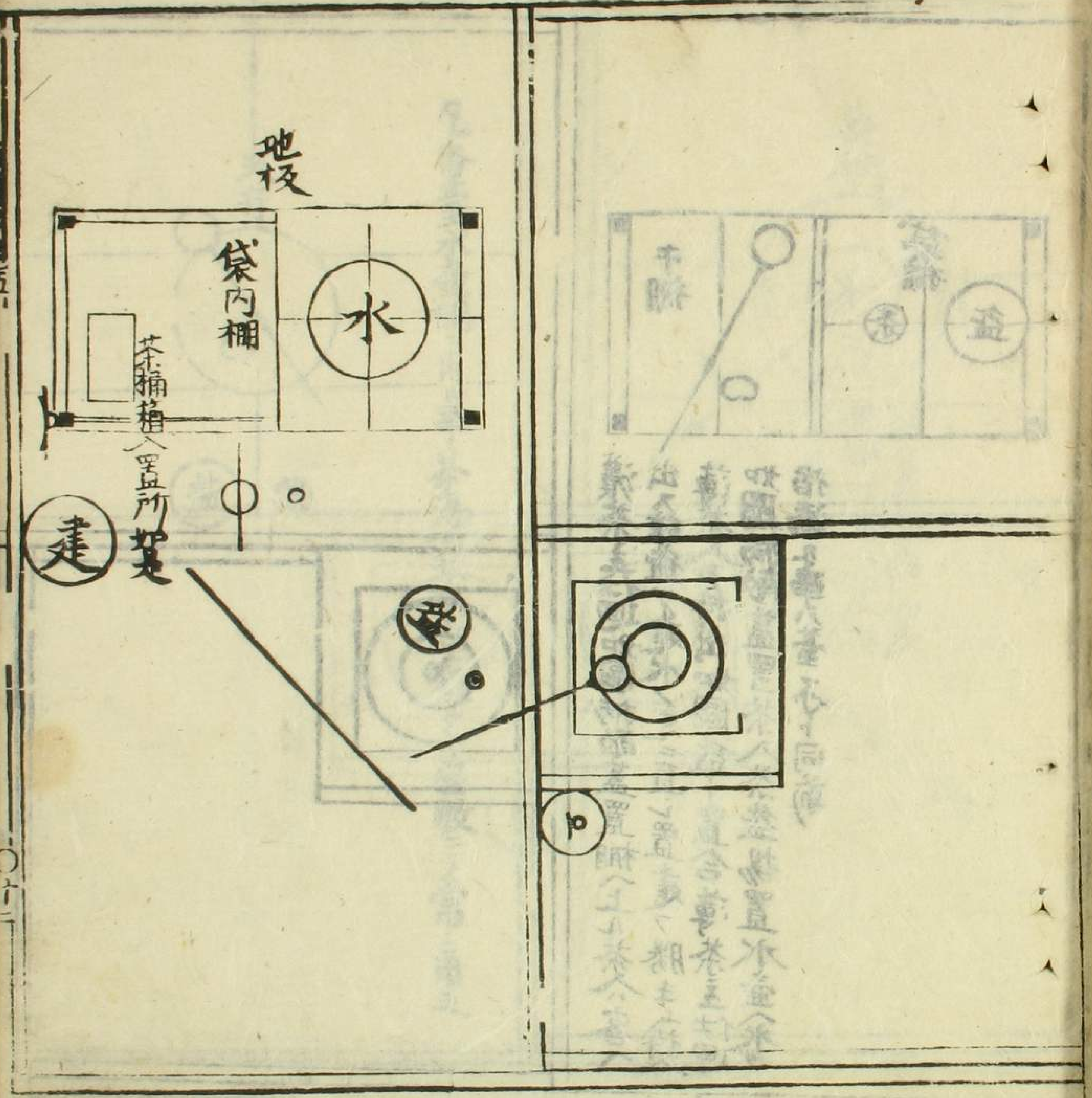


竹茶入

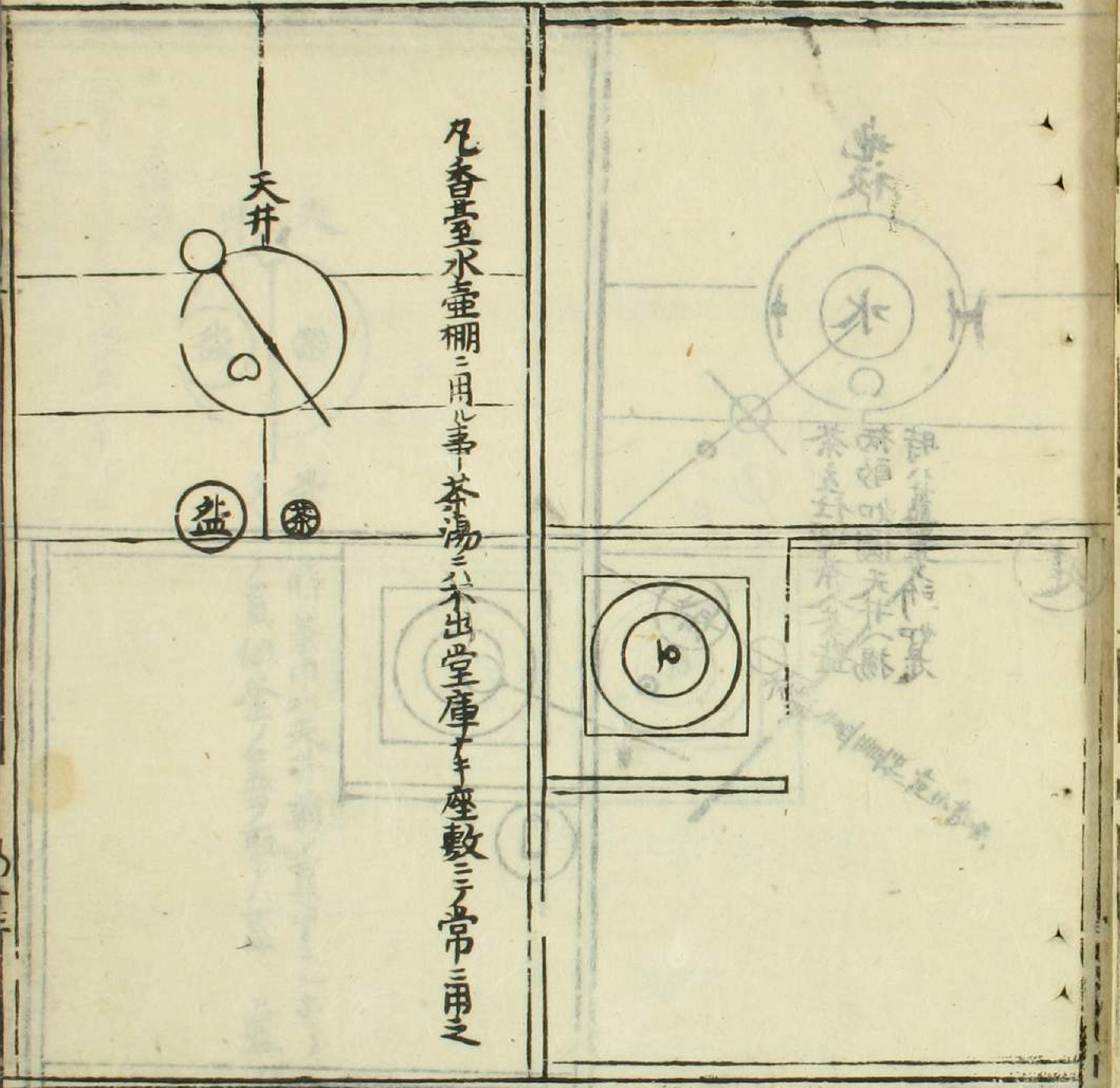
手水ノ時モ其代棚ニ置茶立ニ出ル時盆持出棚ヘ入盆ト下ニ置合テモ立ル也手水間ニ柄杓蓋置ハ中棚ニ置テモ所ニ薄茶ハ客ニ引ヨリ置事モ有食前薄茶所望ノ時可立為ナリ

炭ノ時道具共置合ハ上ノ圖ト同シ釜上ル事モ大小共ニ此圖ノ如クナリ弦置所ハ大釜ノ時ハ勝手ノ方前ノ柱ニ水壺ノ蓋ノ如ク持セ掛置小釜ノ弦ハ中棚ノ立板前ニ持セ掛置

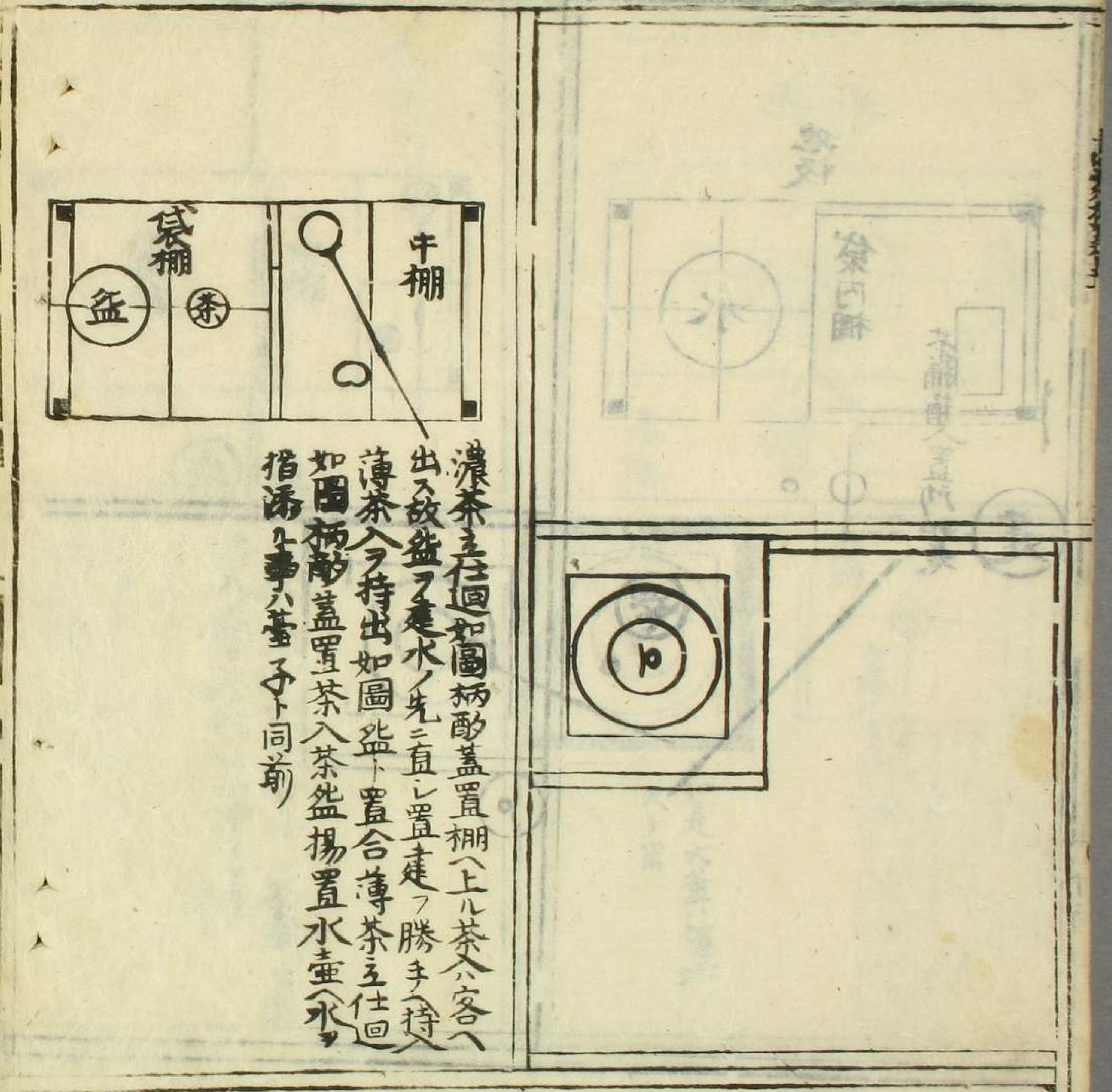

袋棚
中棚
盆
手水ノ間如是茶入ヲ下シ茶盌ニ置合
茶入ノ跡ニ茶桶置事モアリ
如是大釜ハ爐壇ヲ欠テ用


地板
袋内棚
水
茶桶箱ヘ置所如是
建

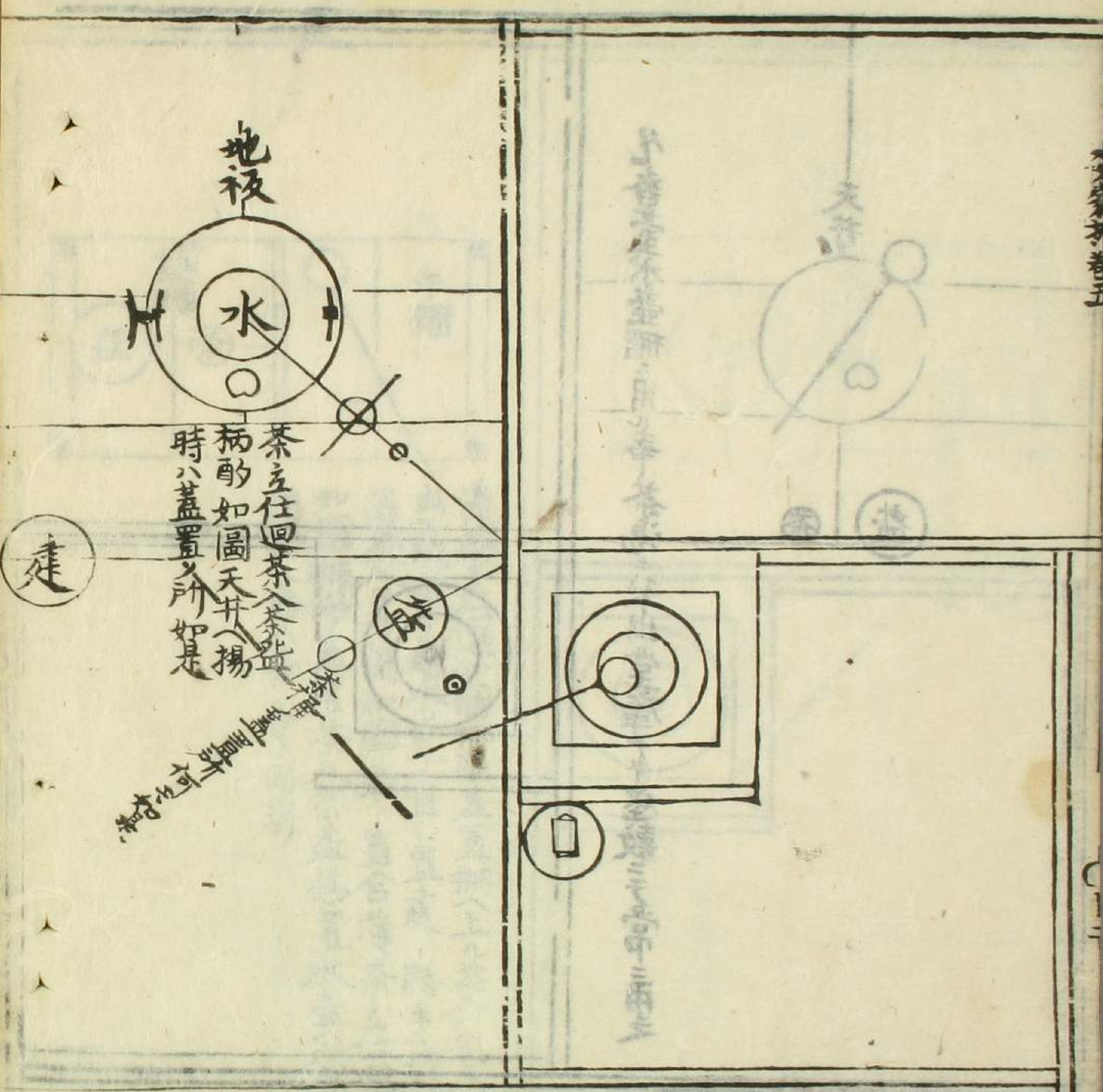
丸香臺置合圖

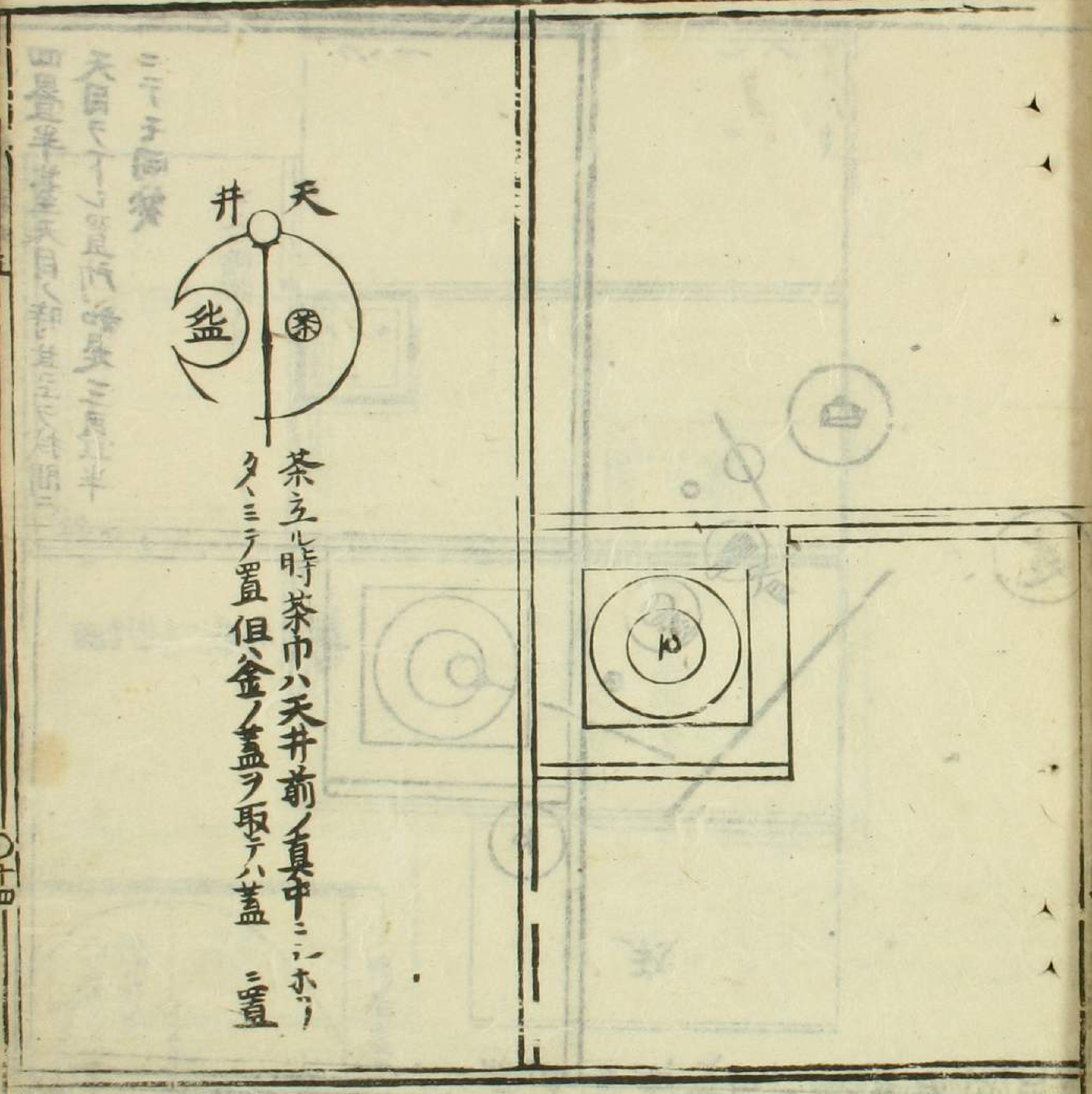


丸香臺水壺棚ニ用ル事 茶湯ニハ不出 堂庫ナト座敷ニテ常ニ用之

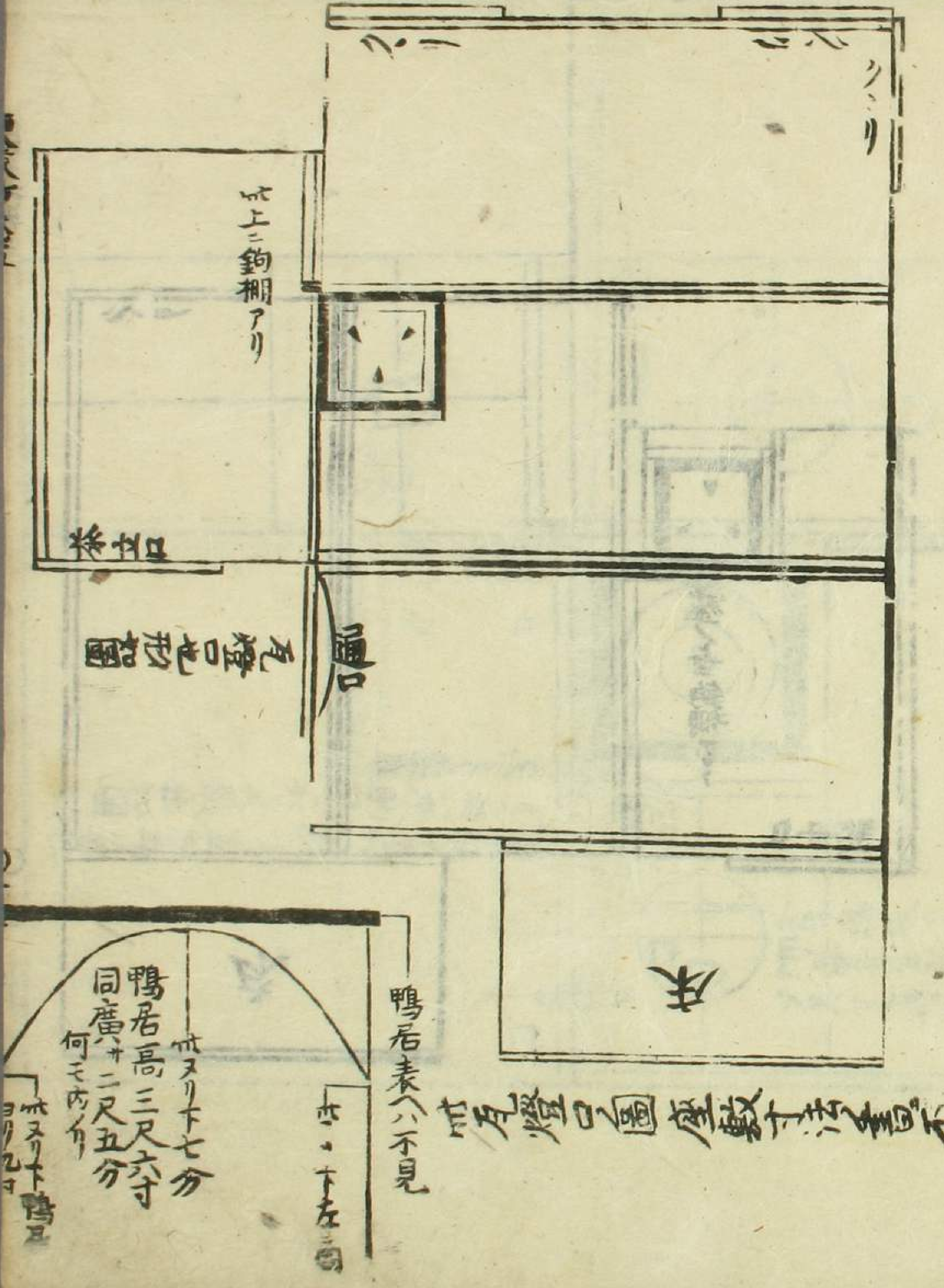


濃茶立仕廻 如圖柄酌蓋置棚ヘ上ル 茶入ハ客ヘ出ス故 盆ヲ建水ノ先ニ直シ置 建ヲ勝手ヘ持入 薄茶入ヲ持出 如圖盆ト置合 薄茶立仕廻 如圖柄酌蓋置茶入茶盆揚置 水壺ヘ水ヲ指 湯ハ事ハ臺子ト同前

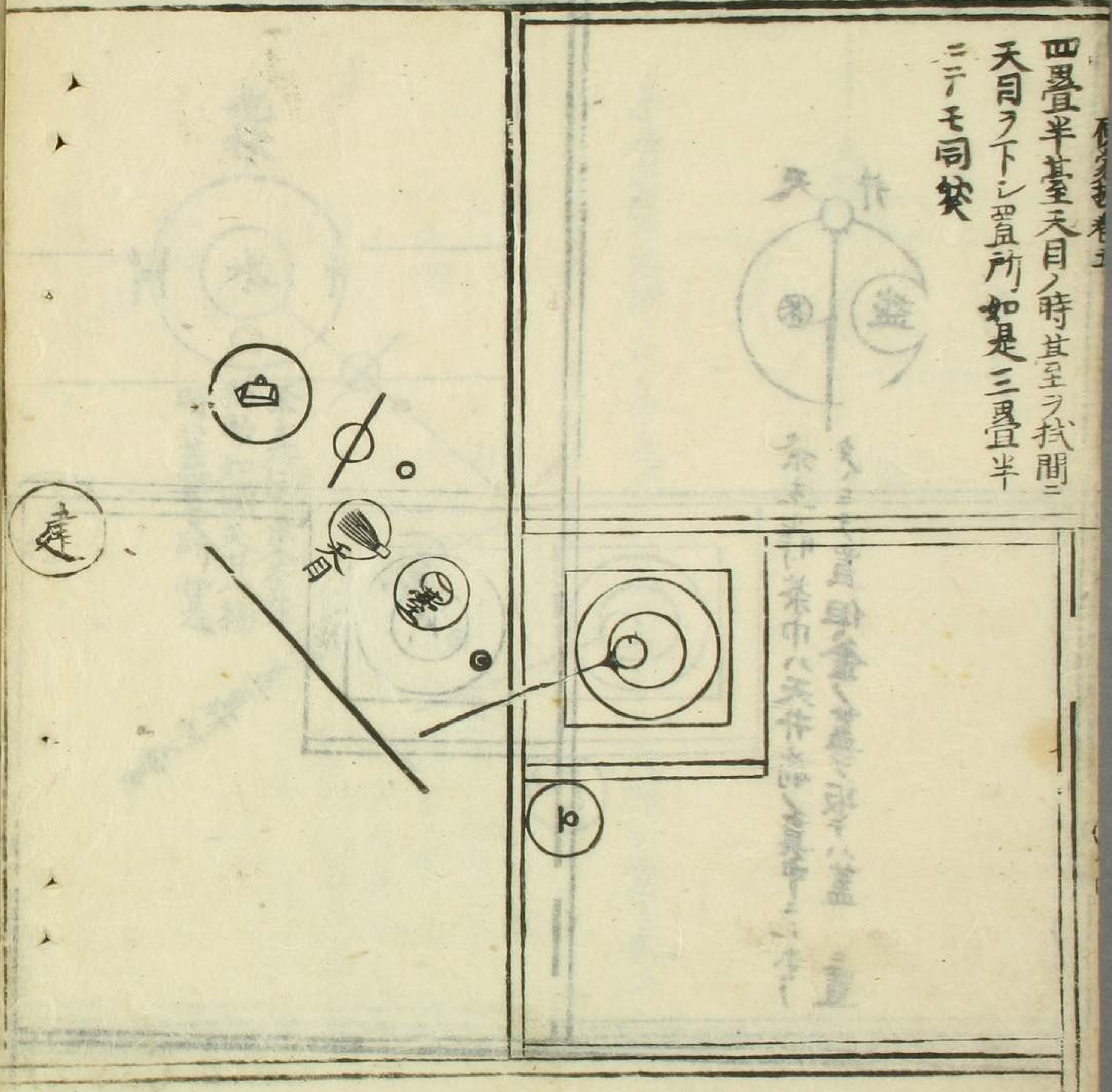

地板
水
建
盞
茶立仕回茶入茶盞
柄酌如圖天井ヘ揚
時ハ盞置ス所如是
茶筅


天井
盞
茶
茶立ル時茶巾ハ天井前ノ真中ニホツ
タヽミテ置 但シ釜ノ蓋ヲ取テハ盞
ニ置

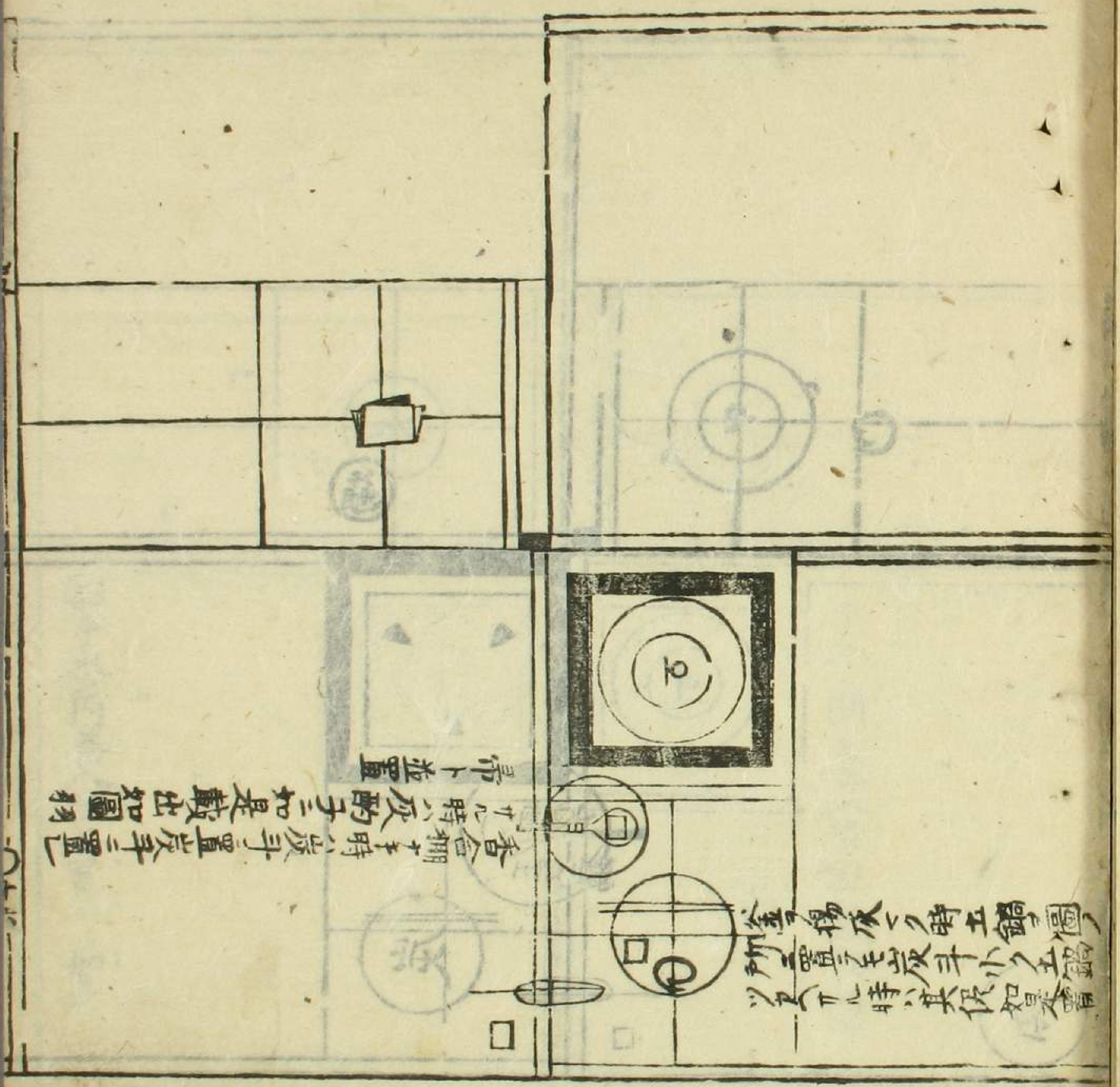
三疊半之圖



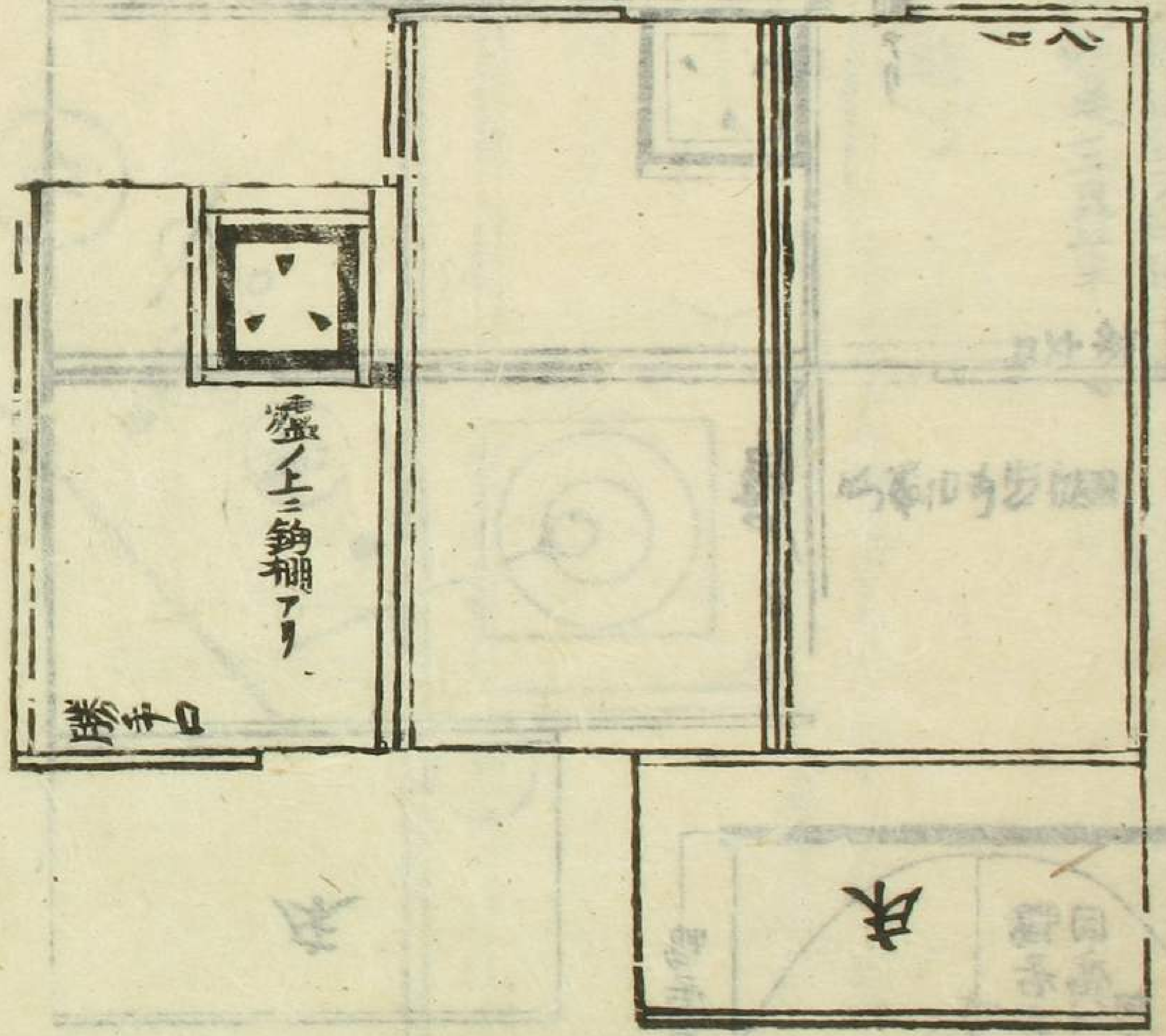
四疊半臺子天目ノ時其臺ヲ拭間ニ天目ヲ下シ置所如是三疊半ニテモ同然

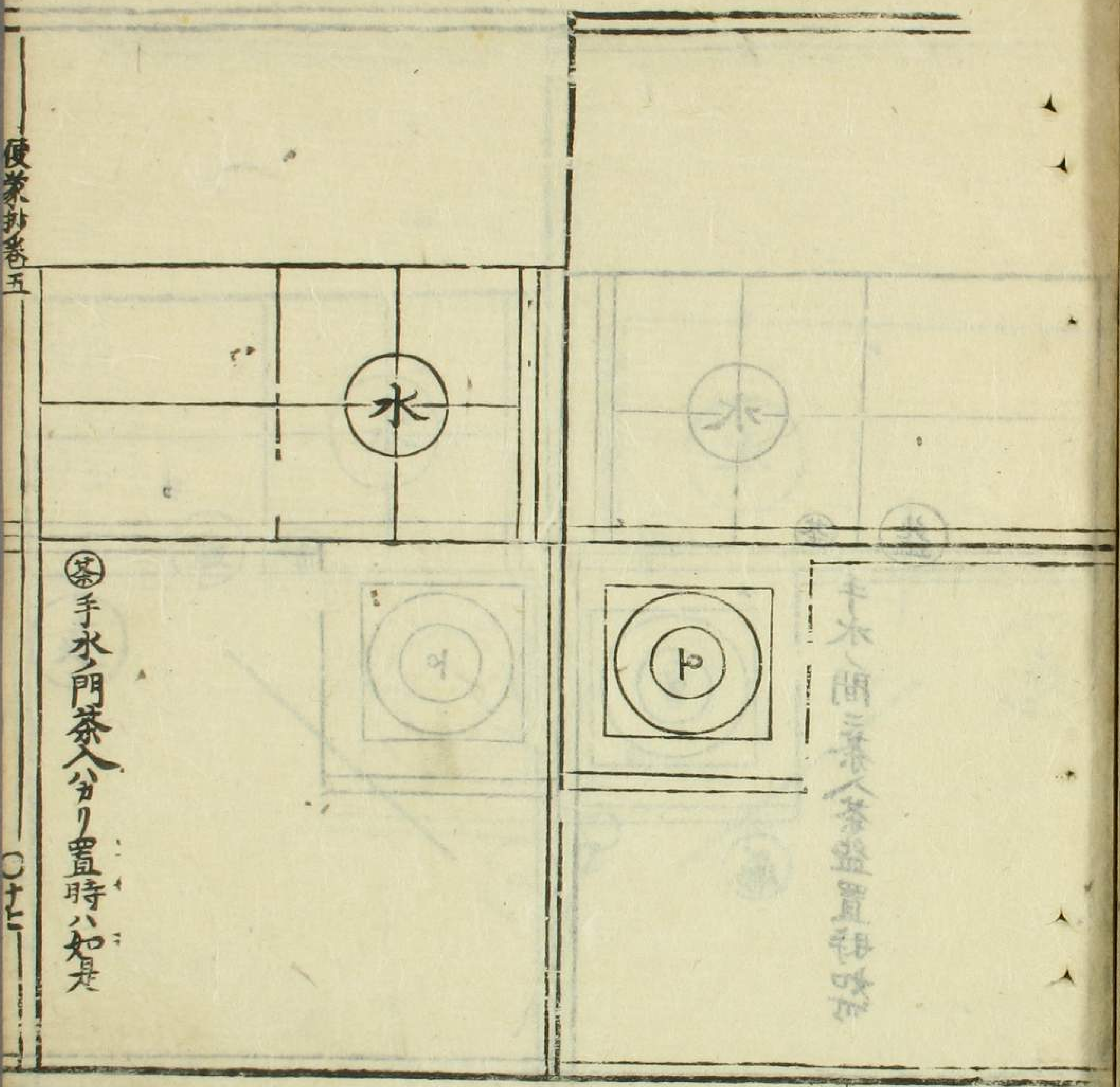


三疊半置合圖

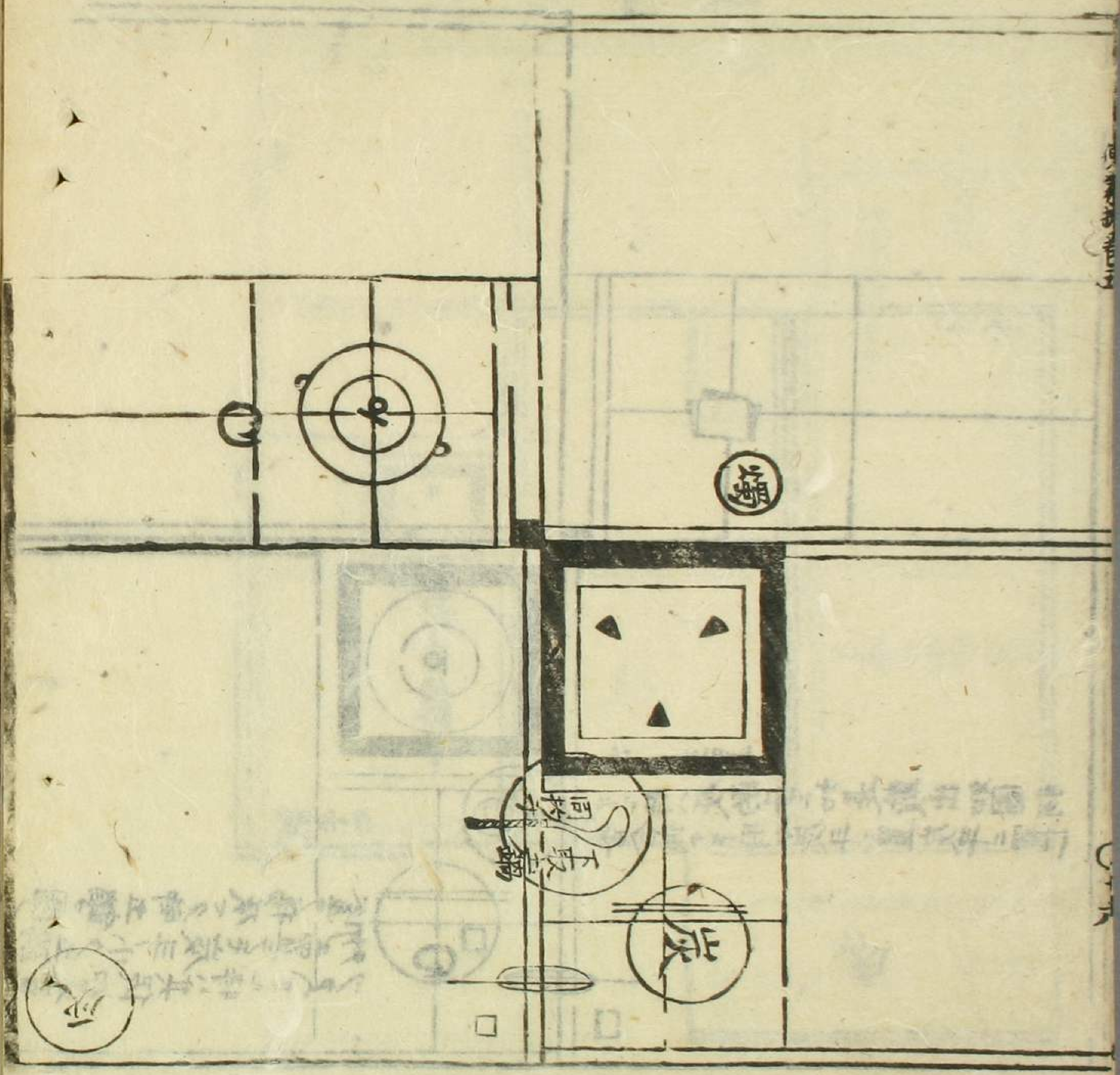


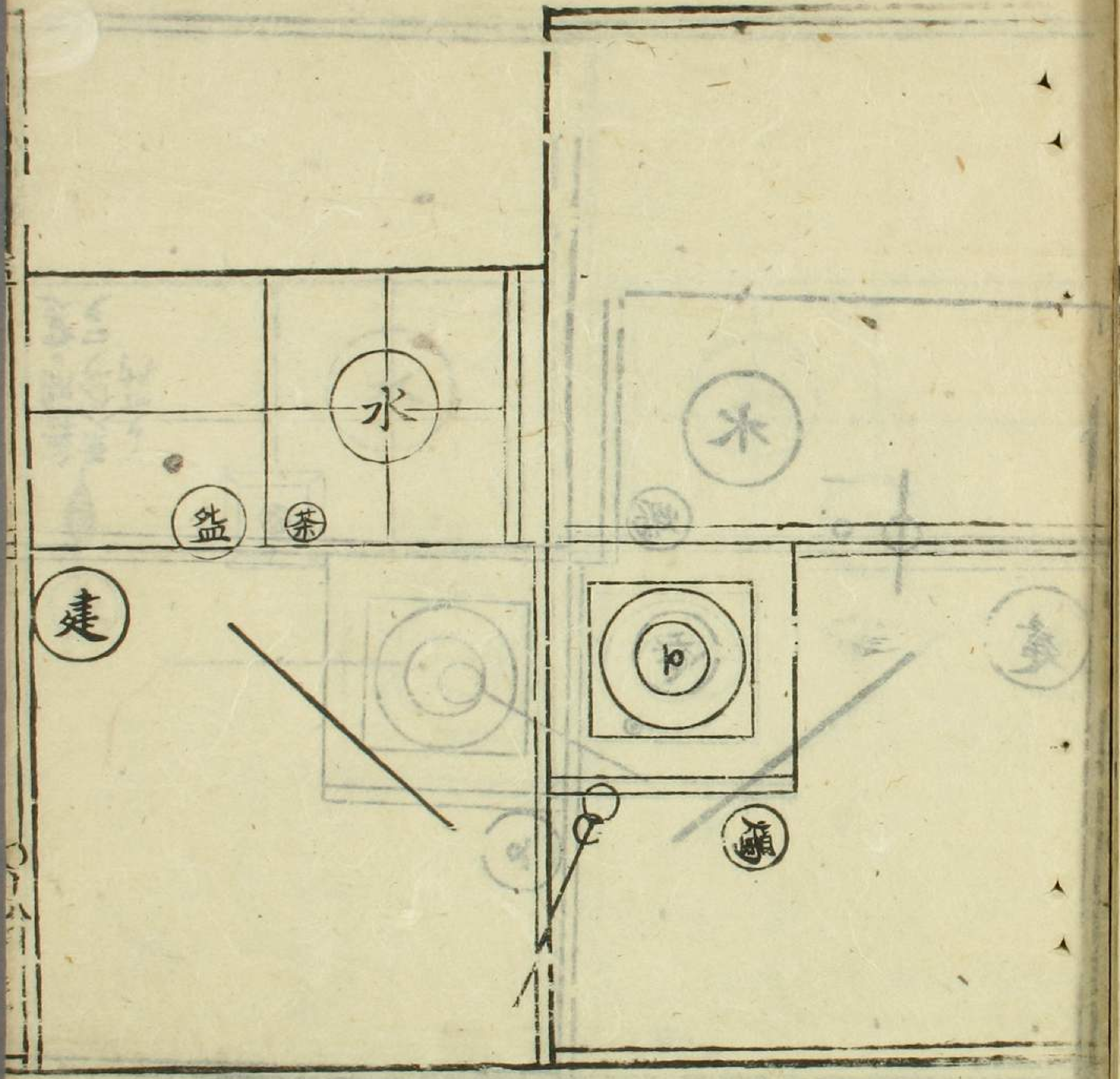
二疊半之圖



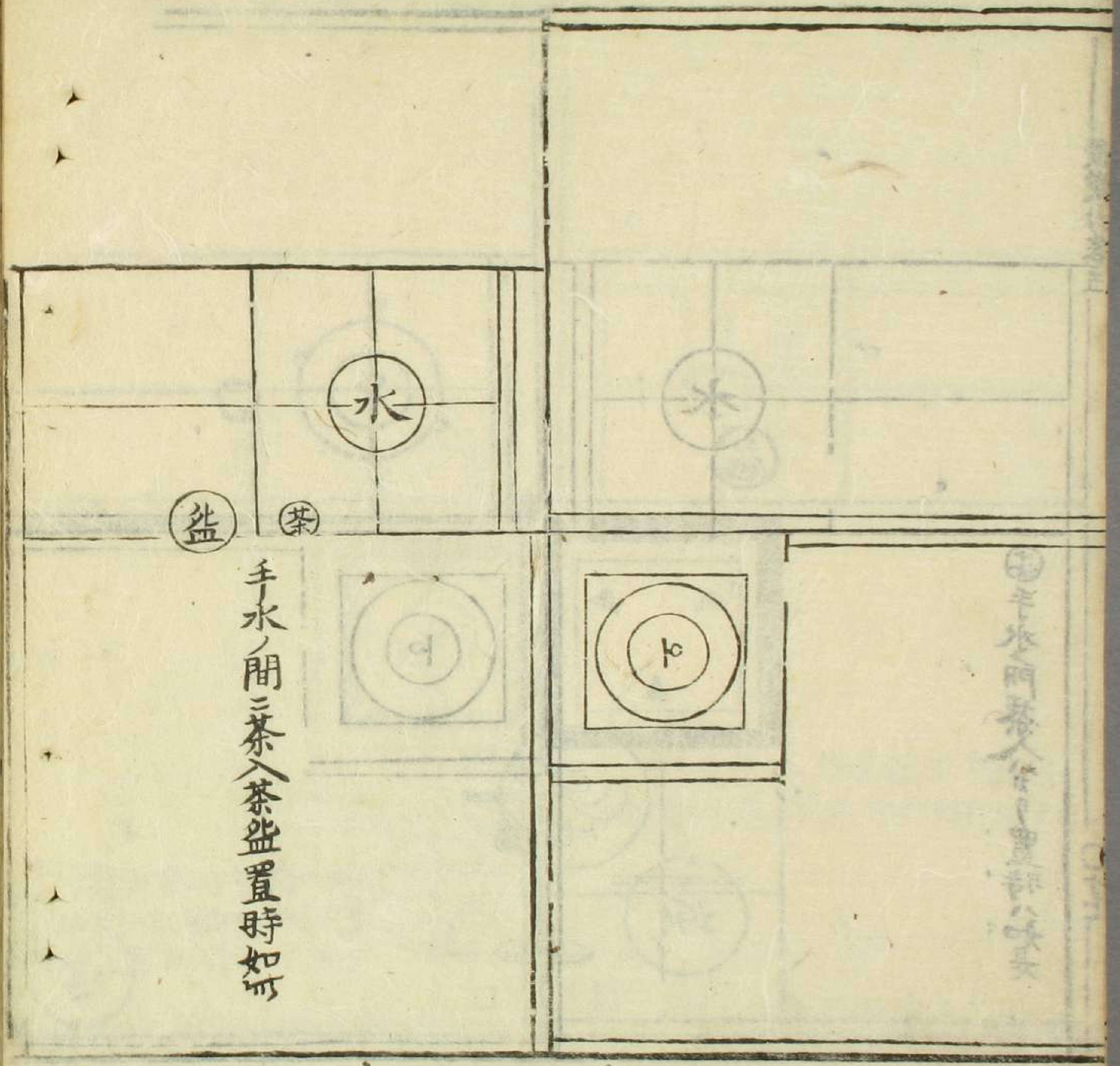


茶 手水ノ門茶入分リ置時ハ如是

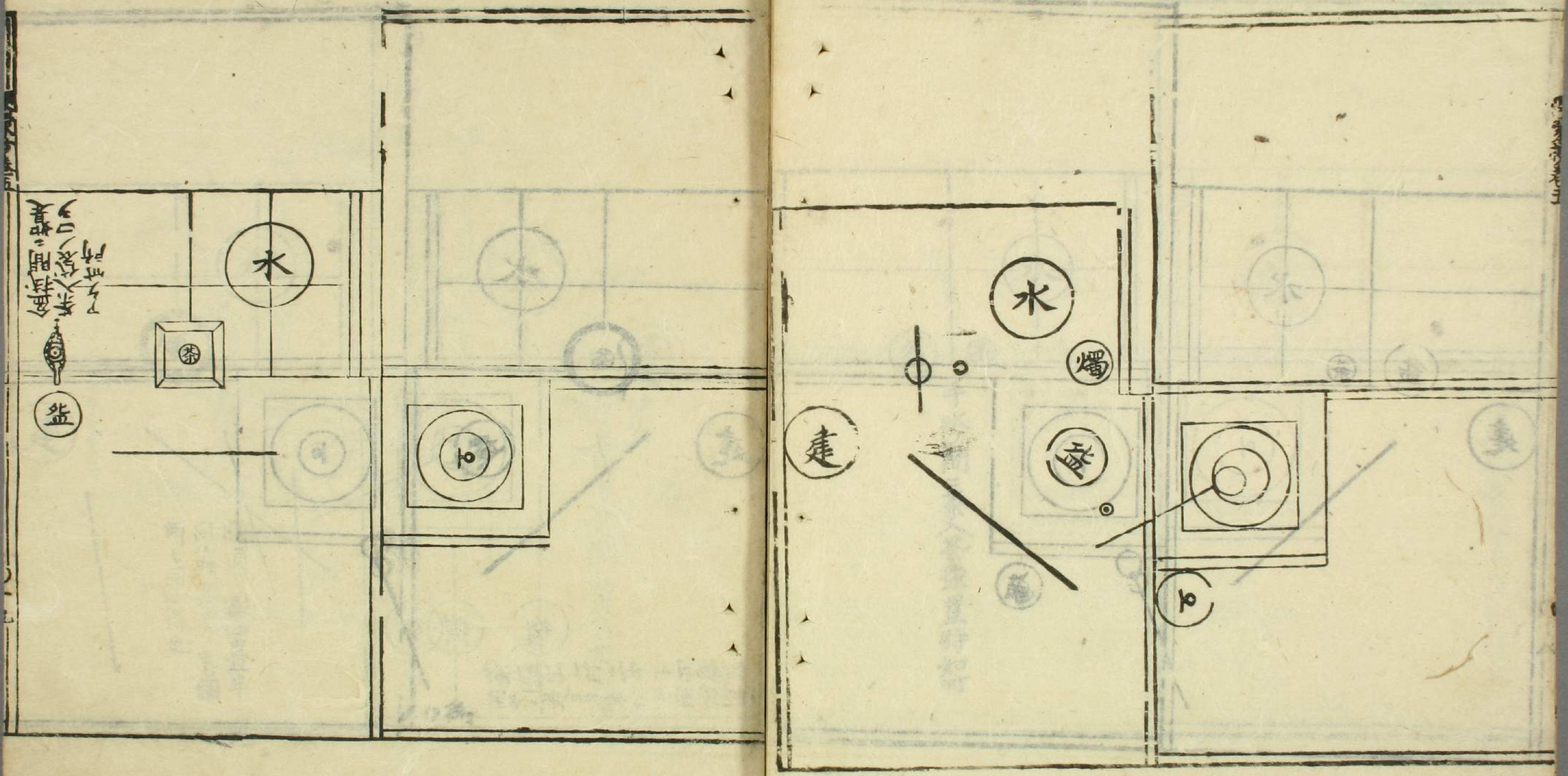


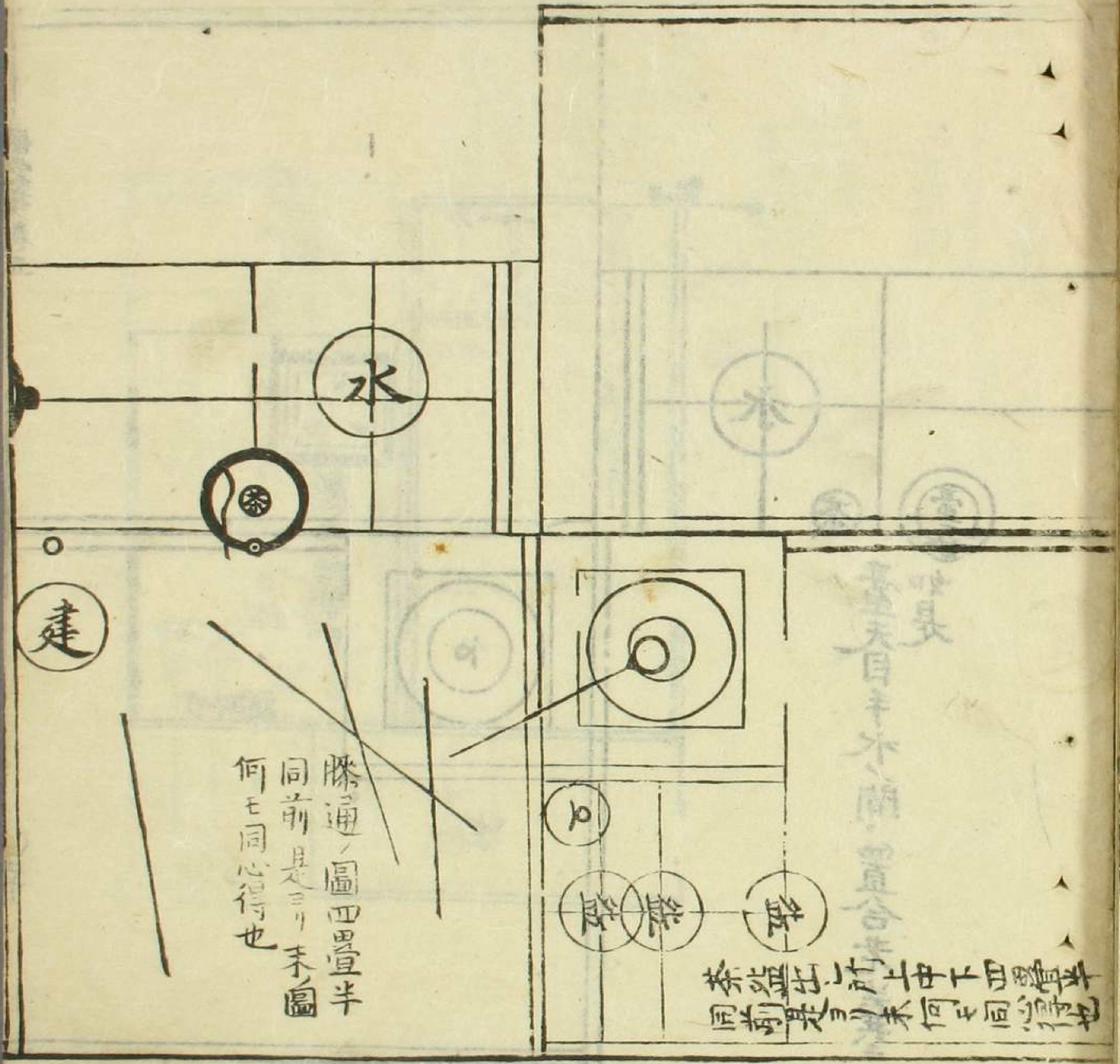


水
盌
茶
建

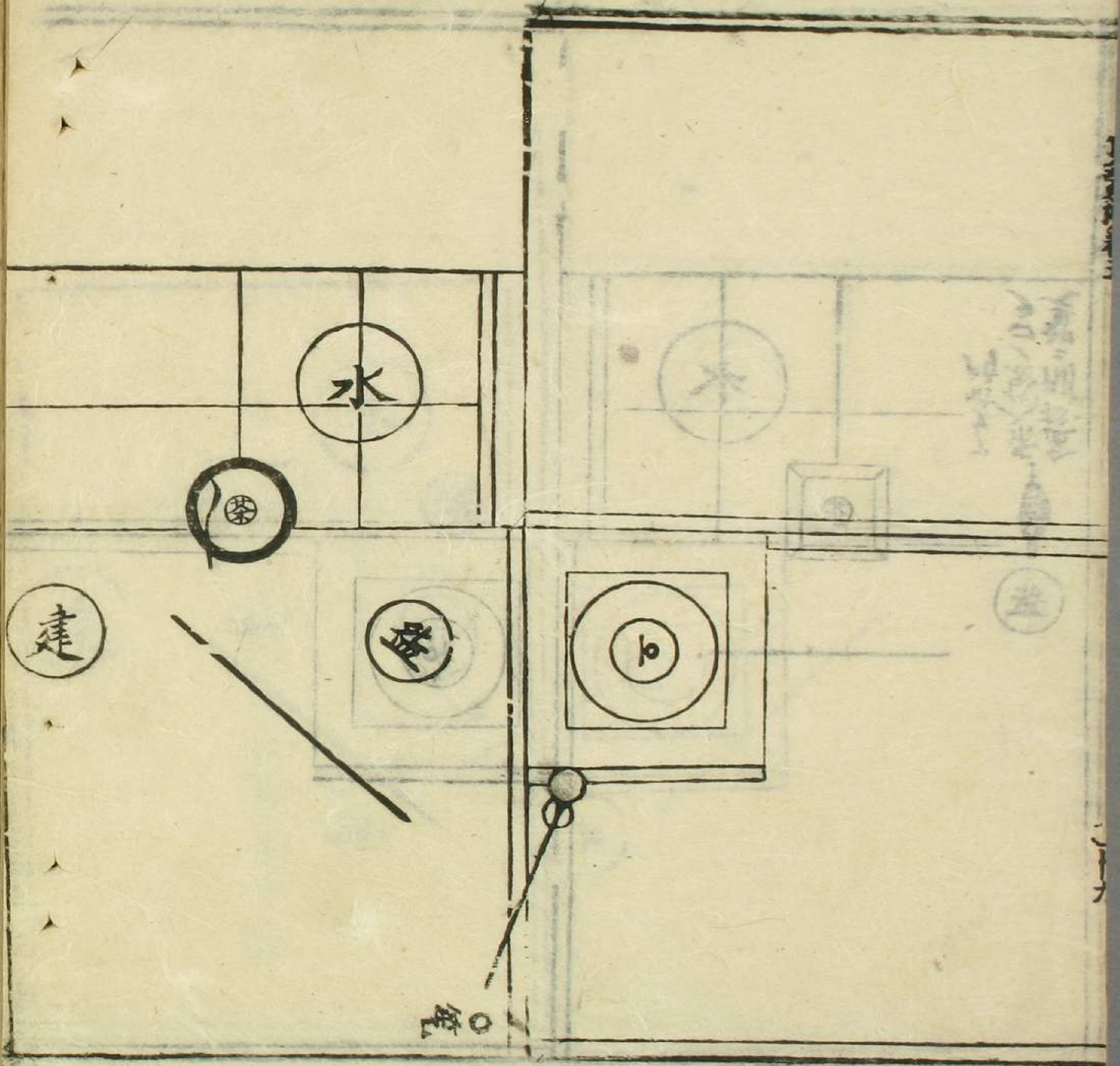


水
盌
茶
手水ノ間ニ茶入茶盌置時如此

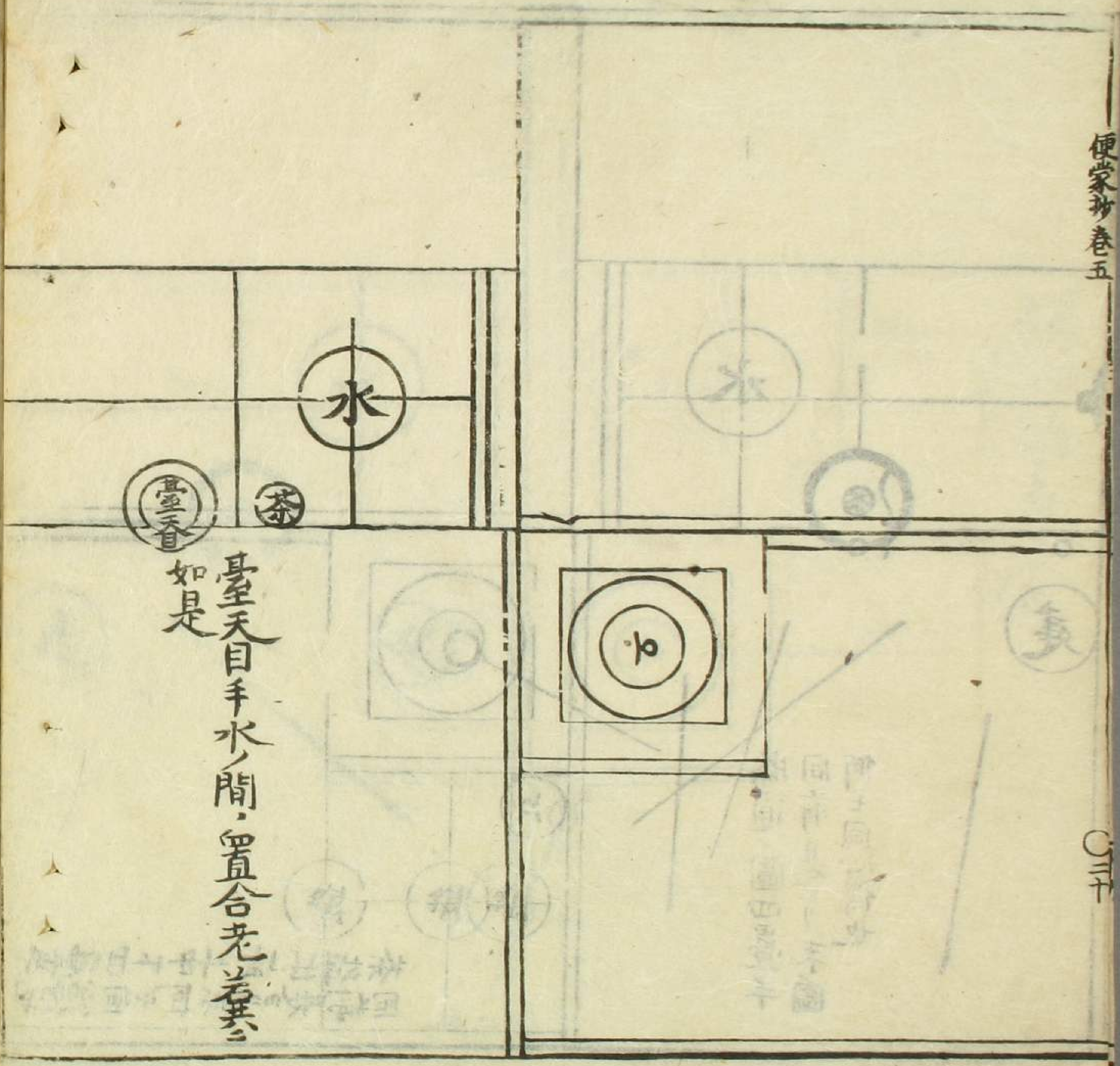

水
茶
盆
水
燭
建



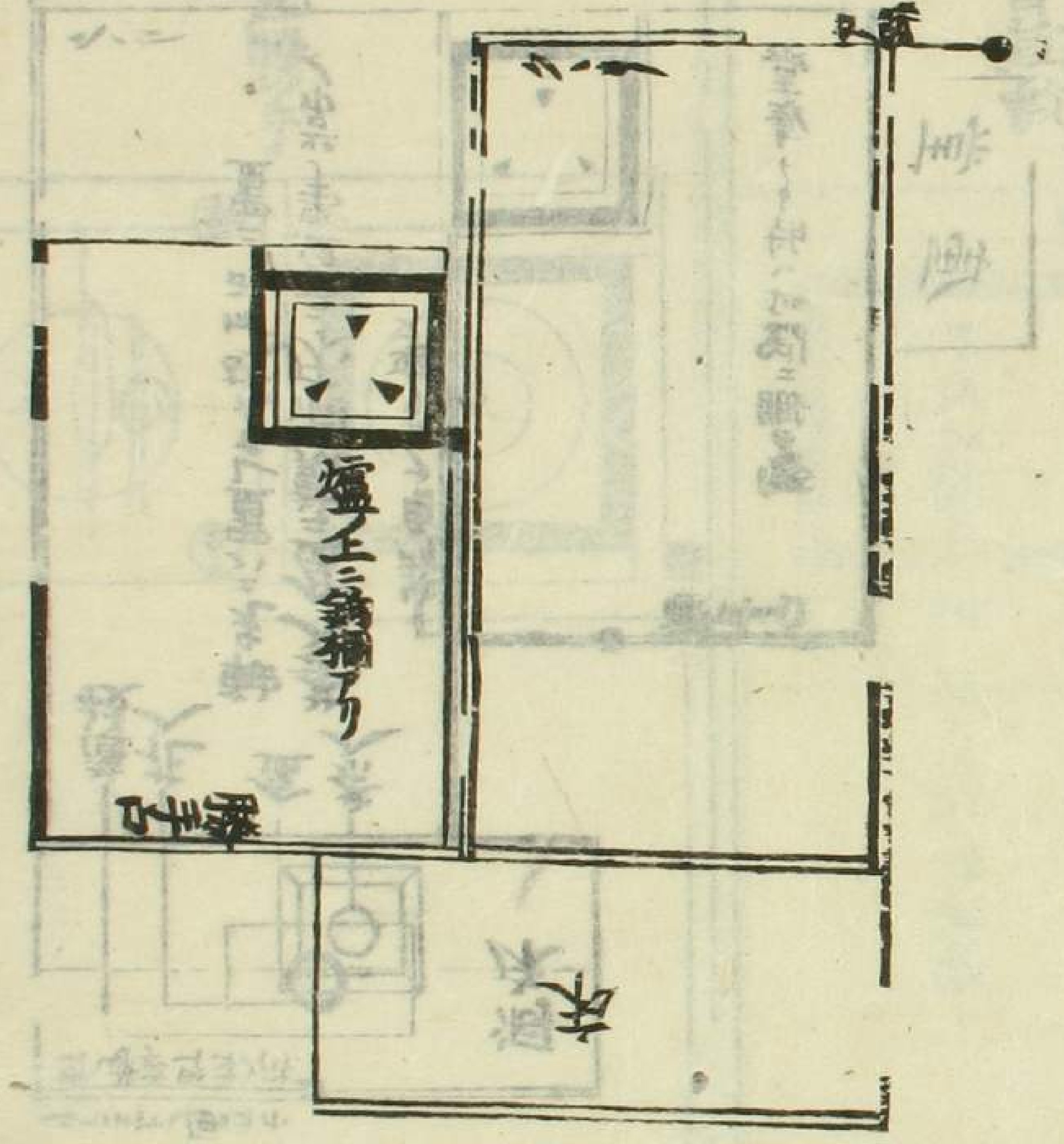
水
建
勝通ノ圖四疊半
同前是ヨリ末圖
何モ同心得也
茶碗並出ノ所上中下目四疊半
同前是ヨリ末何モ同心得也



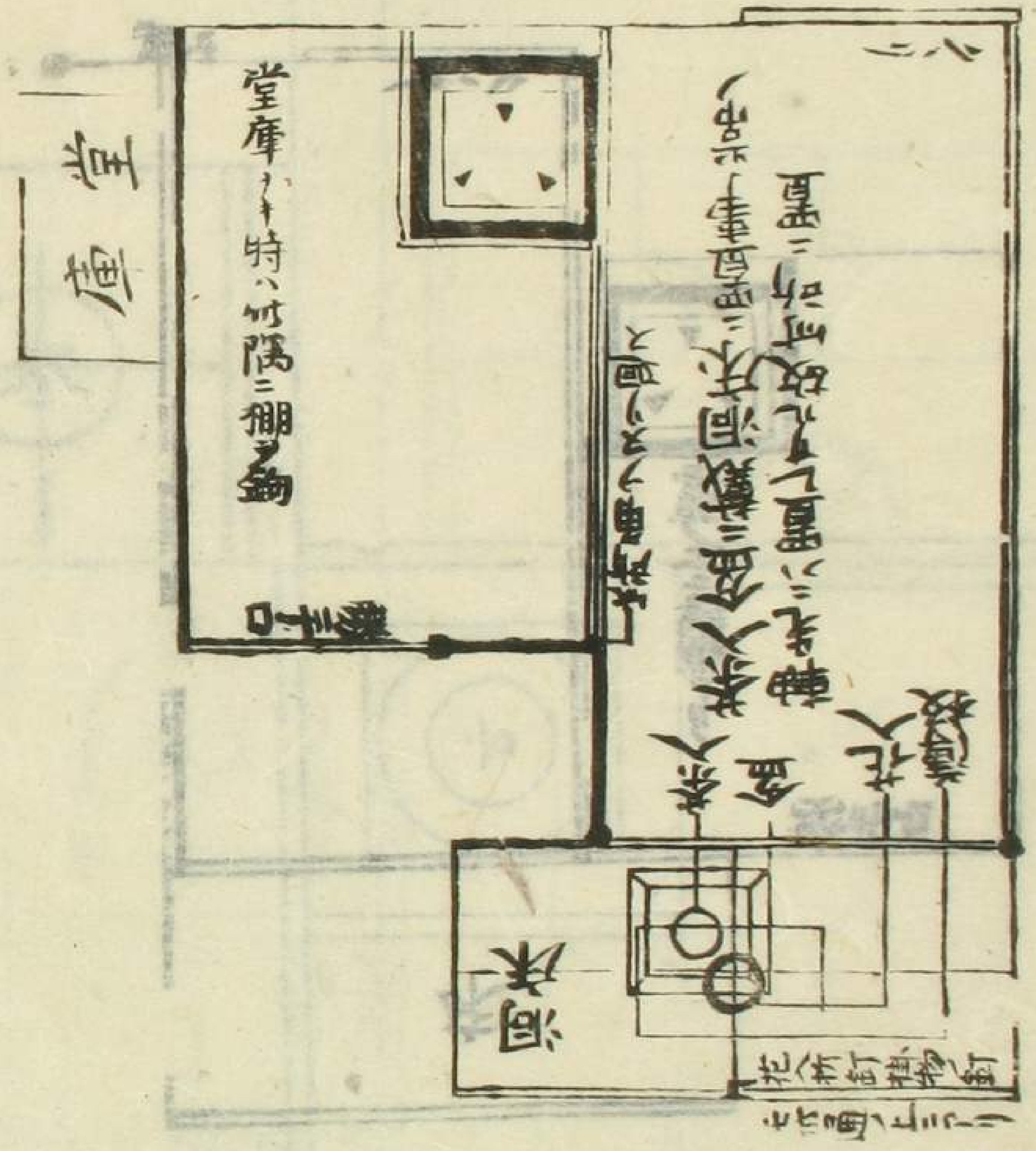
水
建



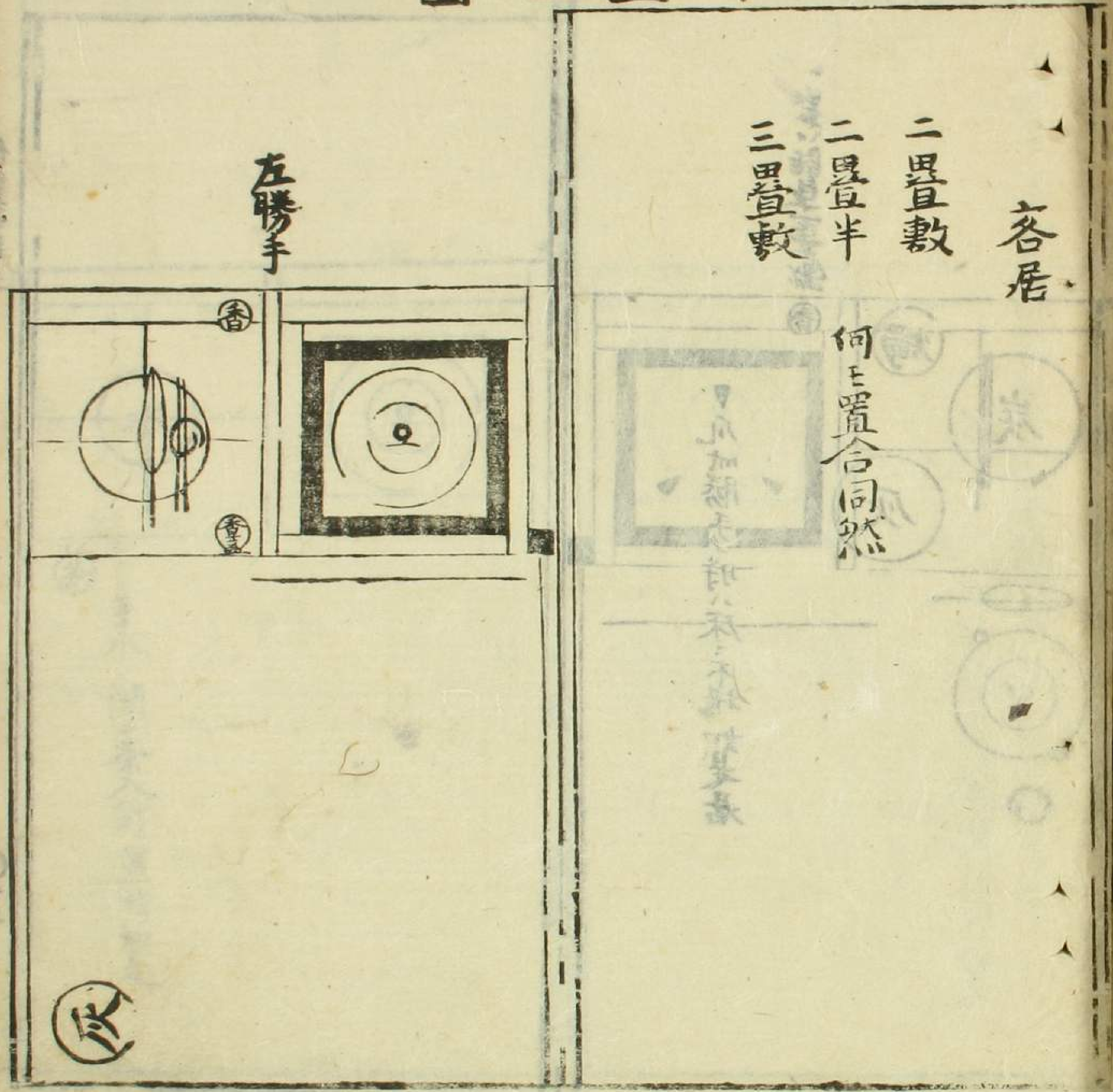
一疊半之圖



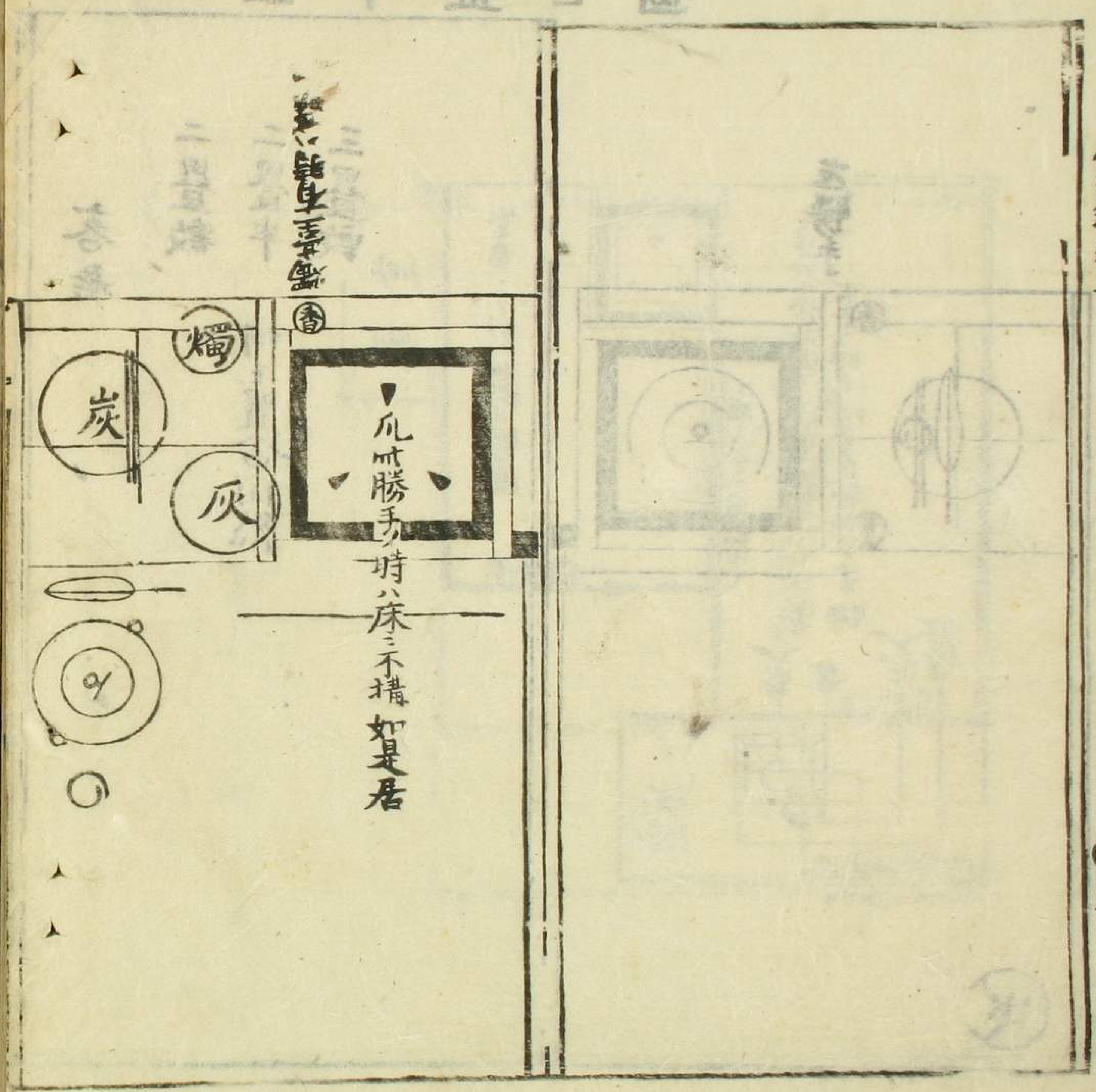
一疊半後欠之圖

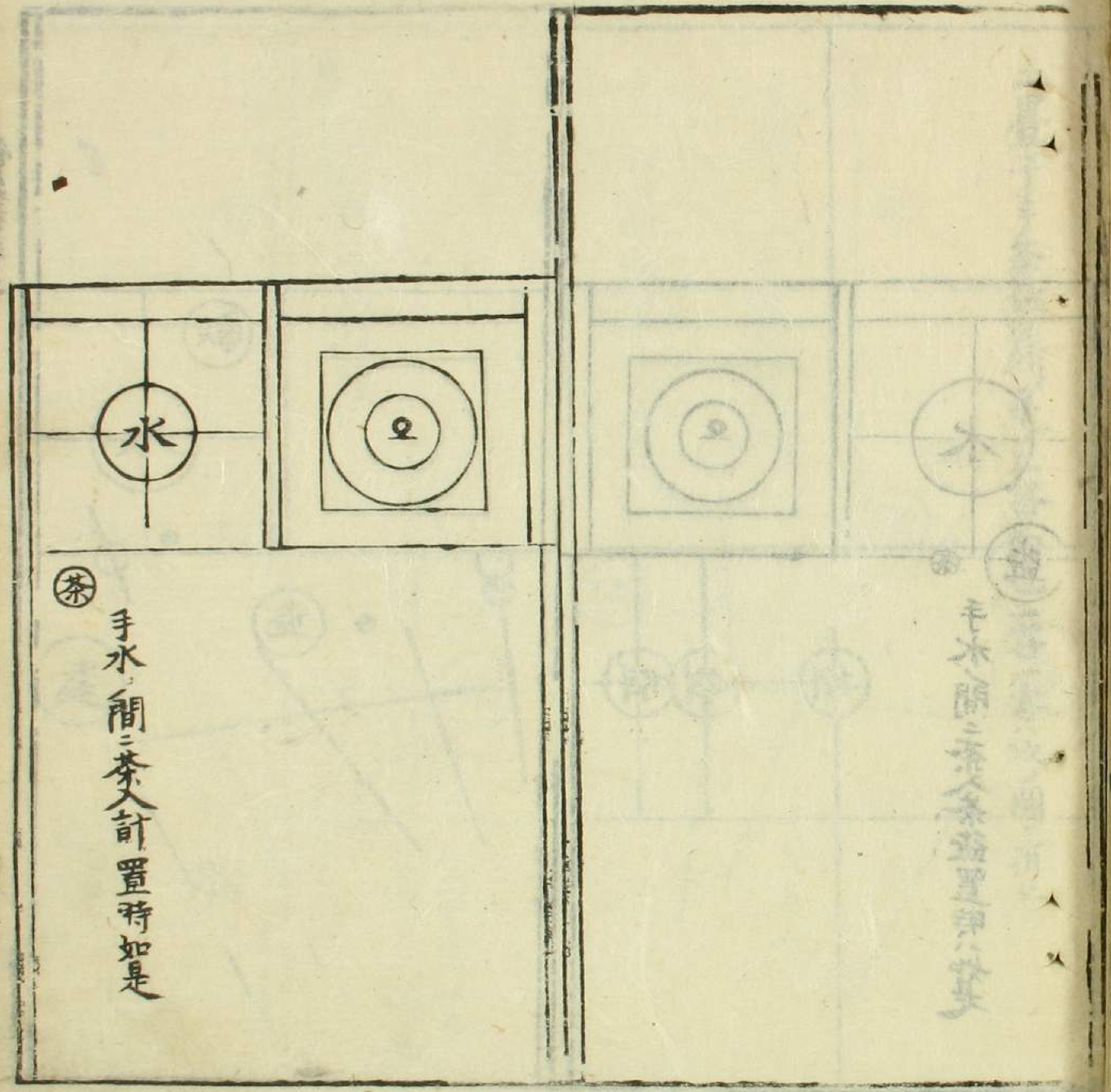


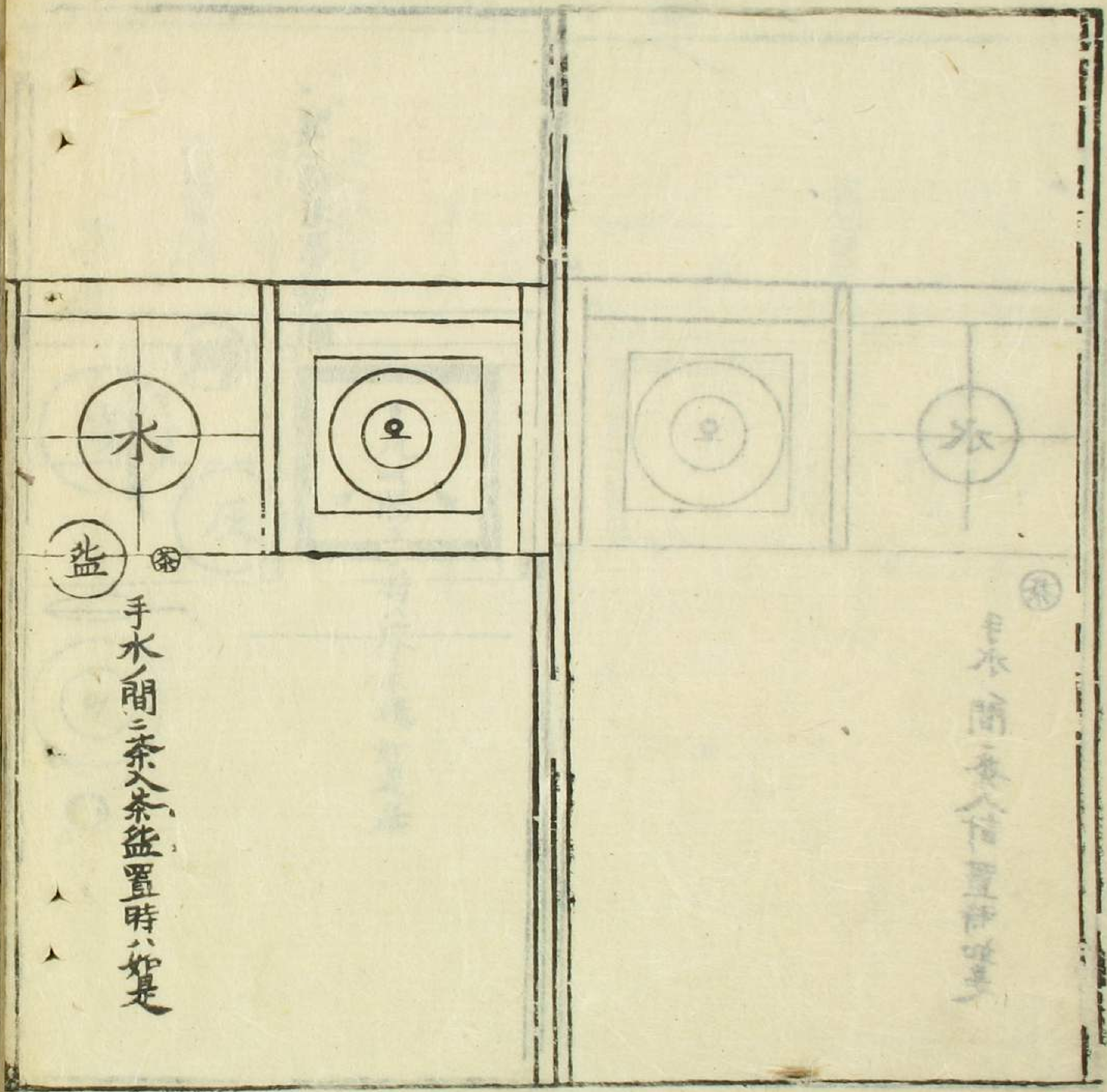
一疊半置合圖



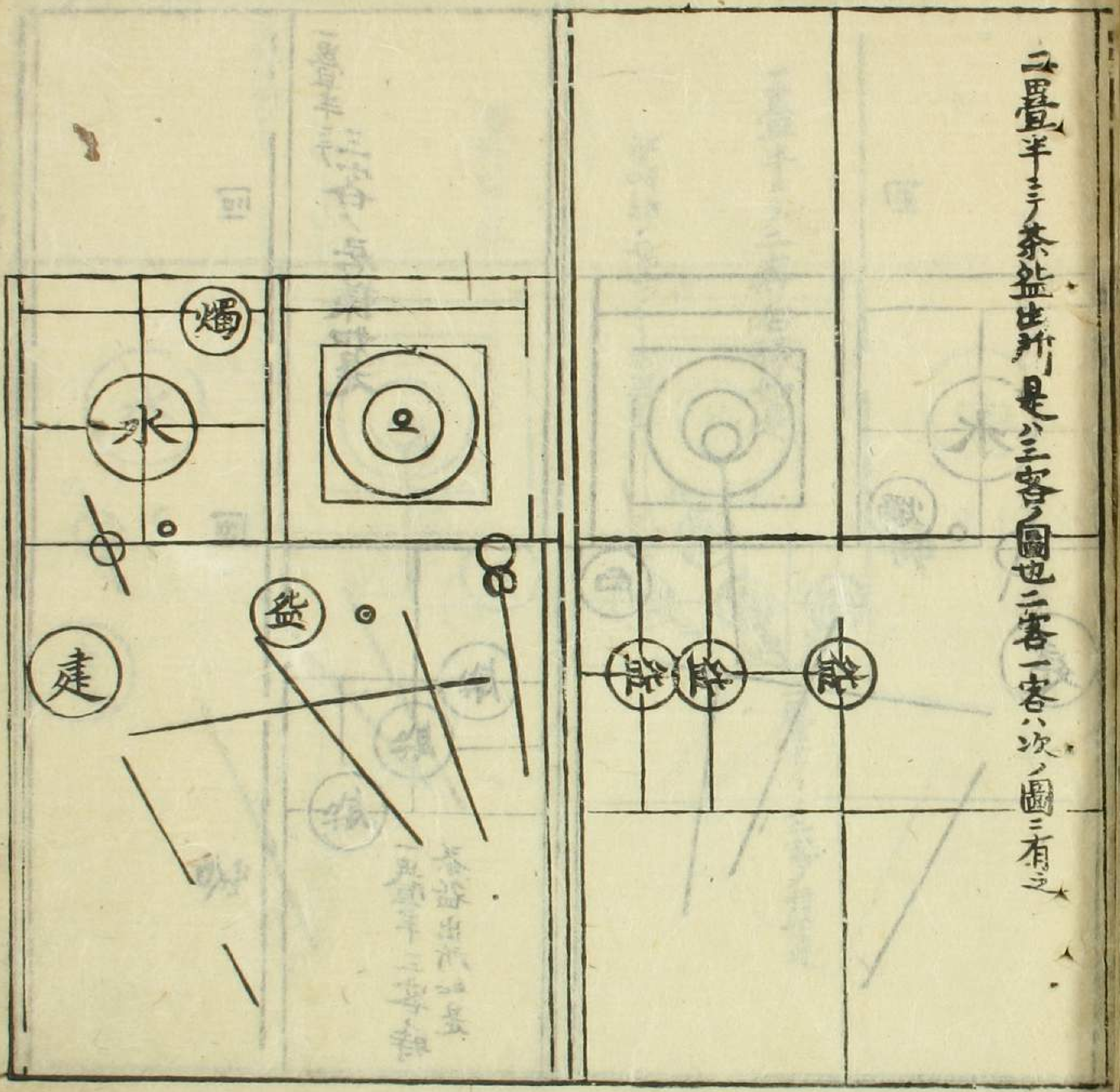
一疊半置合圖



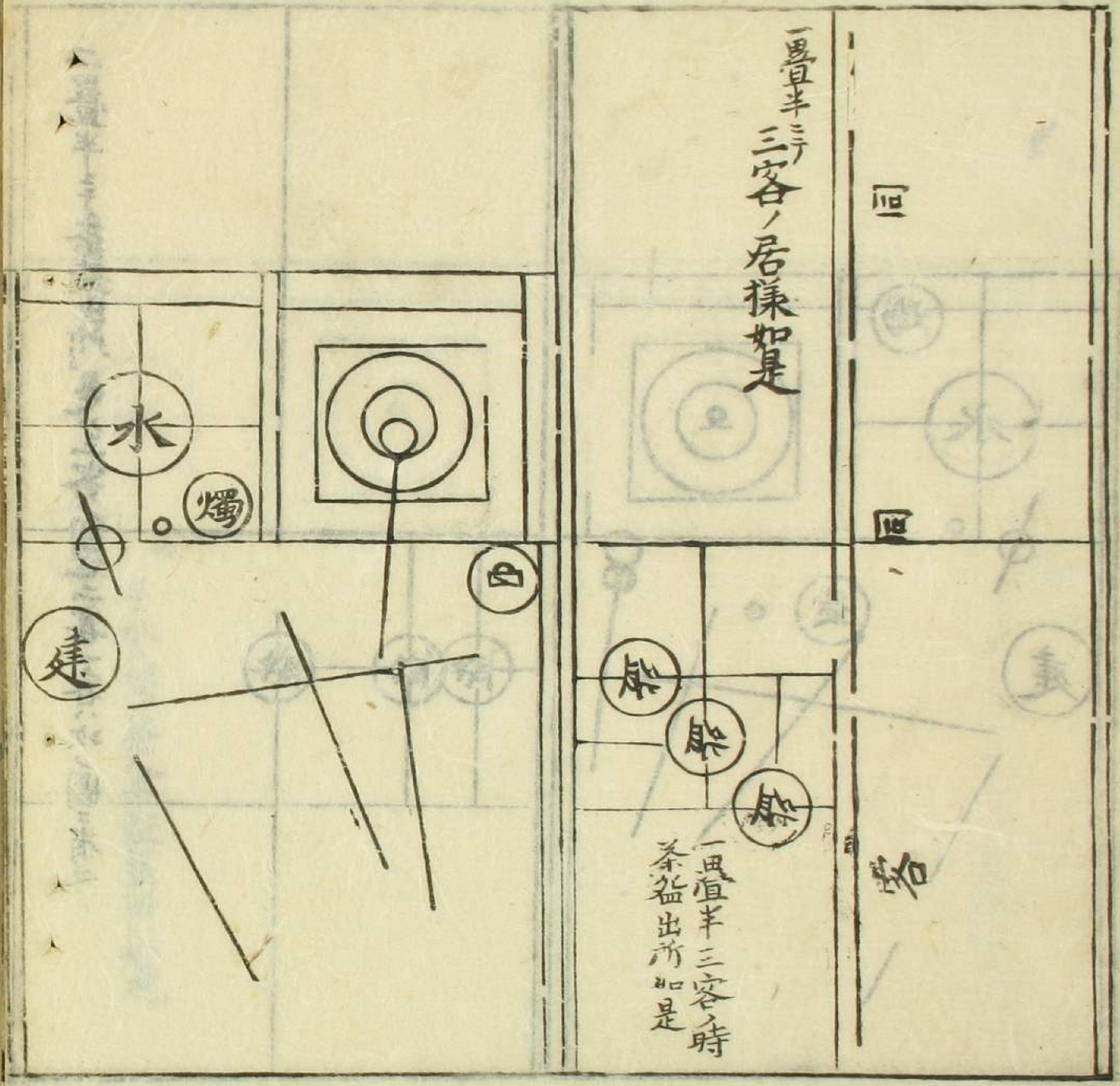


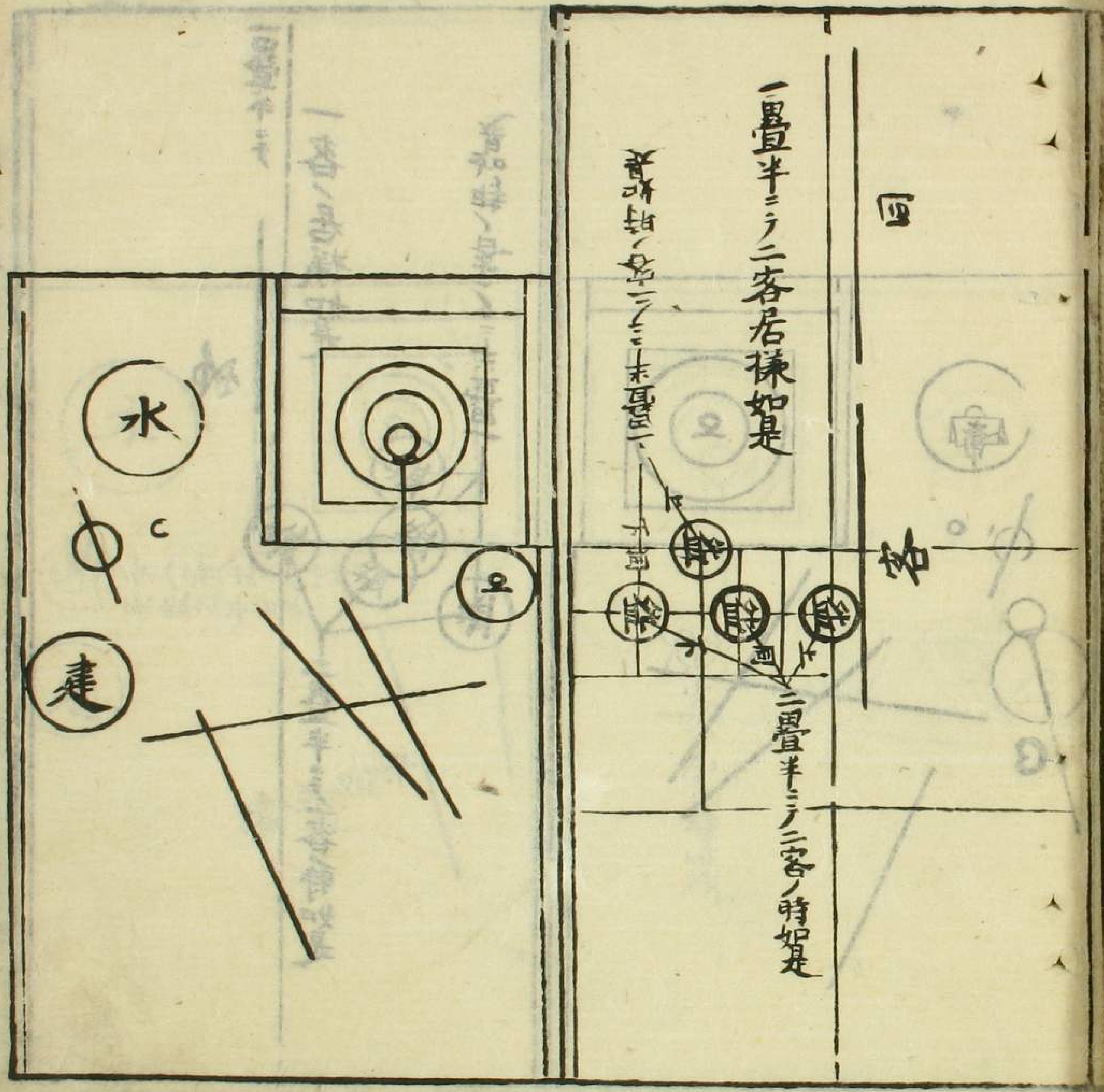


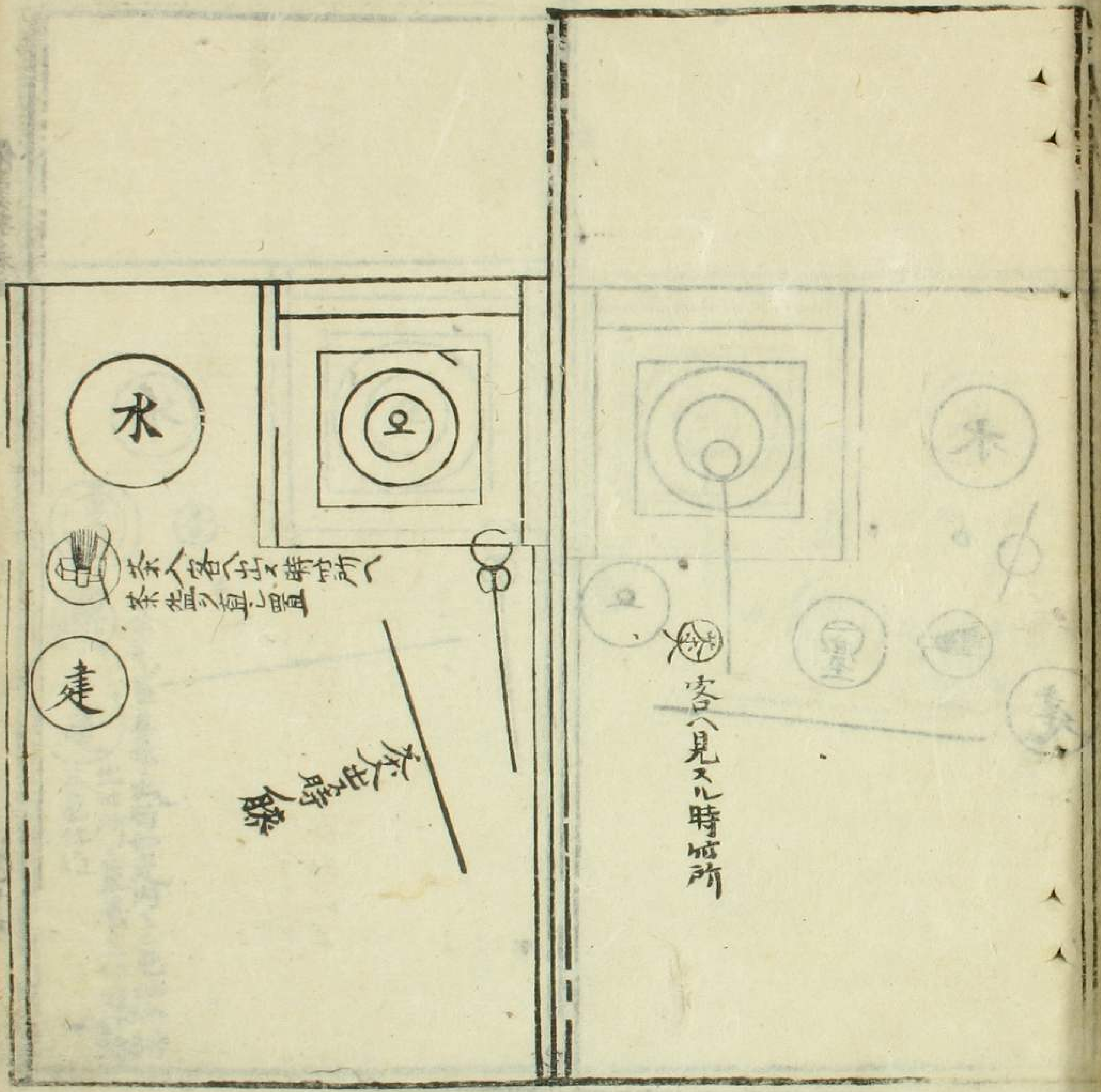
手水ノ間ニ茶入茶盌置時ハ如是

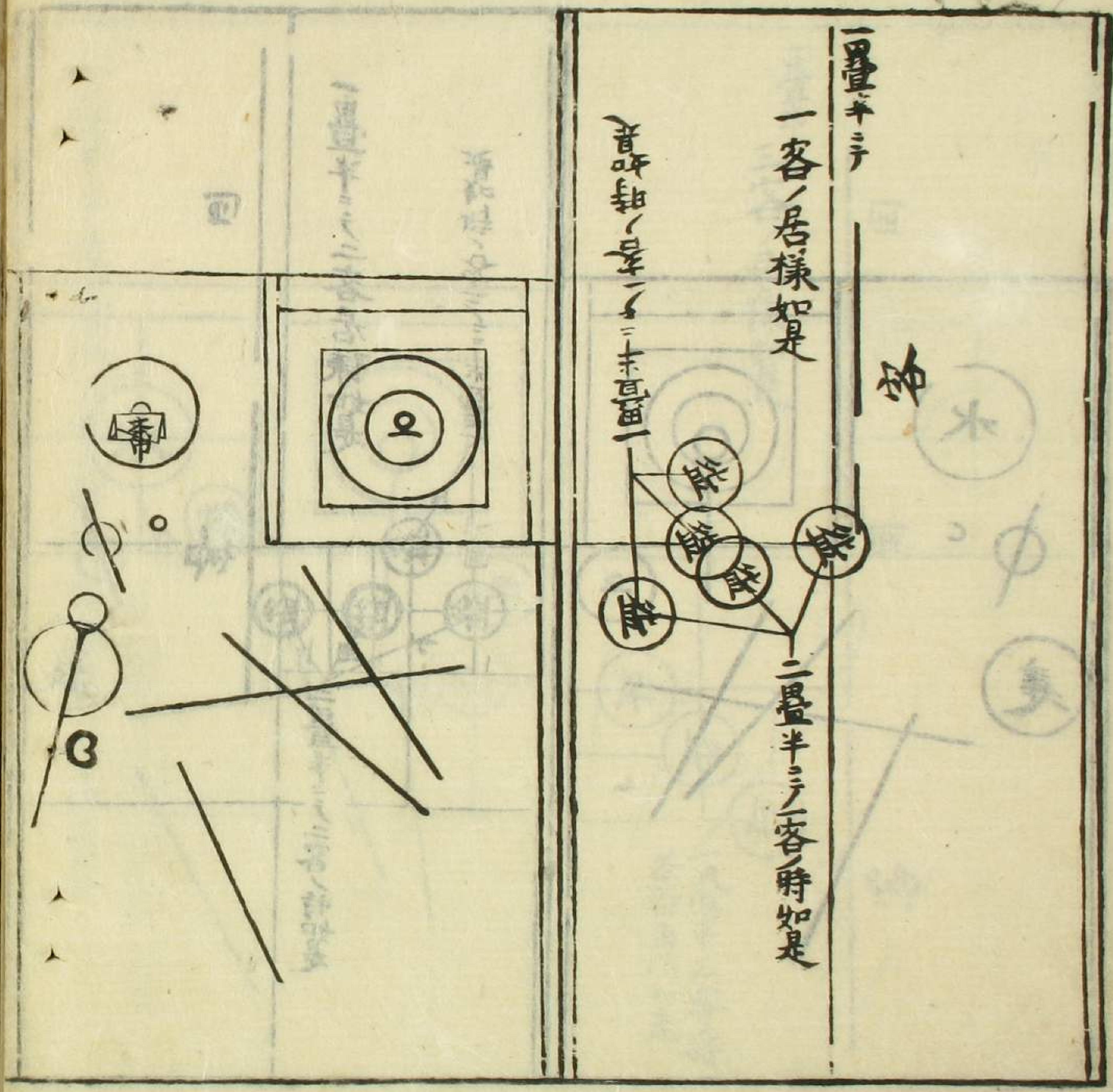


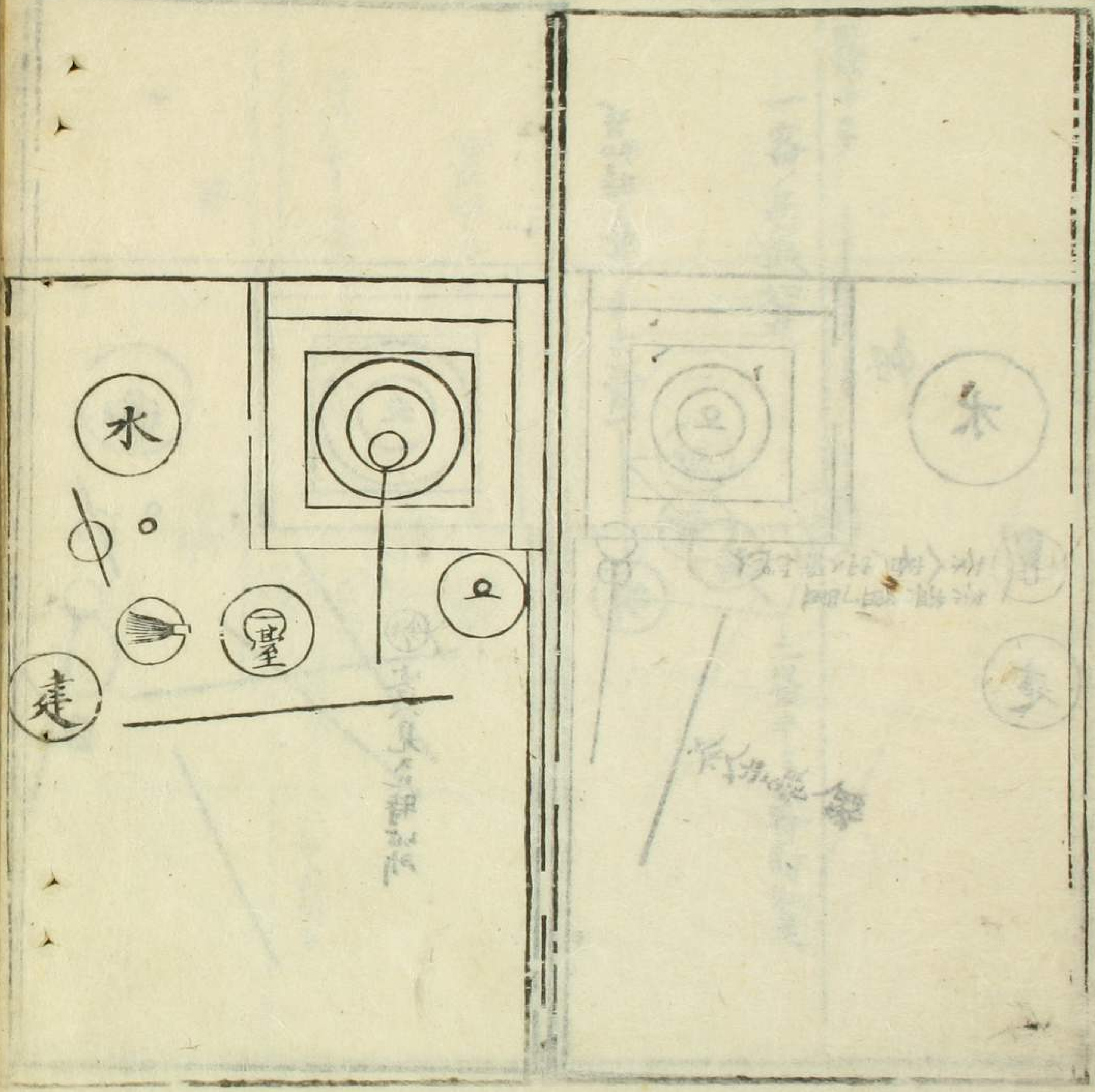
二畳半ニテ茶盌出所是ハ三客ノ圖也二客一客ハ次ノ圖ニ有之

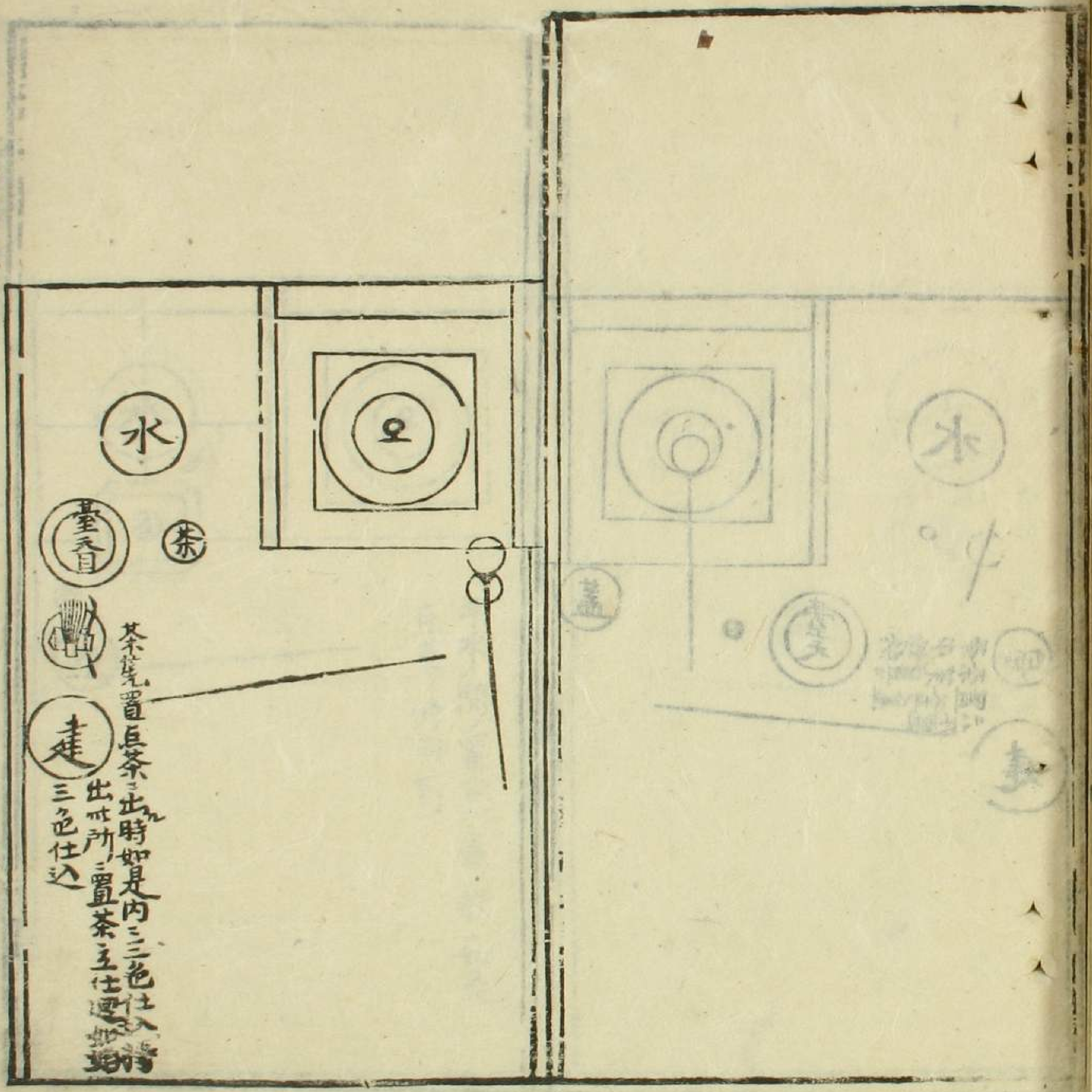

一疊半ニテ三客ノ居様如是
回
回
水
建
客
一疊半三客時
茶碗出所如是

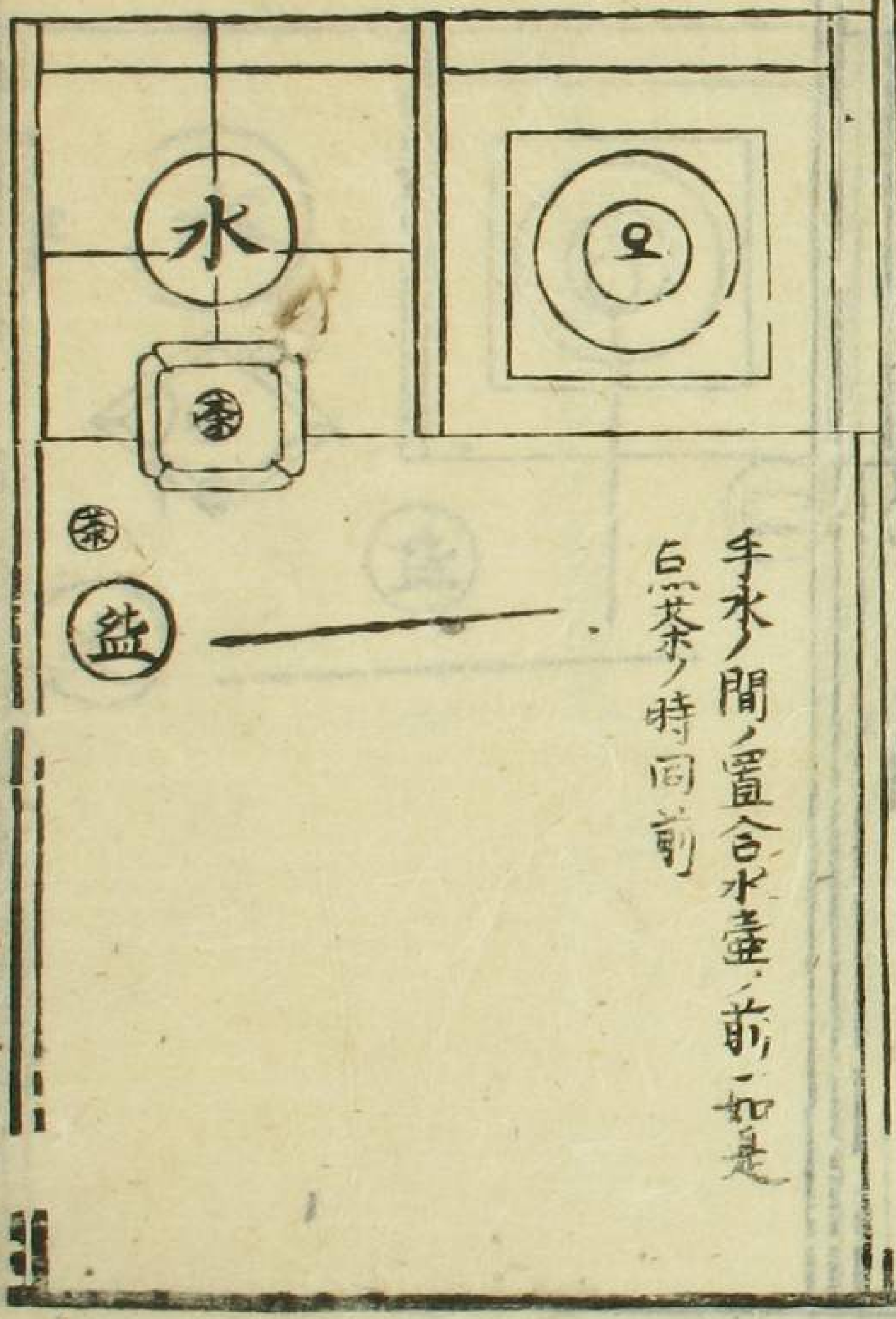

一疊半ニテ二客居様如是
回
水
建
客
二疊半ニテ二客ノ時如是


水
建
客ヘ見スル時ノ所

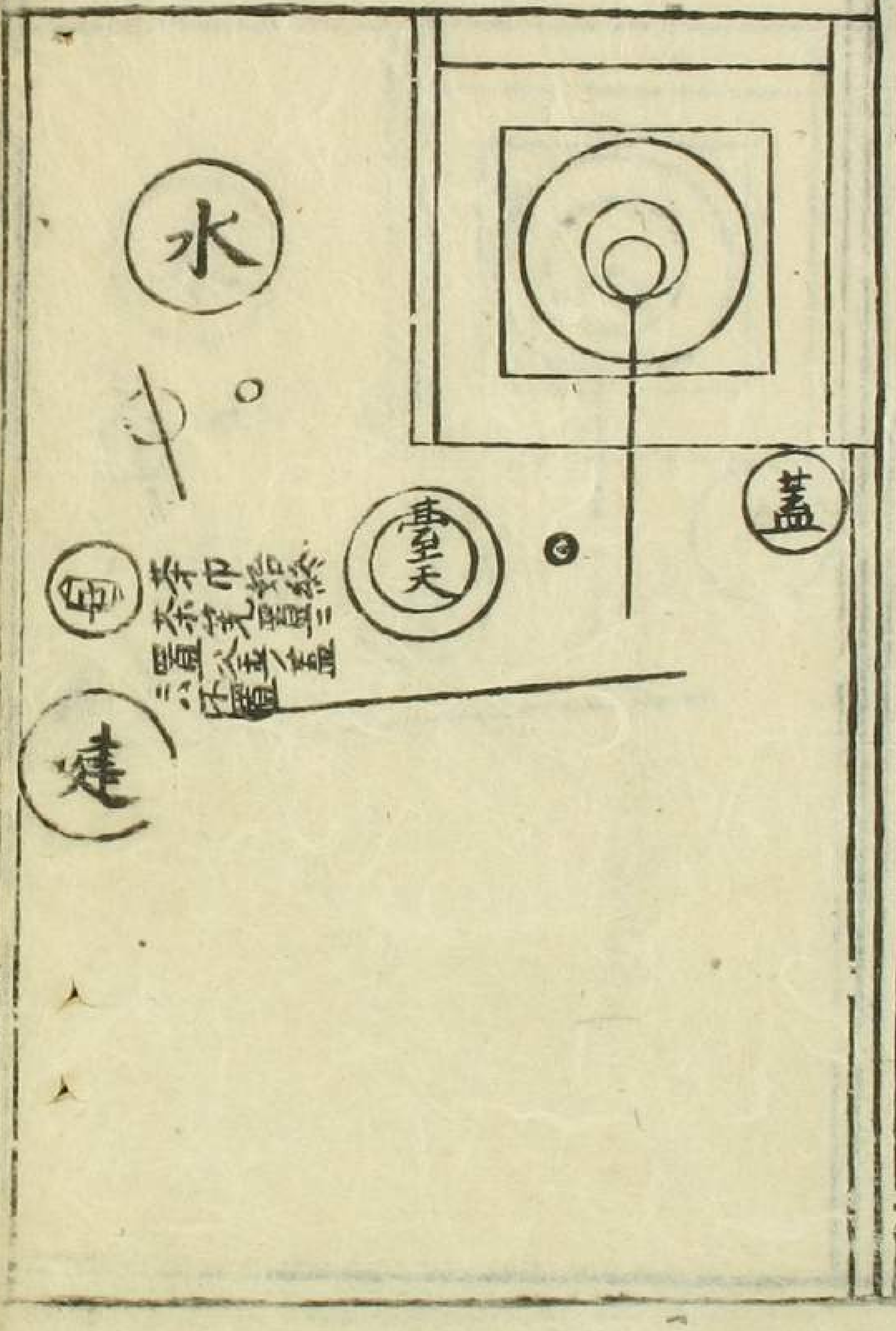

一畳半ニテ
一客ノ居様如是
二畳半ニテ一客ノ時如是

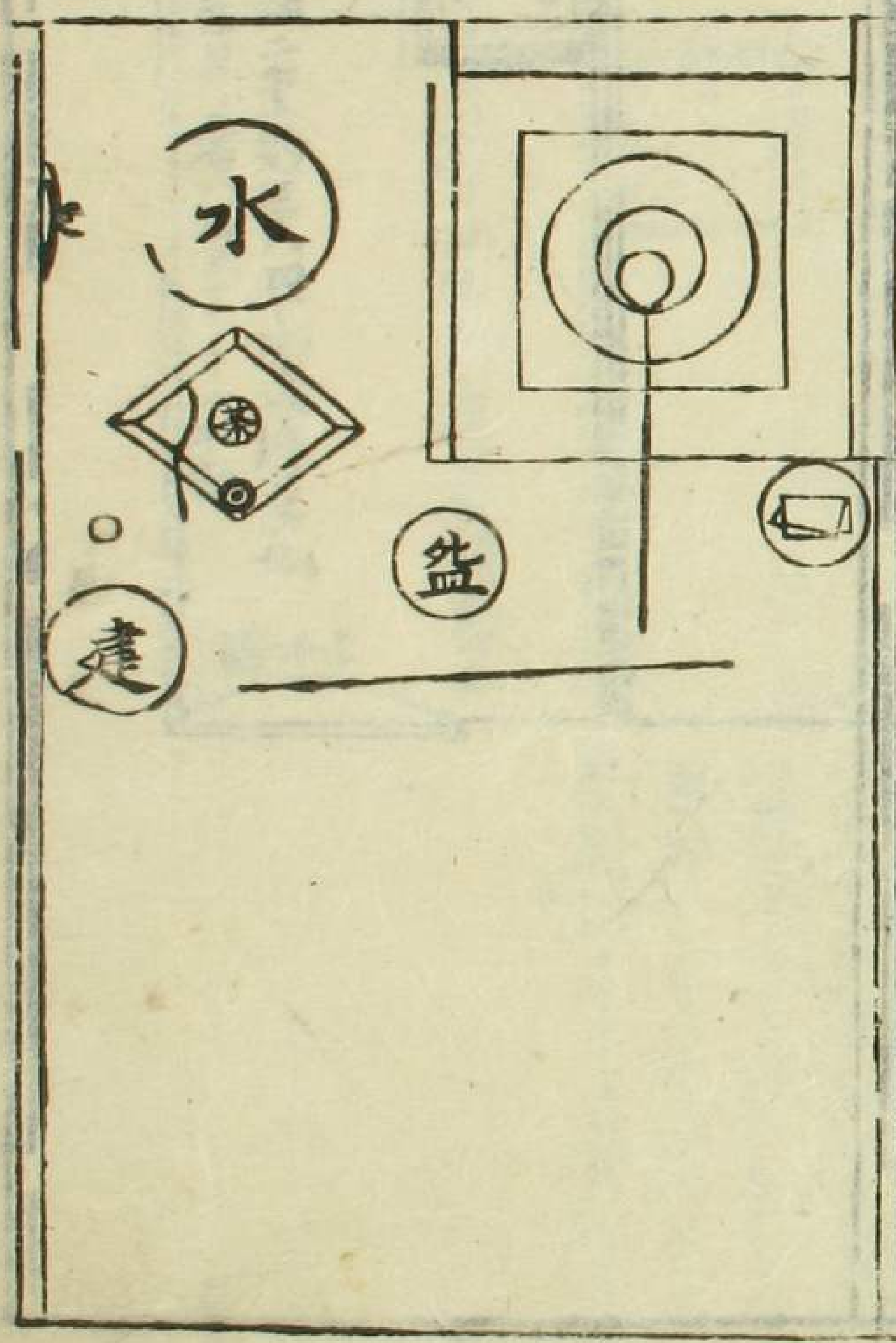

水
臺
建

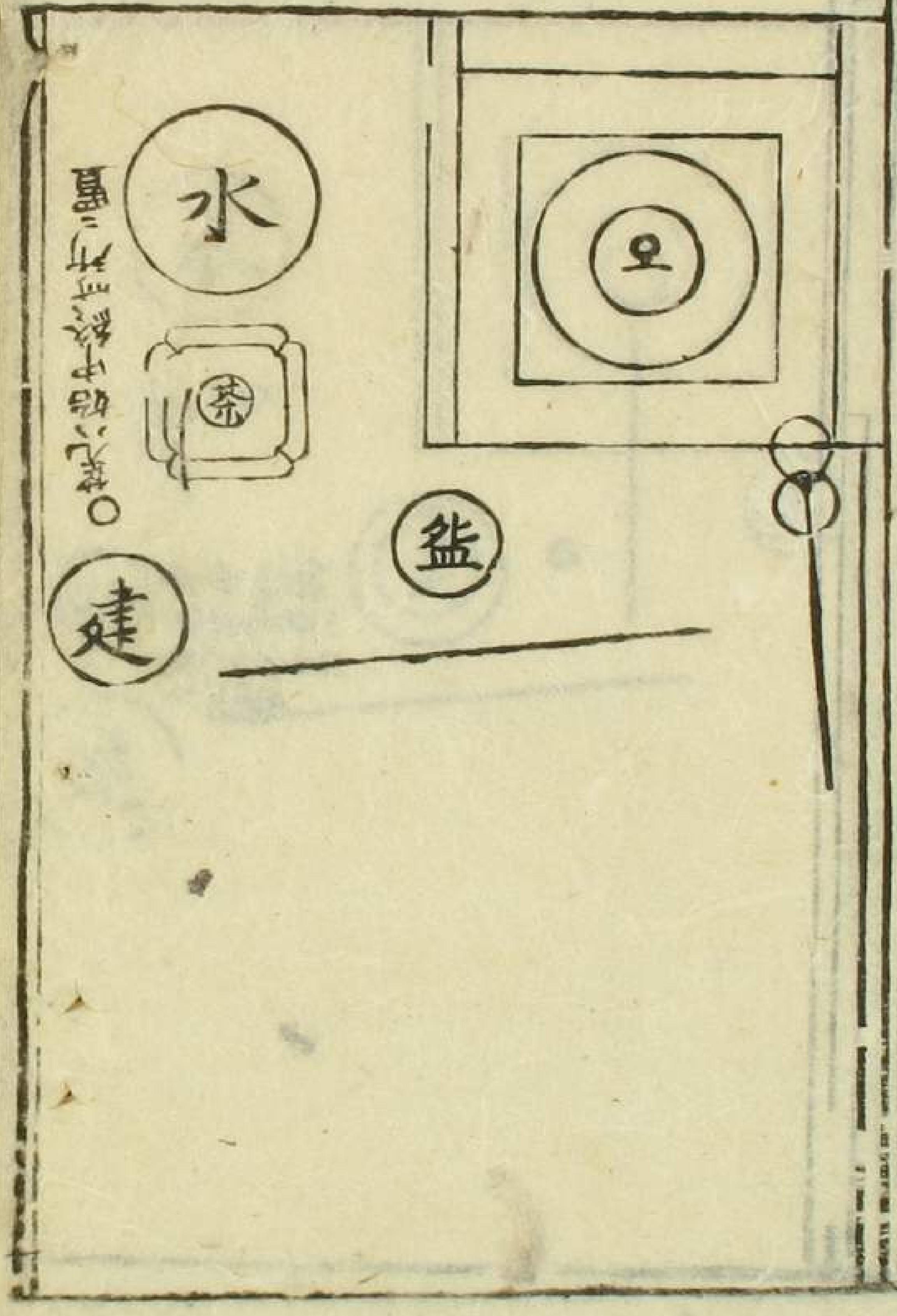

水
臺天目
茶
建
茶筅置点茶ニ出ル時如是内ニ三色仕入
出ス所ニ置茶立仕廻
三色仕込

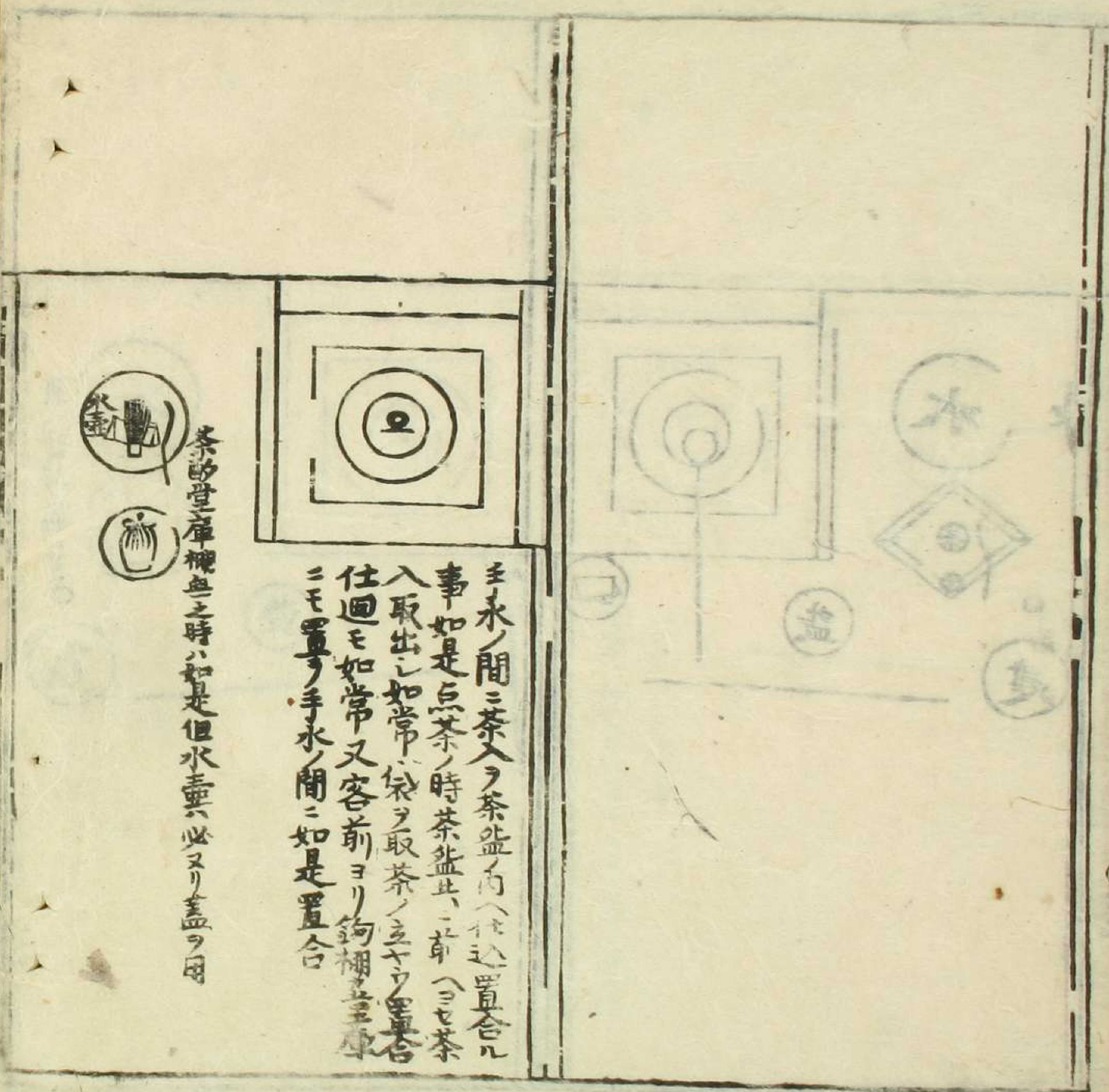


手水ノ間ノ置合水壺ノ前ニ如是
白茶ノ時同前



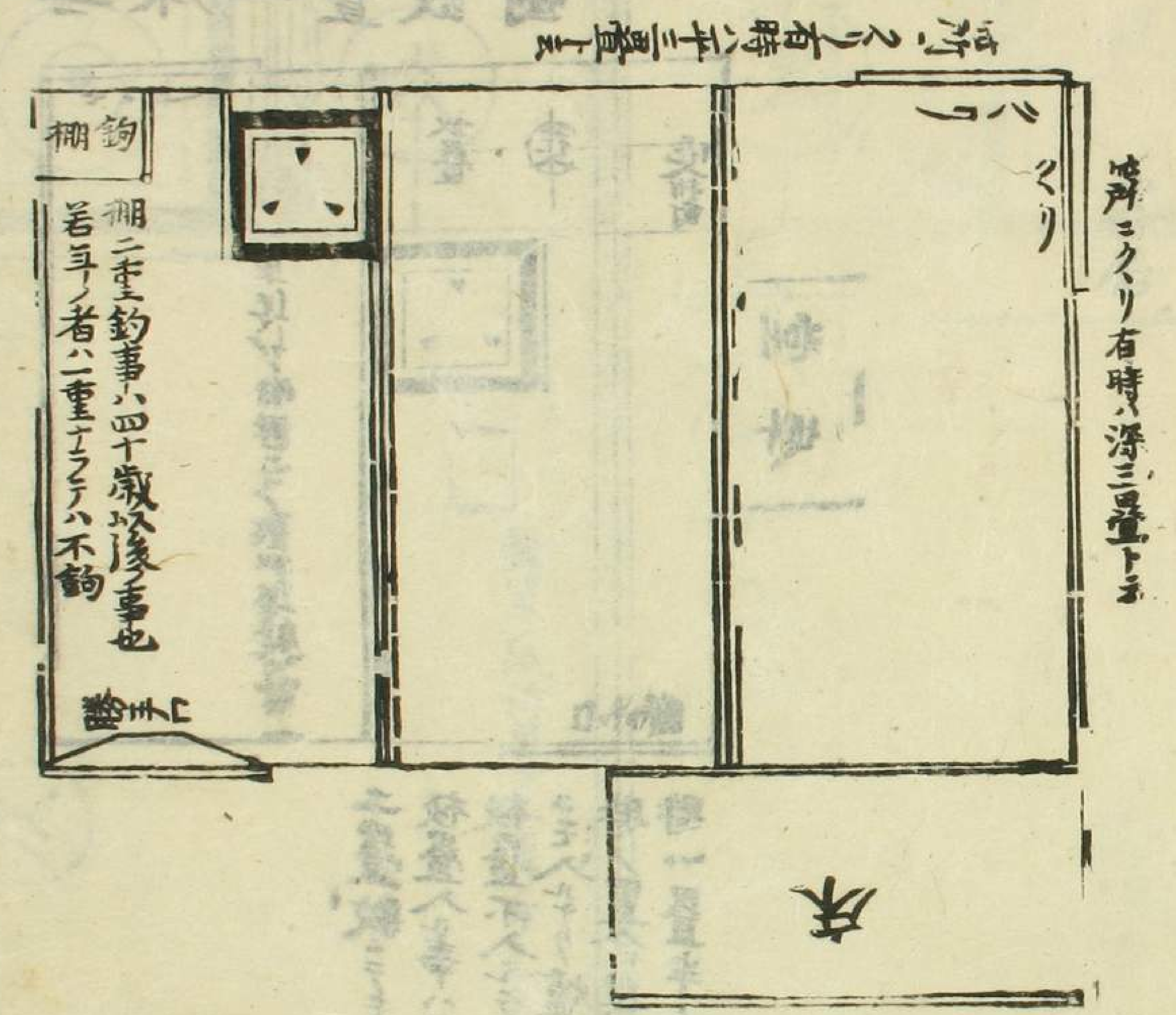

水
盆
建


水
茶
盆
建
○茶入ハ盆中可ニ置



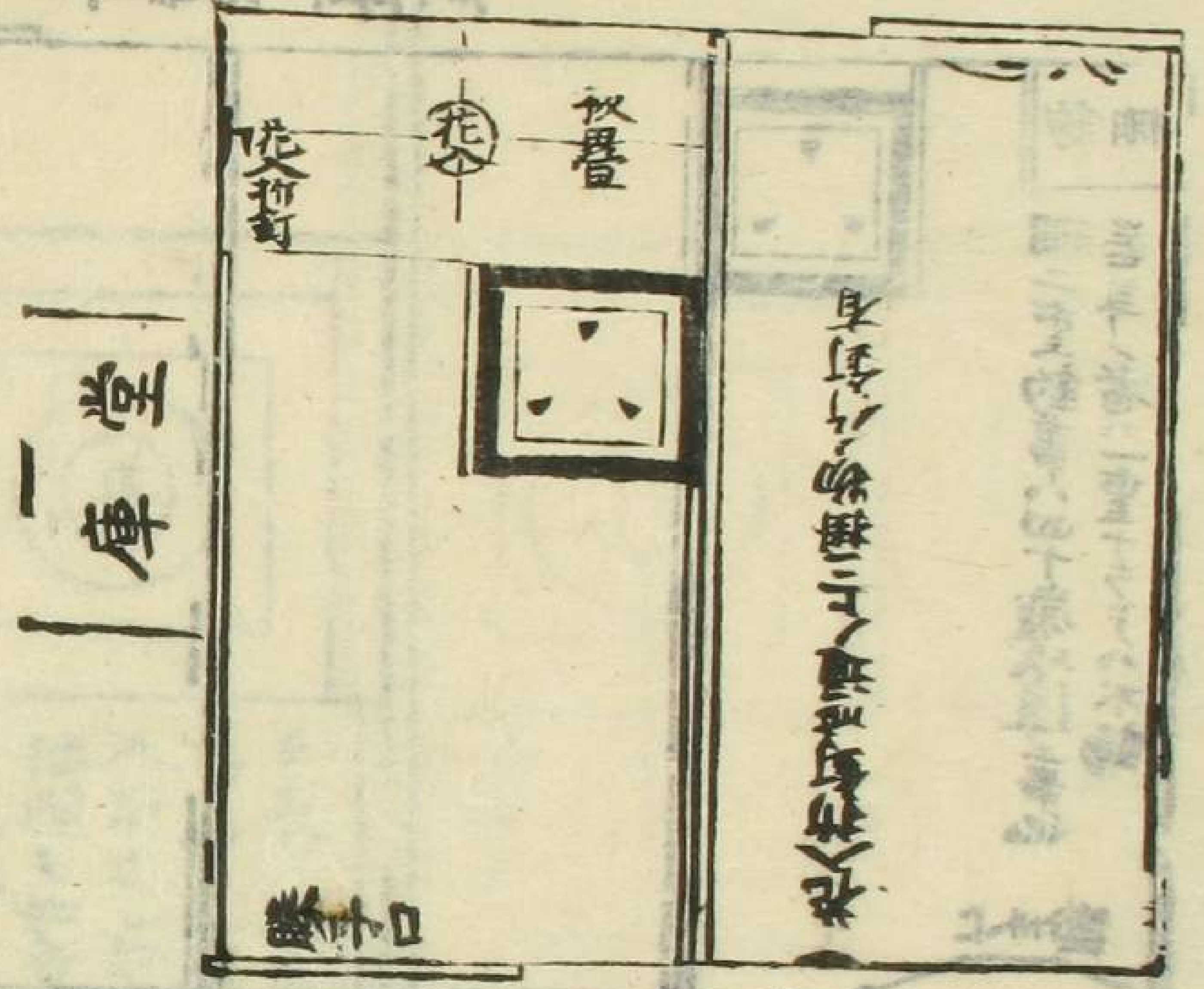
主水ノ間ニ茶入ヲ茶盌ノ内ヘ仕込置合ル
事如是点茶ノ時茶盌共ニ前ヘ出シ茶
入取出シ如常ニ袋ヲ取茶ノ立ヤウ置合
仕廻モ如常又客前ヨリ鈎棚二重
ニモ置ヲ手水ノ間ニ如是置合
茶湯臺子棚無之時ハ如是但水壷ハ必ヌリ蓋ヲ用

三疊敷之圖



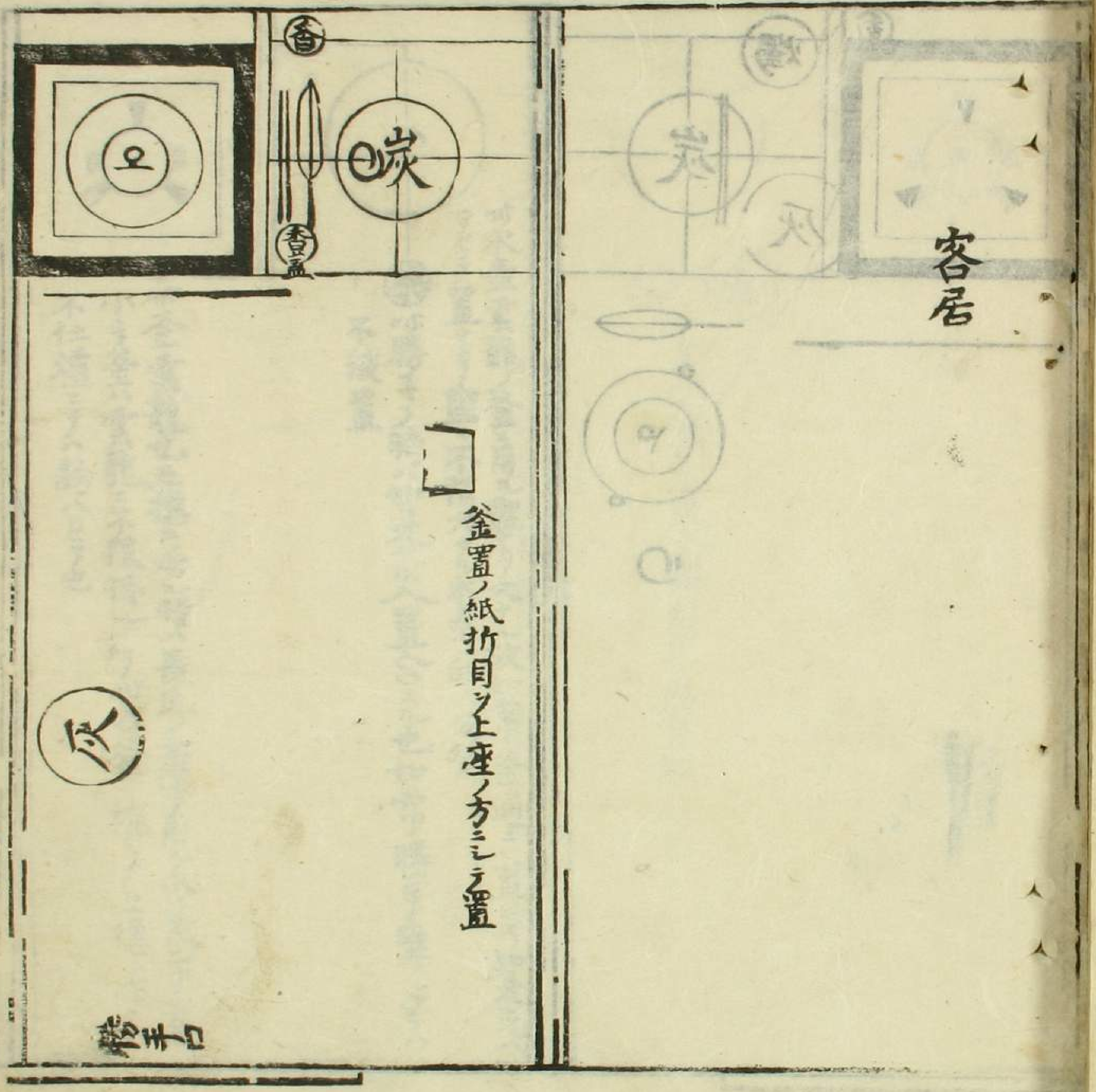
此所ニハノ口有時ハ此三疊ノ上ニ
此所ニクヽリ有時ハ添三疊ノ下ニ
ハ口
くヽり
鈎棚
棚ニ二重ニ鈎事ハ四十歳以後ノ事也
若年ノ者ハ一重ナラテハ不鈎
勝手口
床

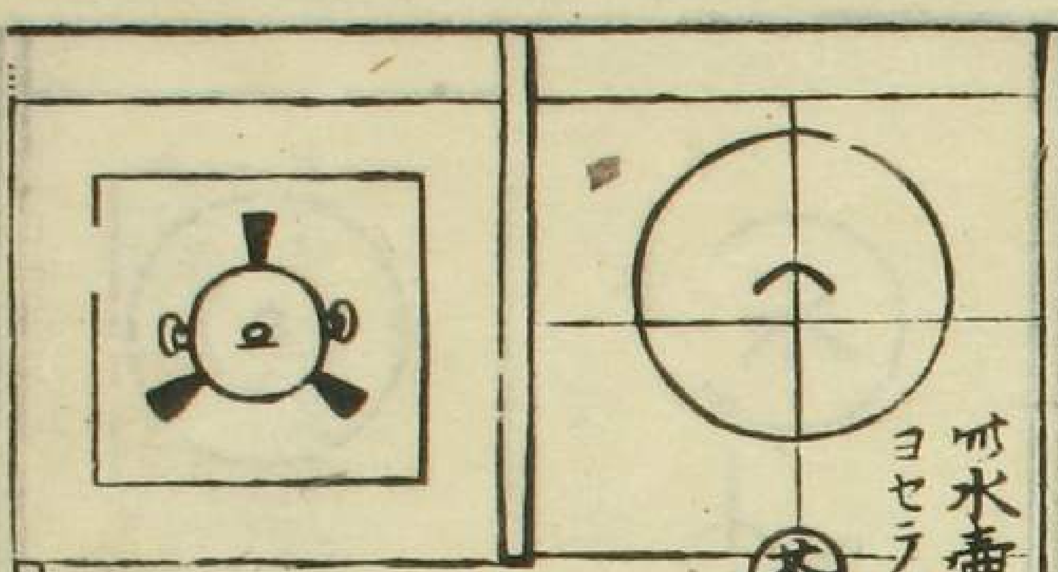
無床二疊數圖



二疊敷ニテモ三疊敷ニテモ
板疊入ル事ハ主ノ心次第ナリ
板疊不入シテ爐ヲ角ニモ表
ニモ入ルナリ爐角ニ入テ有之
時ハ置合奥ニ記之表ニ有之
時ハ一疊半ノ置合ト同前

左勝手隅有爐之圖



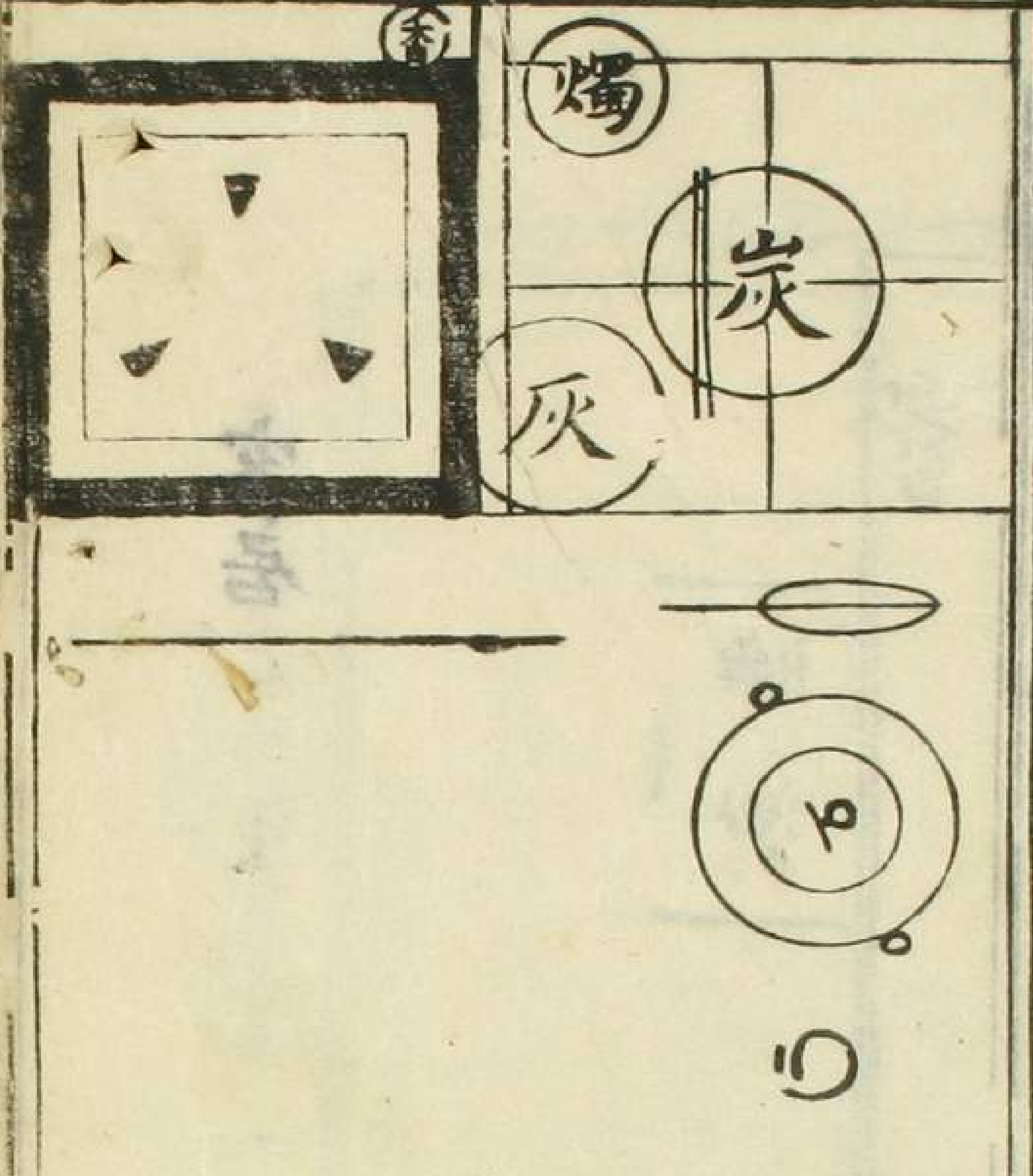


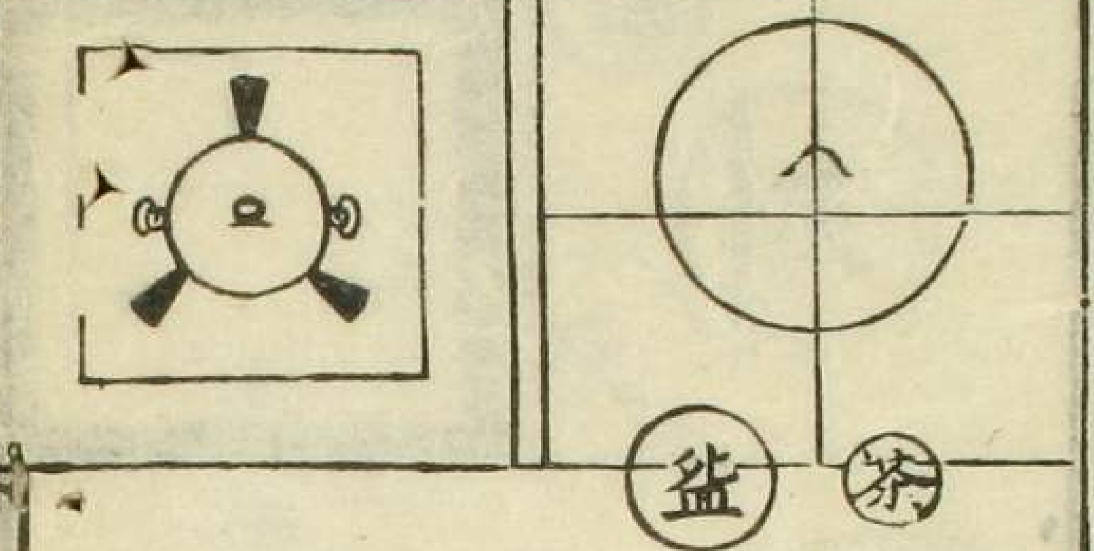
竹水壷雲龍ノ釜ニ用ル盥ナリ大ナル故如常釜通ニハ置レス如是先ヘ
ヨセテ置ナリ盥ニ不限大ナル水壷ノ時ハ同然

茶

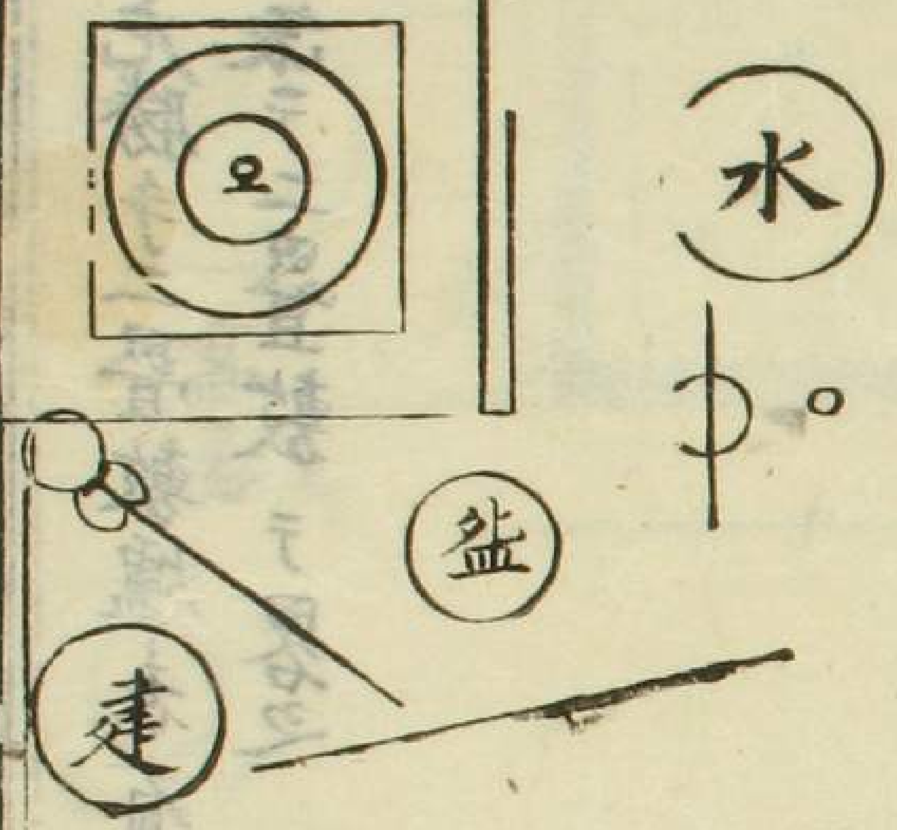
竹勝手ノ時ハ如是茶入置合スル也如常勝手壁ノ方ニハ
不被置

竹釜雲龍也五徳ニ居ル時ハ長爪ノ五徳ヲ用ル爪長二寸五分
小キ釜ハ雲龍ニ不限掛ルナリ四方釜ハ爐ニテ五徳居ニハ
不仕爐ニテハ鉤ハカリ也





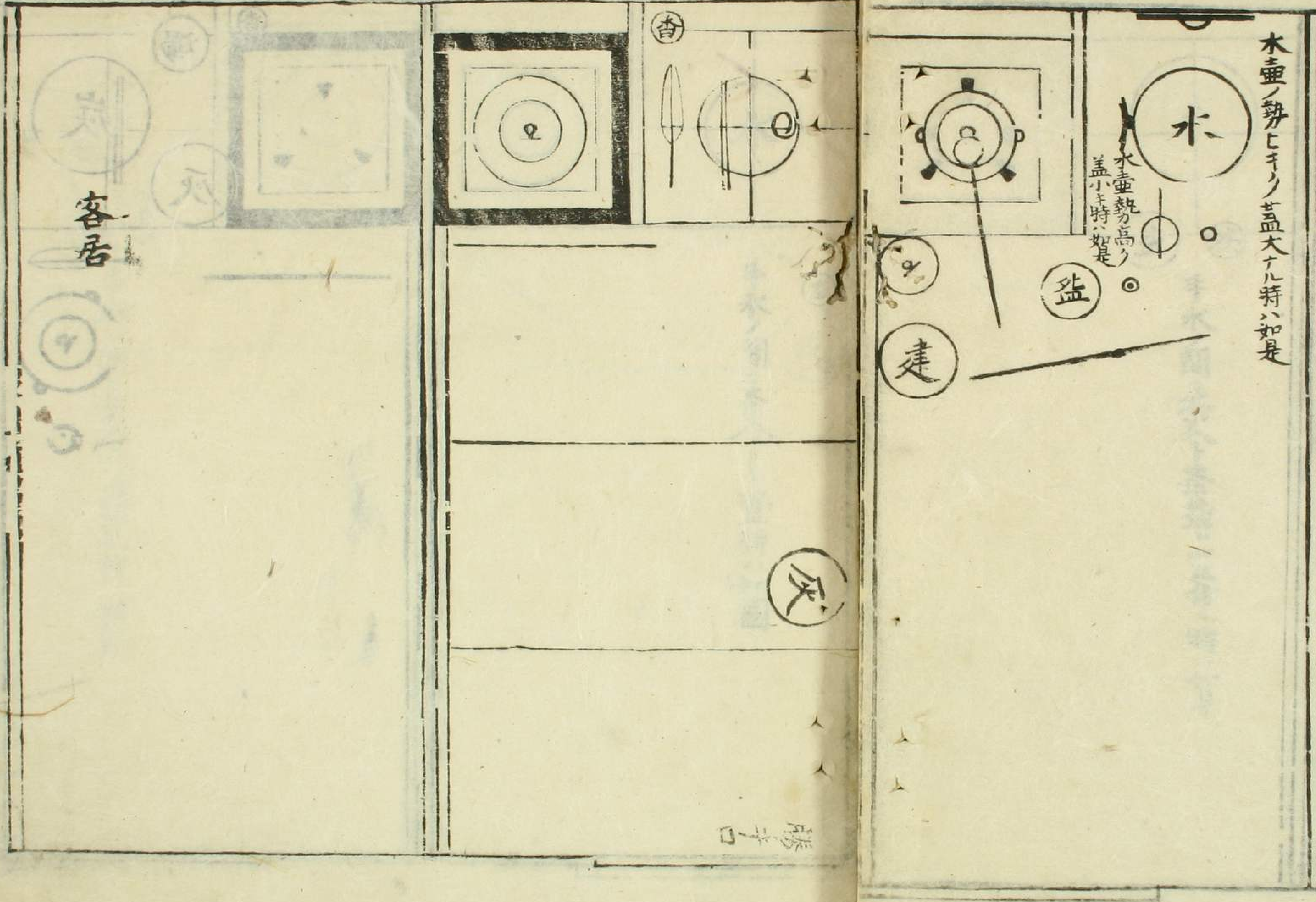
手水ノ間ニ茶入ト茶盆ト一ツ置合ル時ハ如是

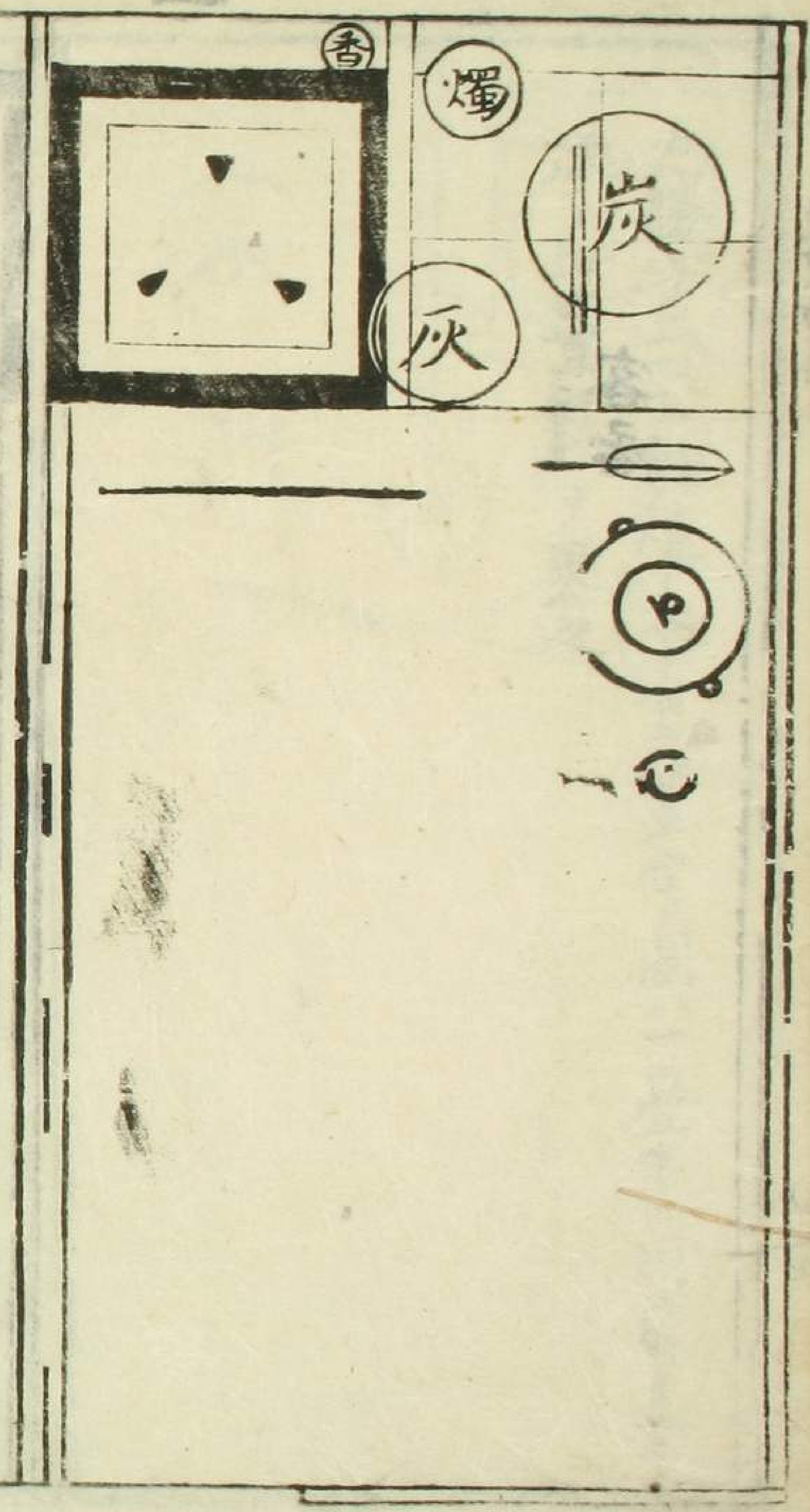


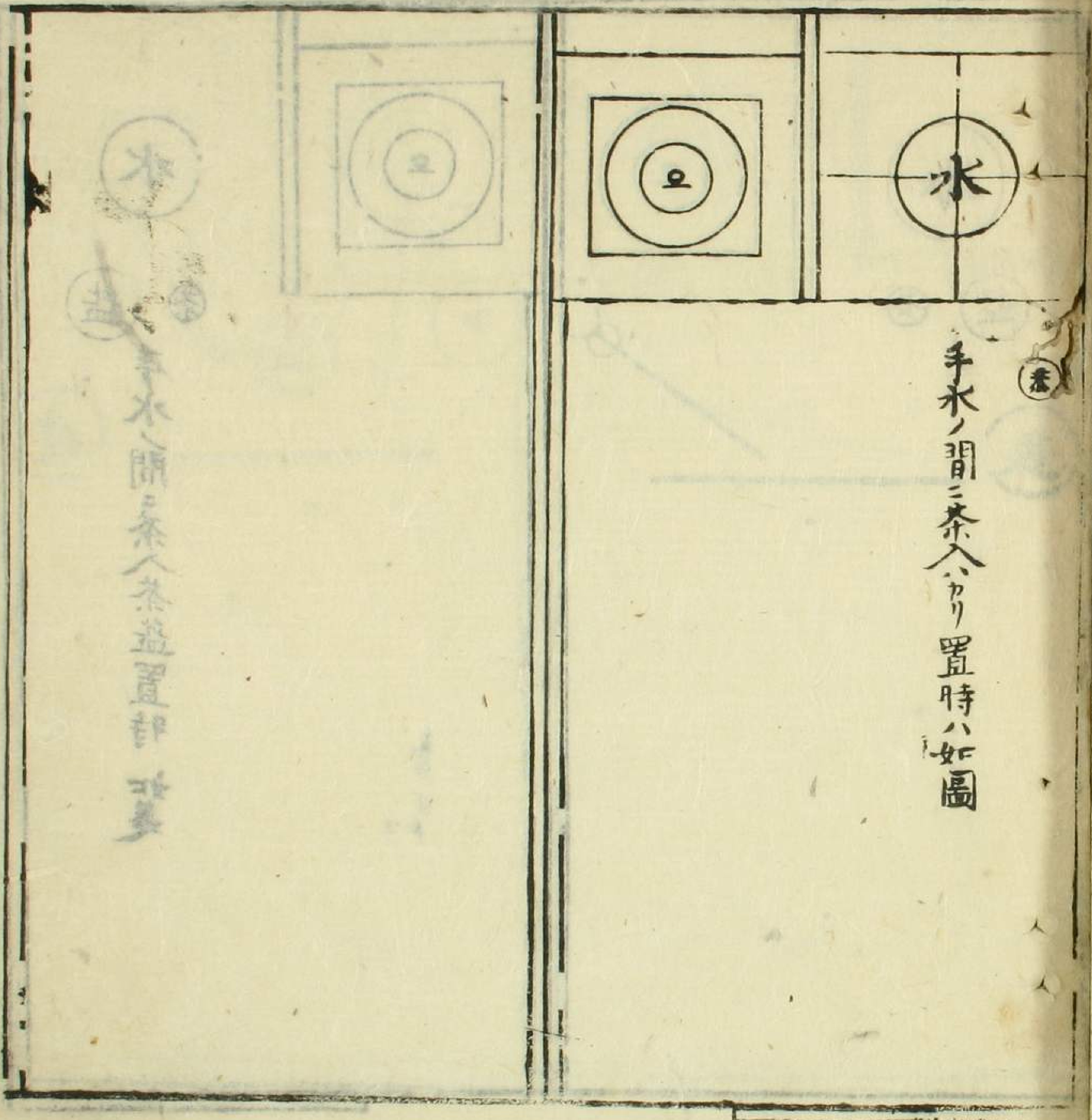
右勝手二疊敷爐表ニ有之置合ノ圖ハ一疊半ニ同前タルニ依テ二田疊敷テ畧之

水壷ノ勢ヒキソノ蓋大ナル特ハ如是

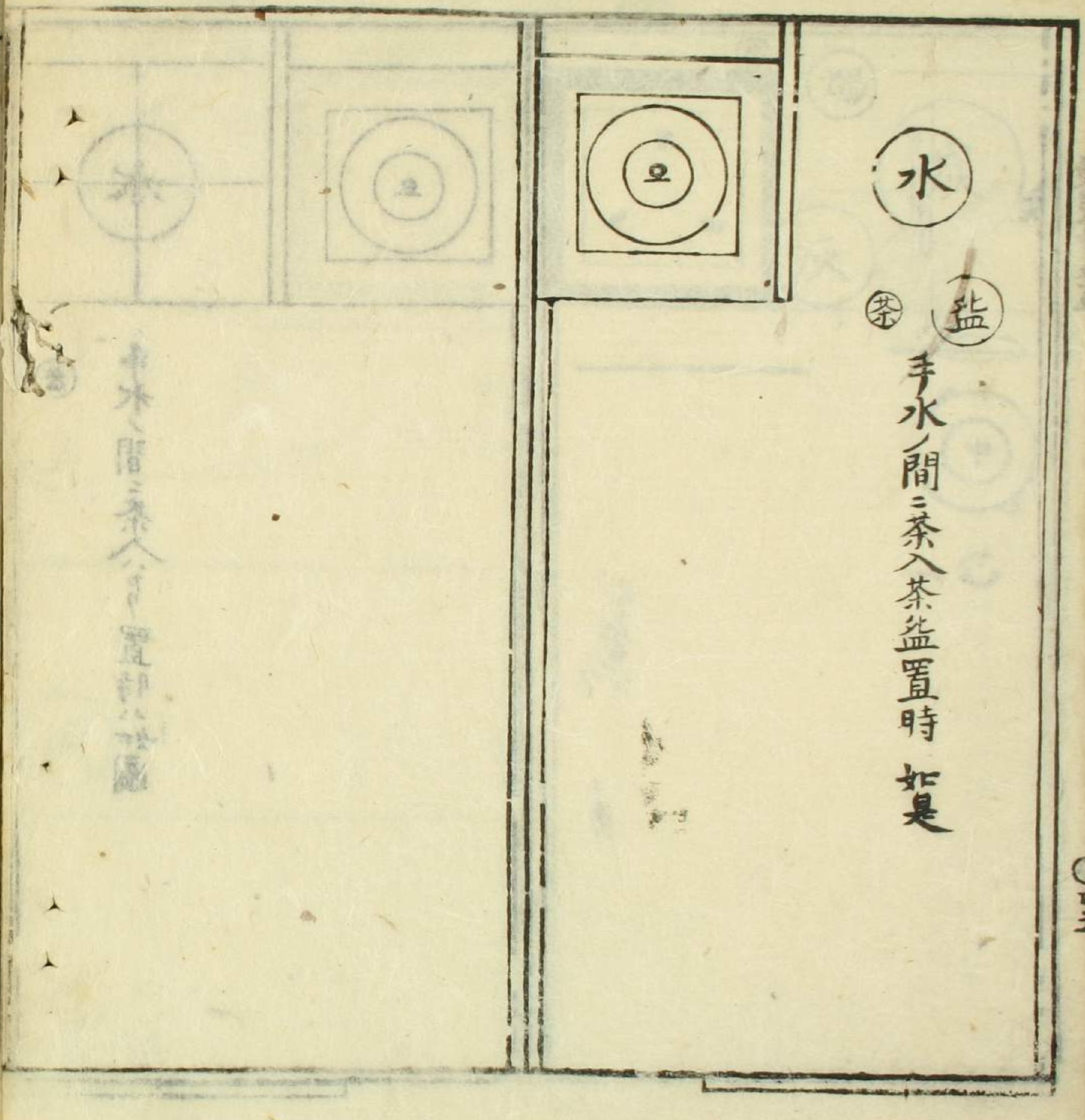
右勝手之圖



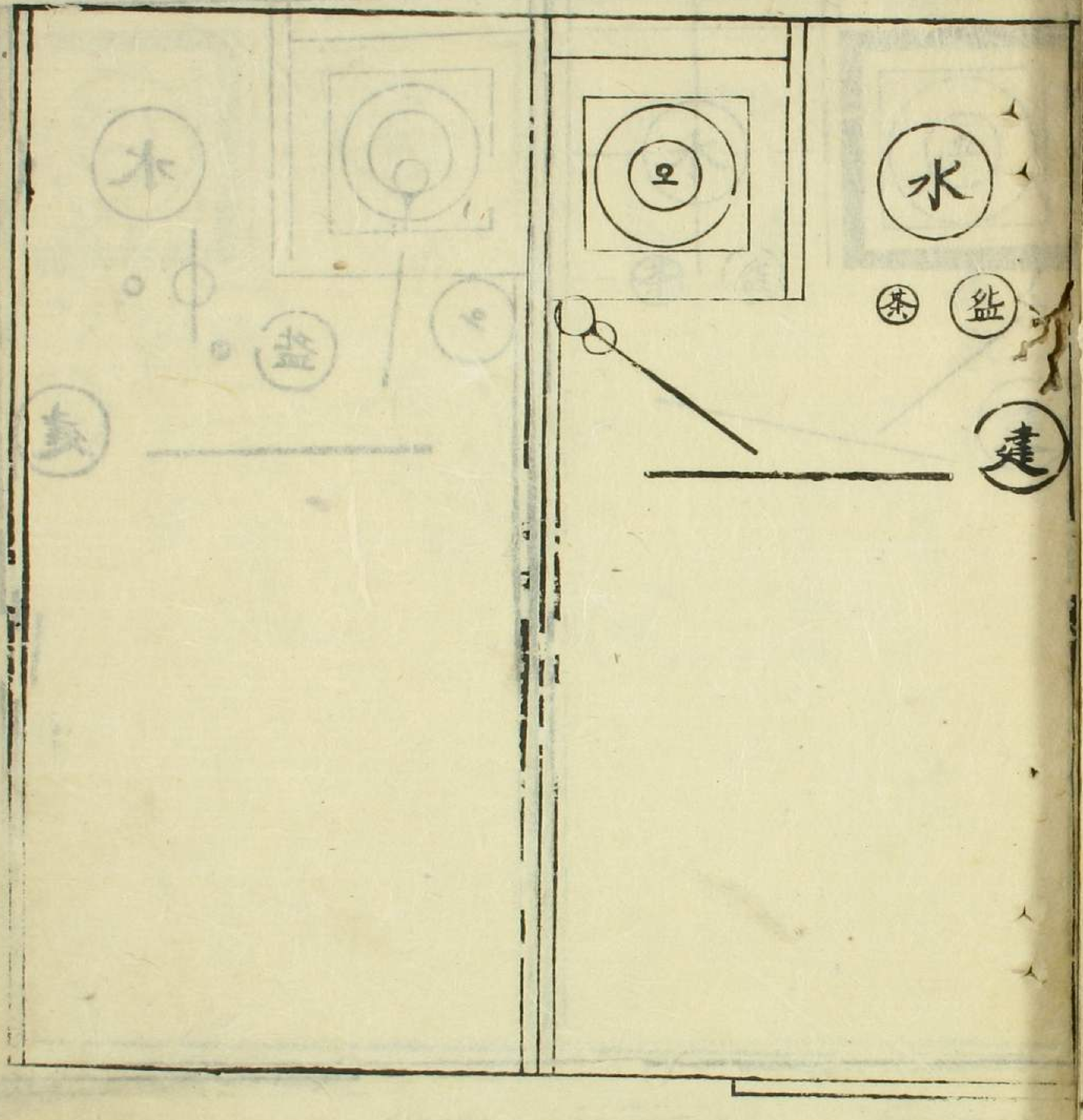




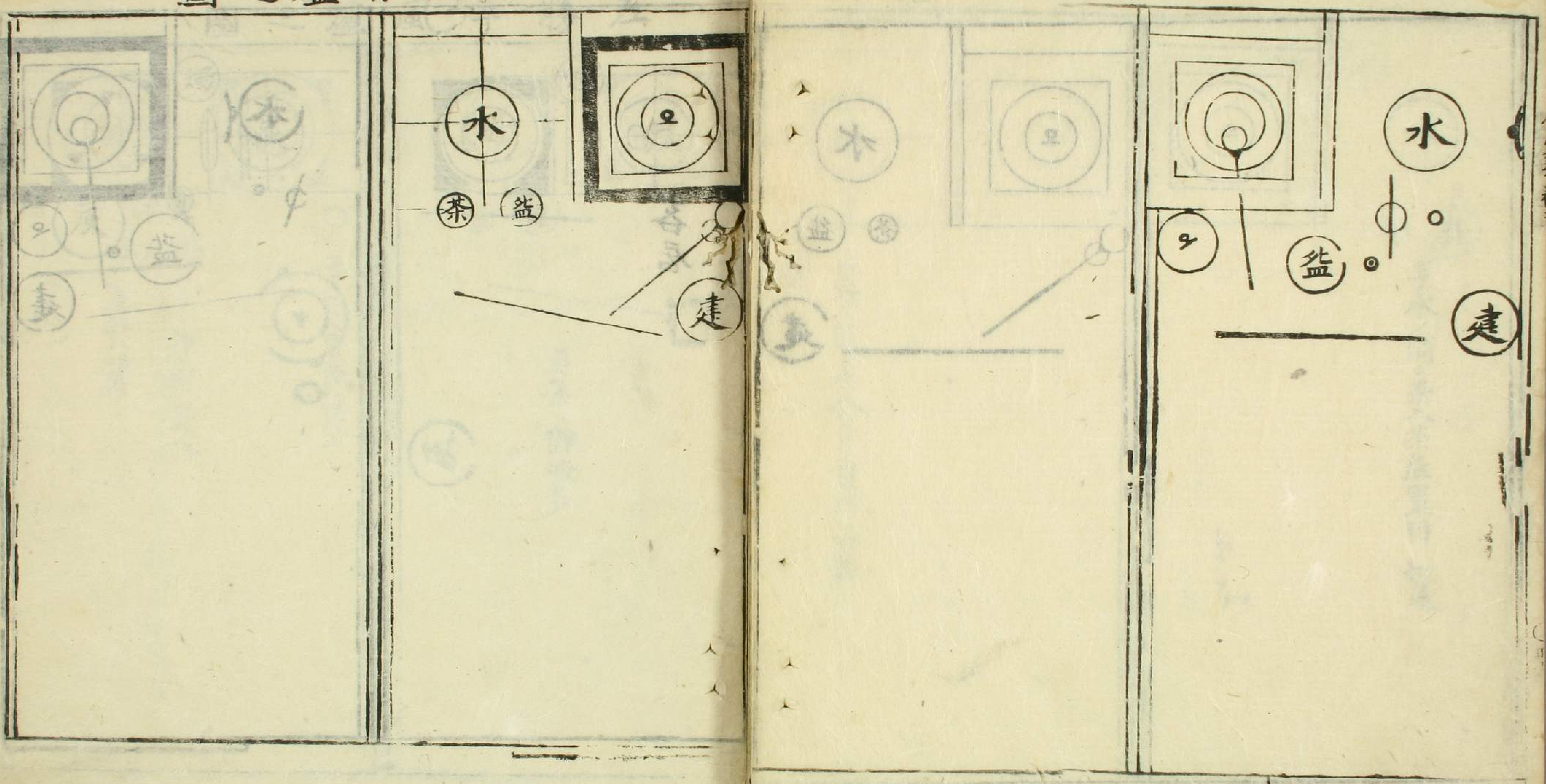
手水ノ間ニ茶入ハカリ置時ハ如圖



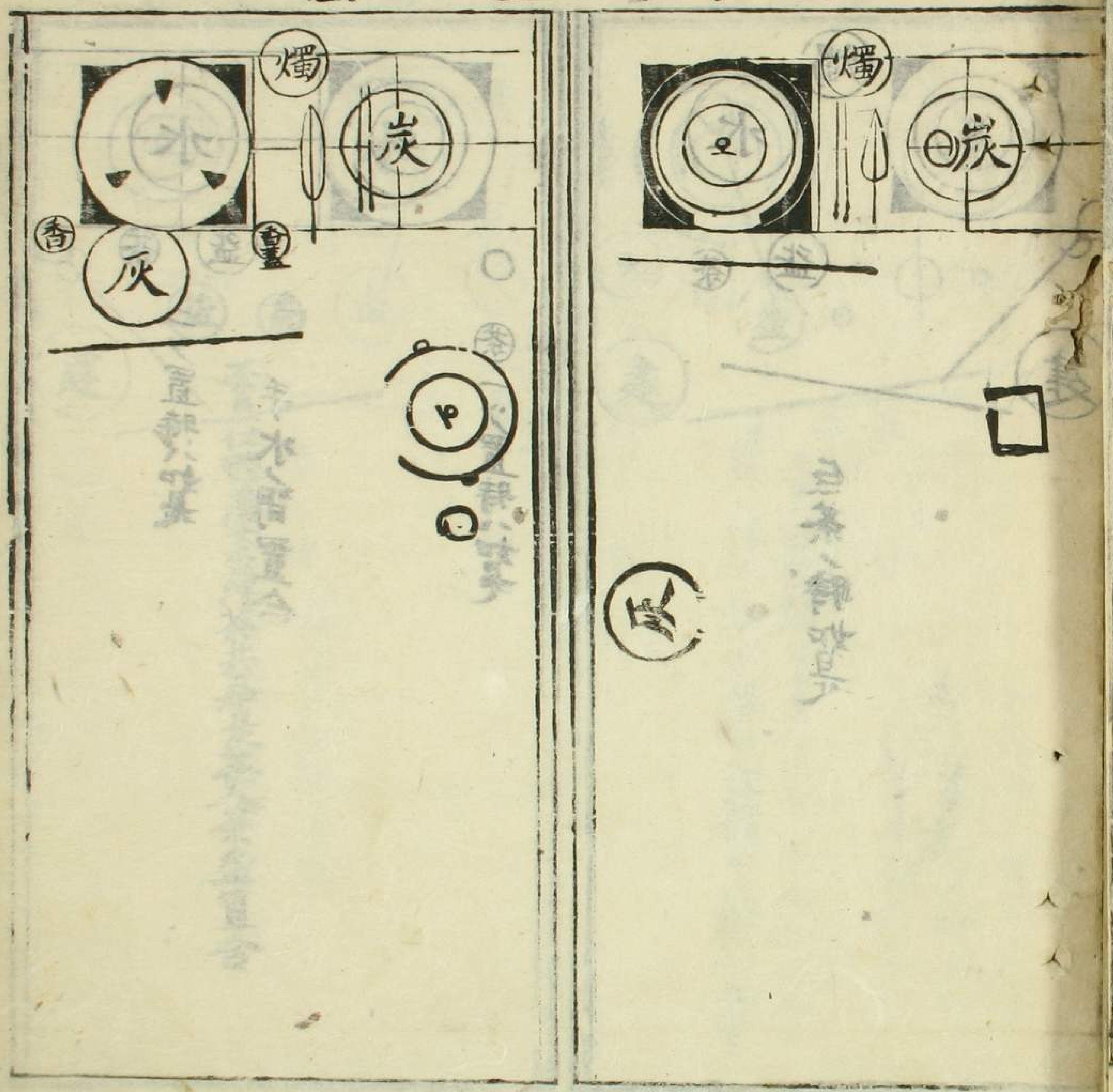
手水ノ間ニ茶入茶盐置時　如是



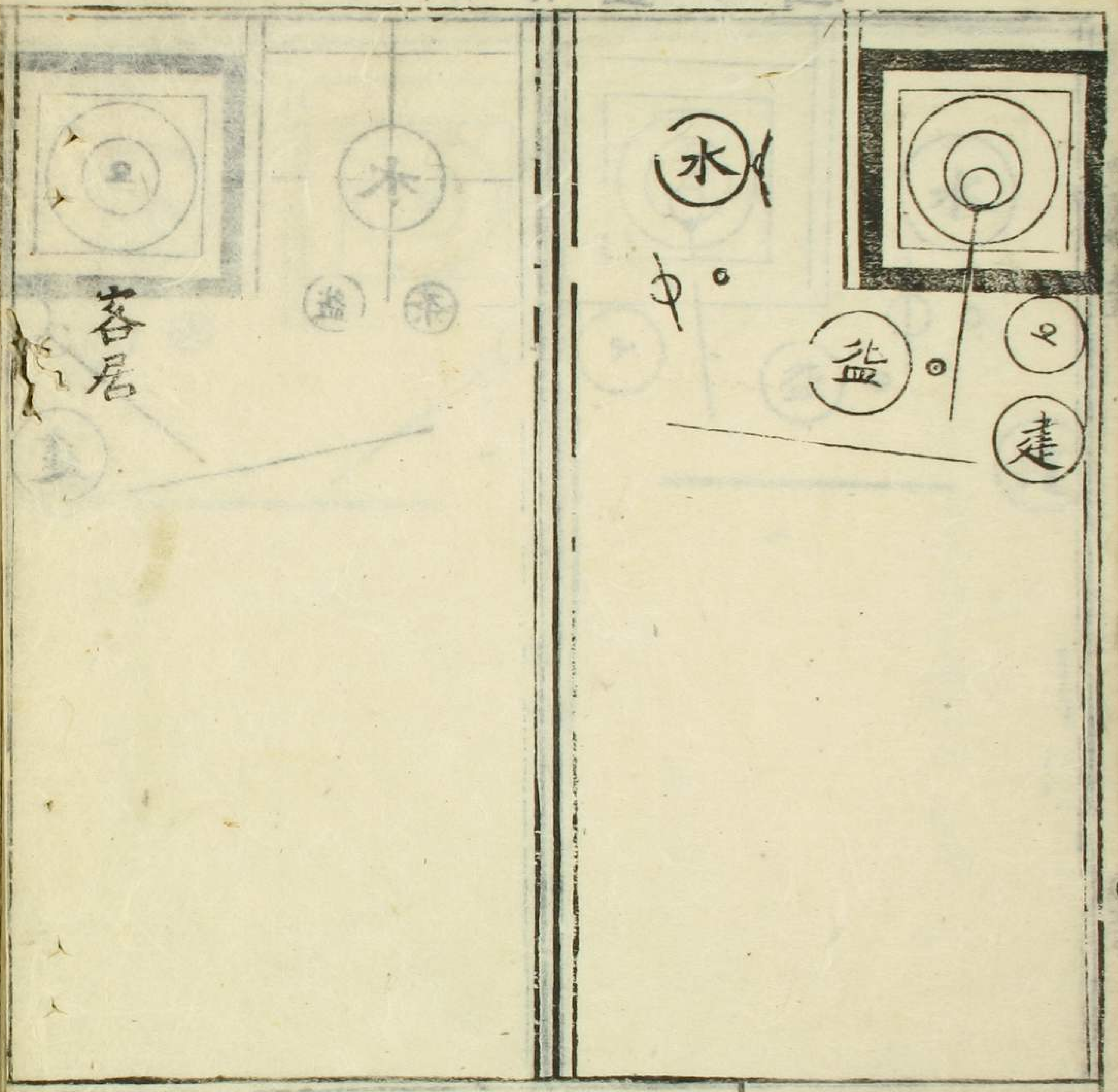
右勝手隅有爐之圖

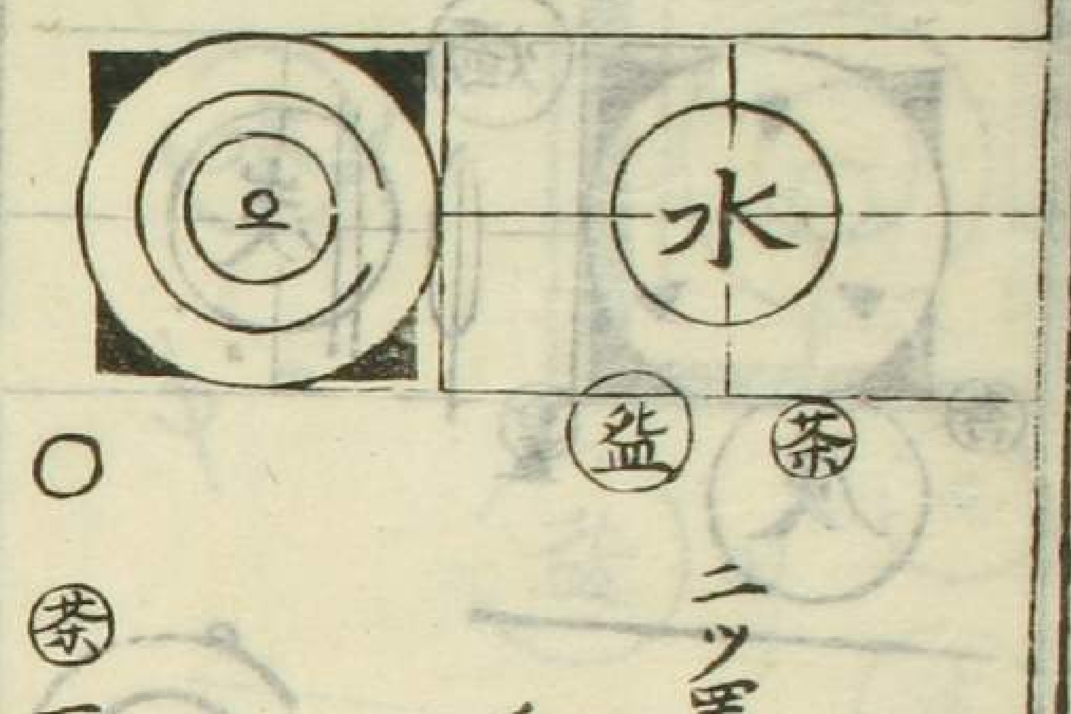


左勝手風爐之圖



右勝手隅有爐之

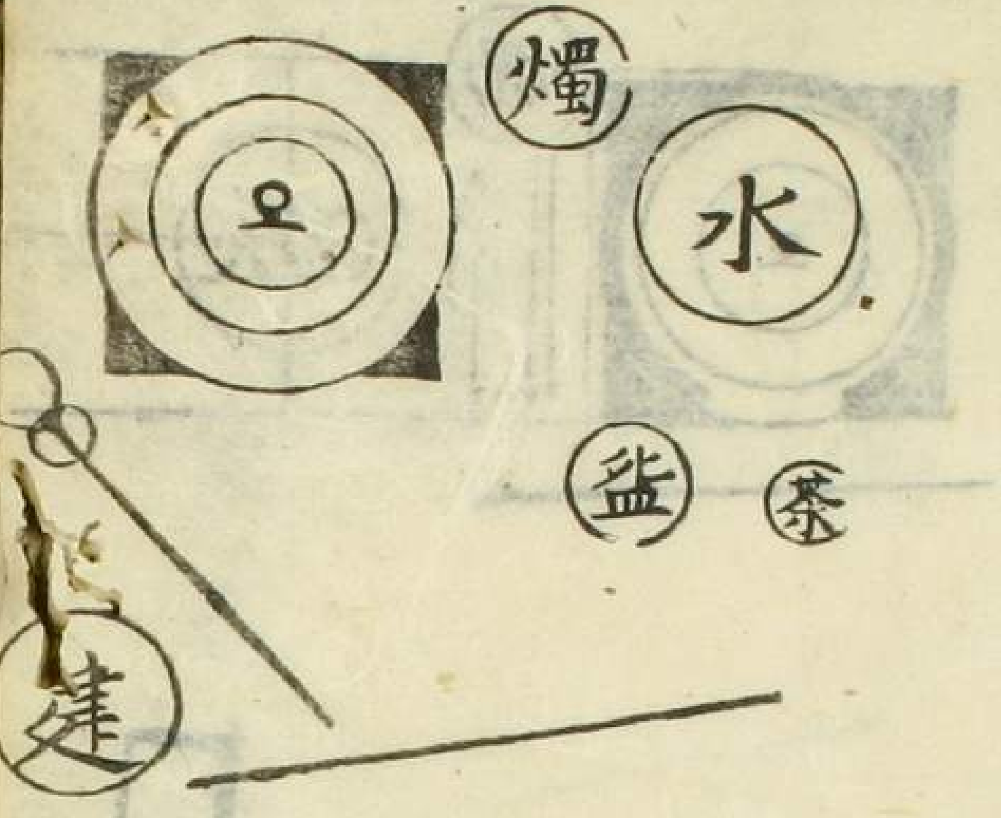




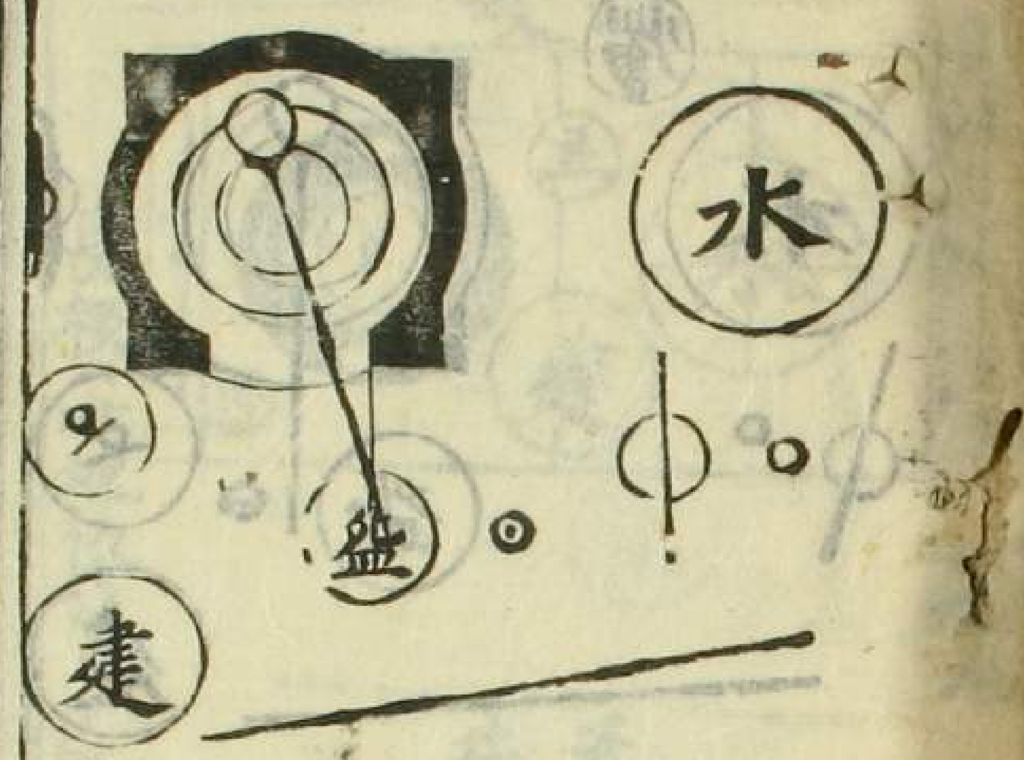
一ツ置時ハ如是

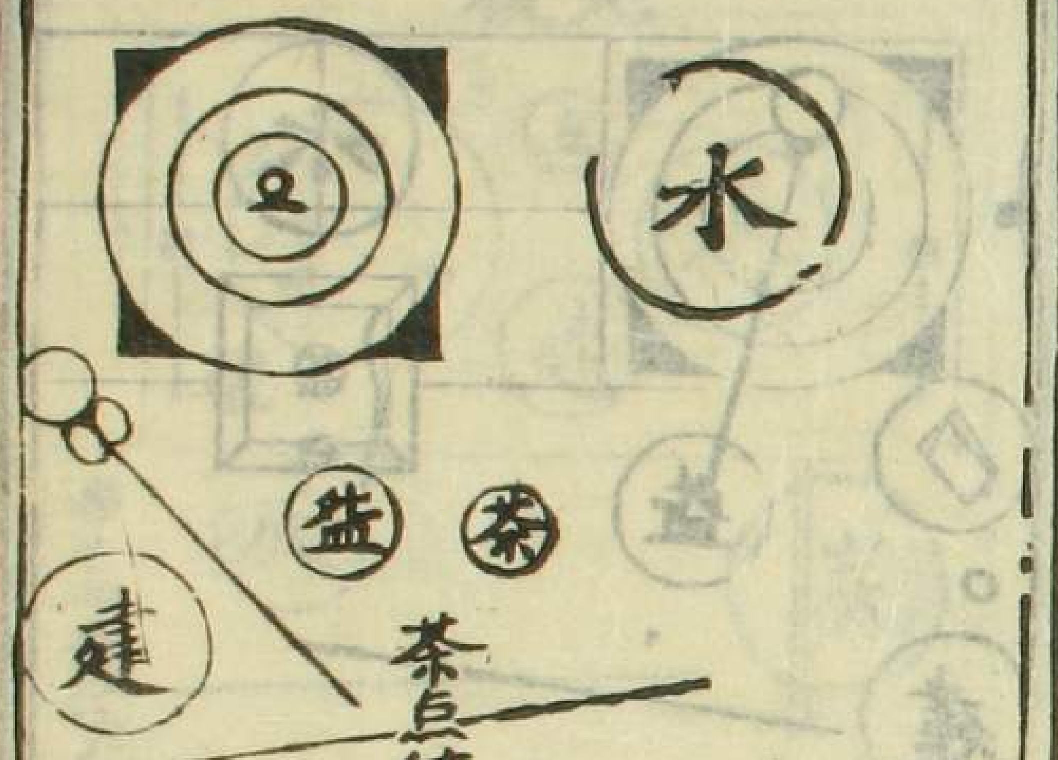
二ツ置時ハ如是

手水ノ間置合



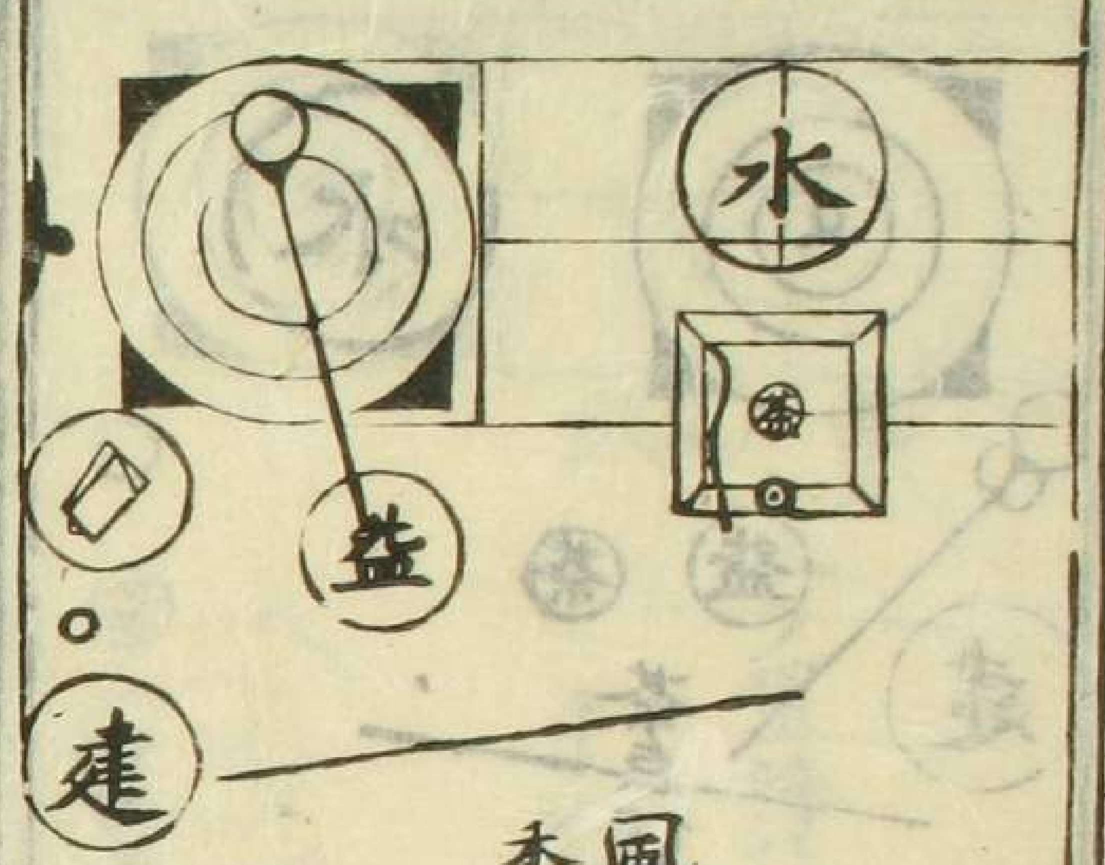
点茶ノ時如是





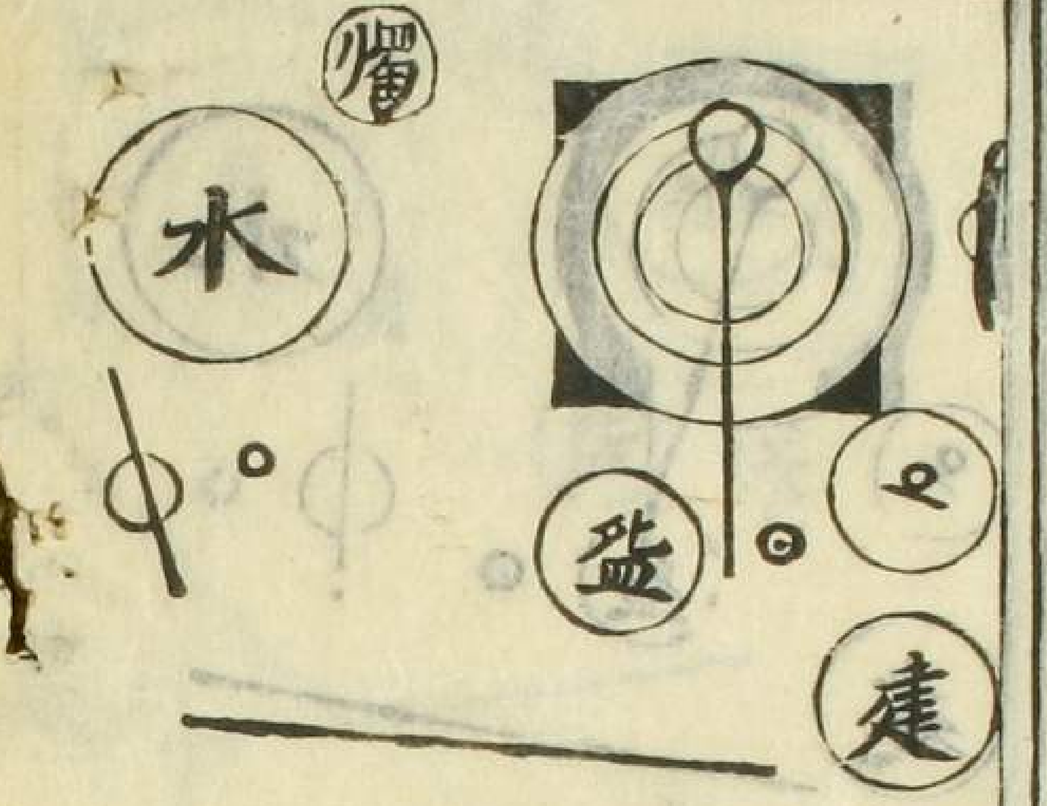
茶点仕廻濃茶薄茶共ニ如是茶入茶盌置合

風爐盆立圖



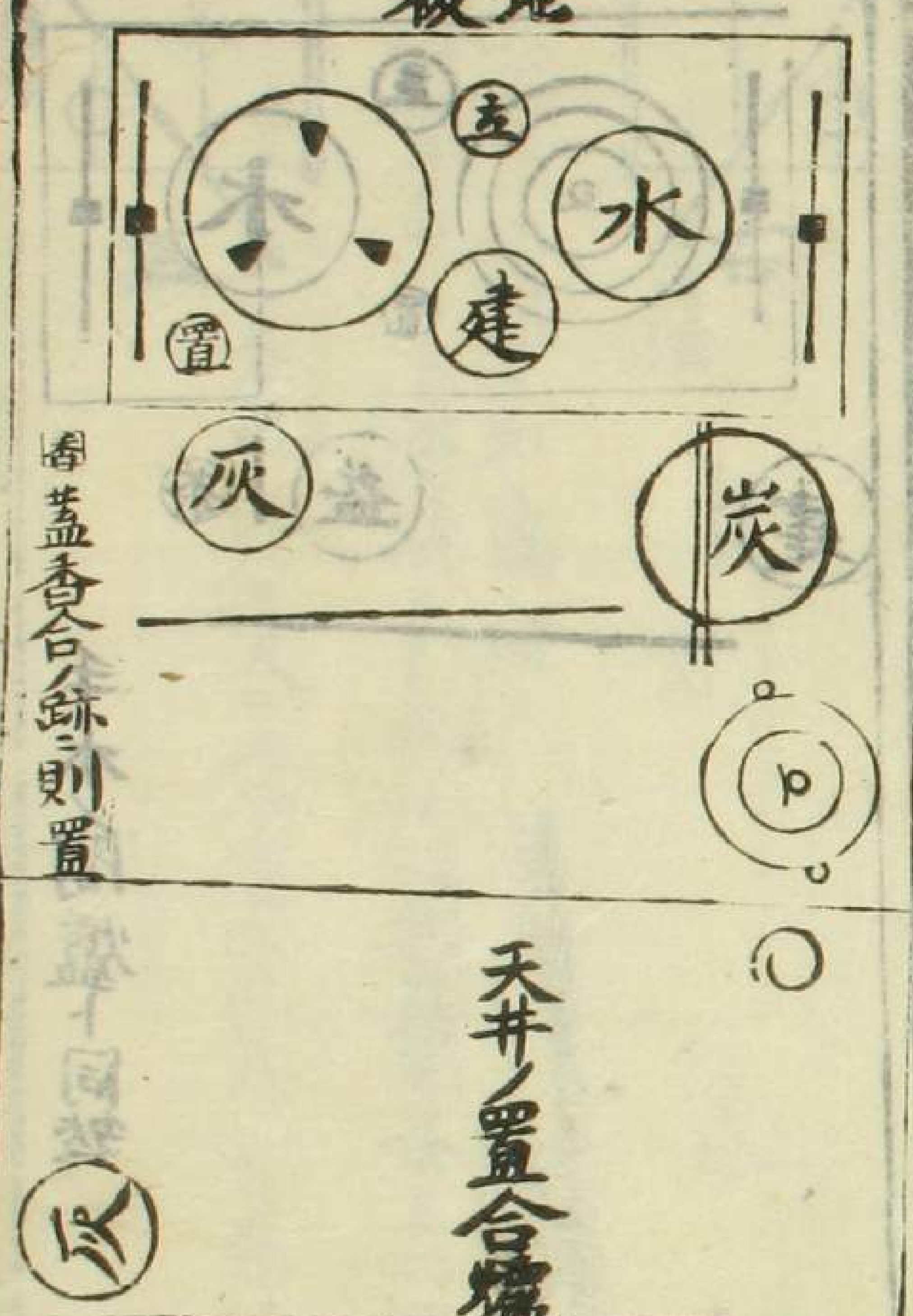
風爐ノ盆立モ爐ト替事ナキ故委不記

右勝手置合圖



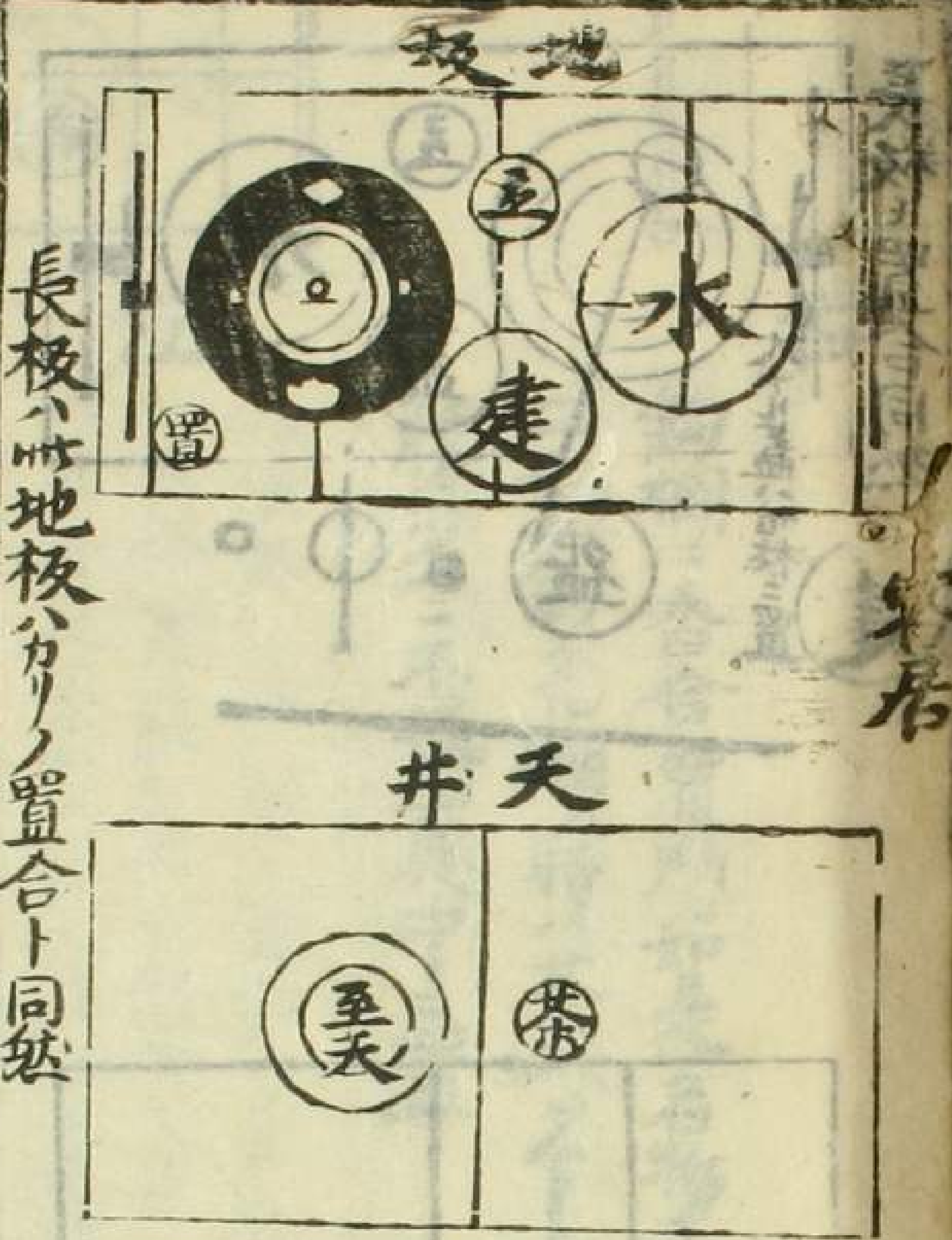
炭ノ時モ点茶ノ時モ右勝手爐ノ巻ニ委ク記ス故略之

臺子風爐置合左勝手圖



香合 蓋置香合飾ニ則置

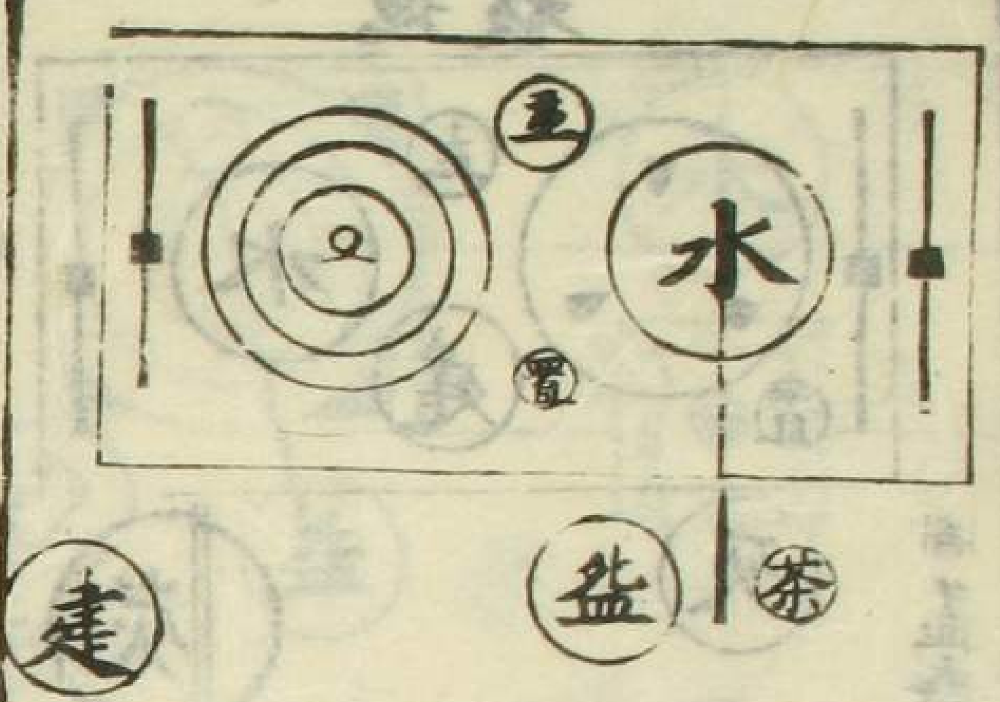
天井ノ置合爐ト同然



長板ハ皆地板ハカリノ置合ト同然

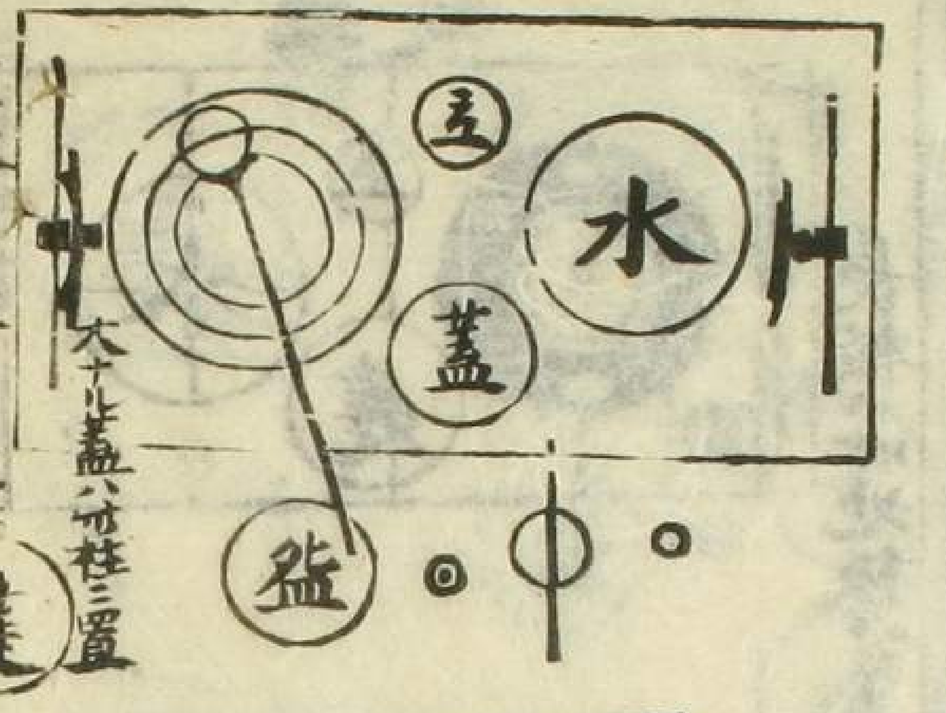
如是上下置合タルヲ五ツ置ノ二ツ飾トモ云何レモ名物共ハ也

天井ニ炭斗香合羽帚置所ハ爐ノ時ト同然

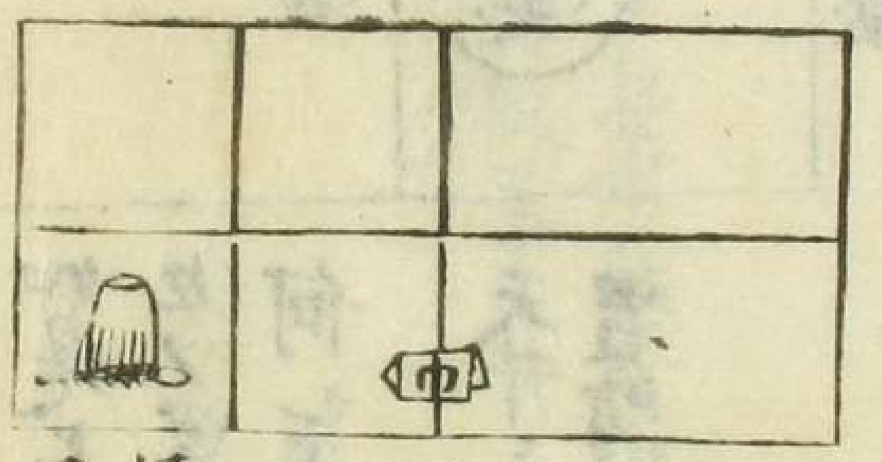


手水ノ間爐ト同然

長板モ置合同然



大ナル蓋ハ竹ニ置

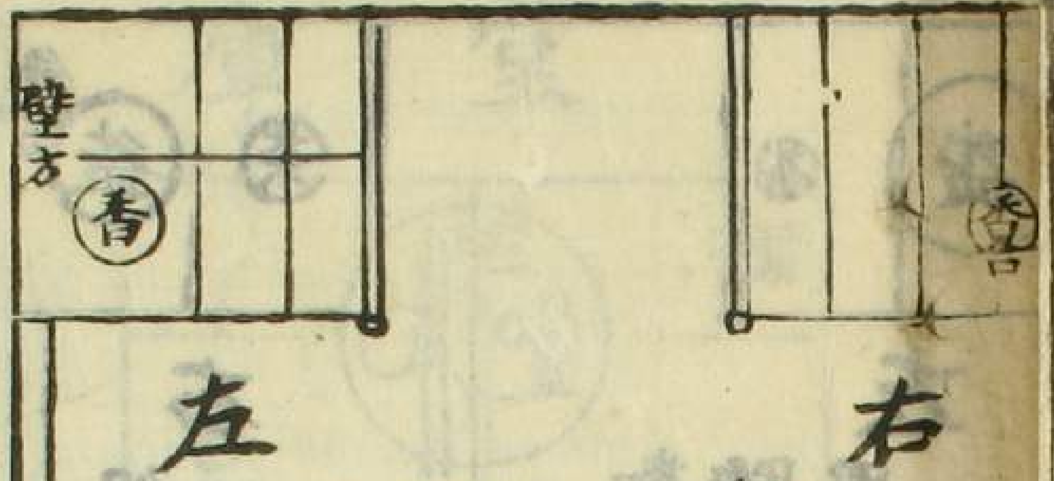


風爐モ爐モ如是

爐ノ時代衣置所

風爐ノ時ニハ盆ニ立テ

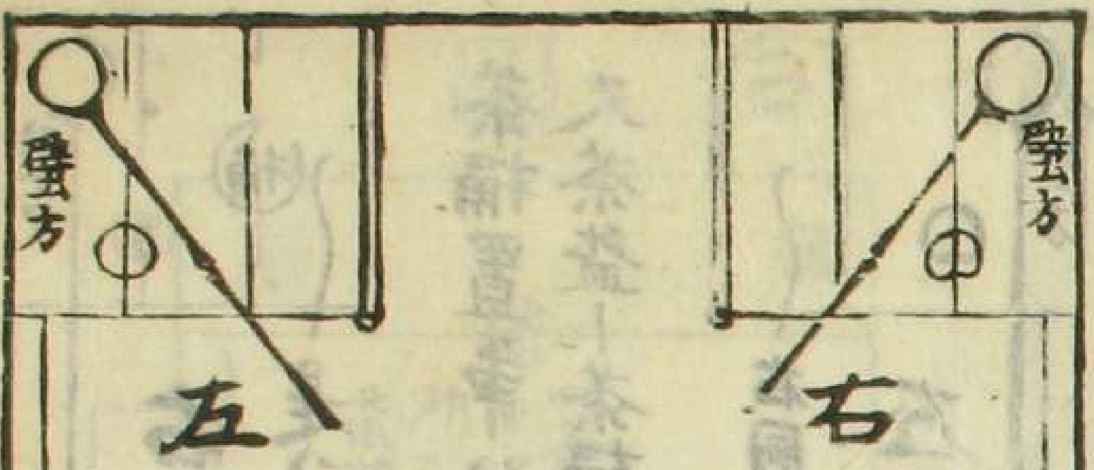
袋如是



鉤棚ニ香合置所ハ如是名物ナレハ棚ノ四方ヨリ真中ニ置

二重鉤タル棚ノ時ハ茶入ヲ下ニ置香合ヲ上ニ置茶入ハ

勝劣ニ不構真中ニ置



右

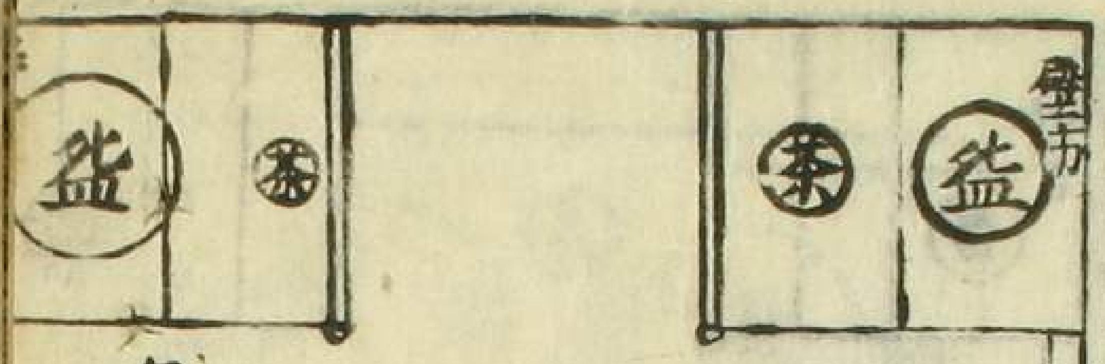
是ハ茶盌内ハ茶入ヲ入水壷ノ前ニ置合ル時如是

茶桶置事ハ手水ノ間ヨリ三色如是ニ置茶立仕廻揚置時モ如是

又茶盌ト茶桶ト次ノ圖ノ如

左

右同然



右

如是茶入茶盌置合ル時ハ柄杓蓋置ハ風爐先ノ隅ニ柄杓ヲ立掛其前ニ蓋置ヲ置

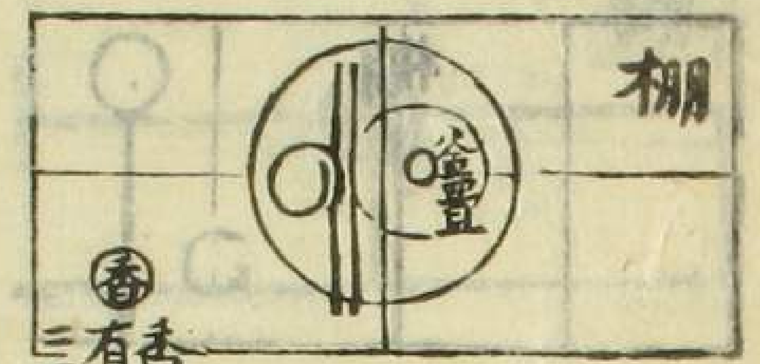
柄杓掛ノ釘壁ニ在時ハ是ニ柄杓ヲ掛蓋置ハ其柄ノ通ノ下ニ置ナリ但棚ニ重有時ハ上ノ棚ニ二色共ニ置ナリ置ヤウハ前ノ圖ノ如シ

茶立仕廻茶入茶盌棚ヘ揚ル時ノ置合如是又茶盌持ノ勝手ヘ入時茶杓棚ニ置ナリ其時ハ茶盌置所ニ茶桶ト

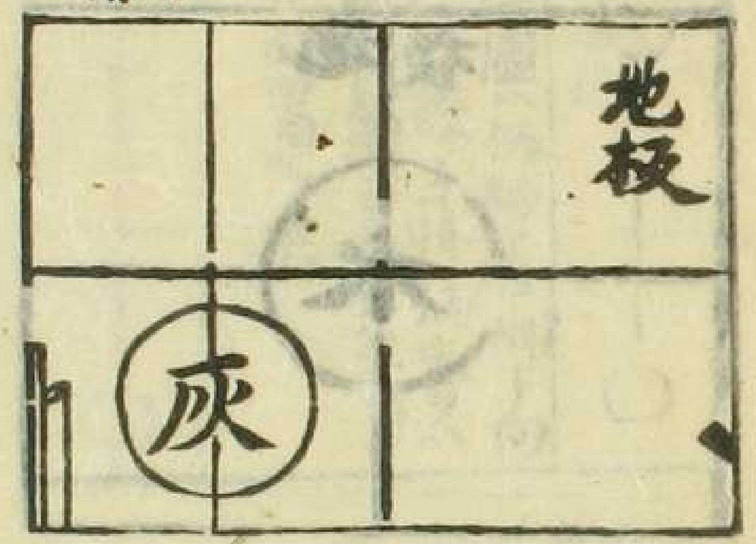
左

置合

堂庫置合圖



香合釣棚有時ハ釣棚ニ置ナリ

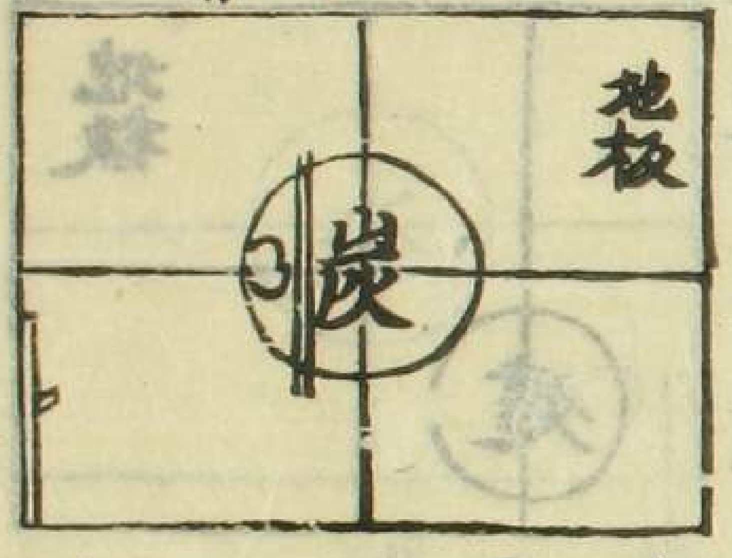


竹釘ハ柄杓掛也振表ヨリ上二寸八分又上ヨリモ二寸八分ナリ釘ノ出ハ七分ニ打ナリ

五鍋置事客同輩カ不行歩ノ爲也

竹釘袋掛ナリ羽帚ヲモ掛ル二寸五分ヘテ打所ハ棚板ヲ持セタル横木ナリ

竹茶入始ヨリ置所ヘ出ス其跡ニ手水ノ間ニ圖ノ茶桶置事モ有

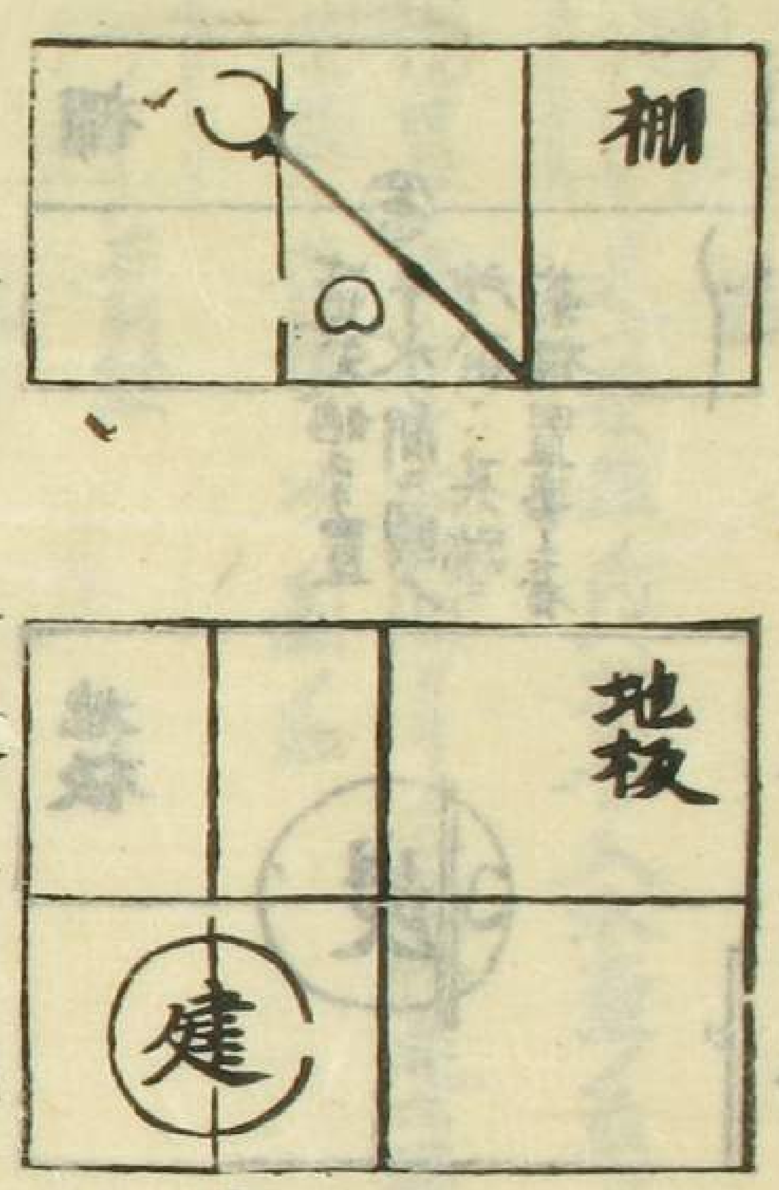


竹茶杓ハ茶入ヲ茶盌ニ入水壷ノ前ニ置合ル時置

右ニ同

上下ノ置合兩圖共ニ客前ヲ如此

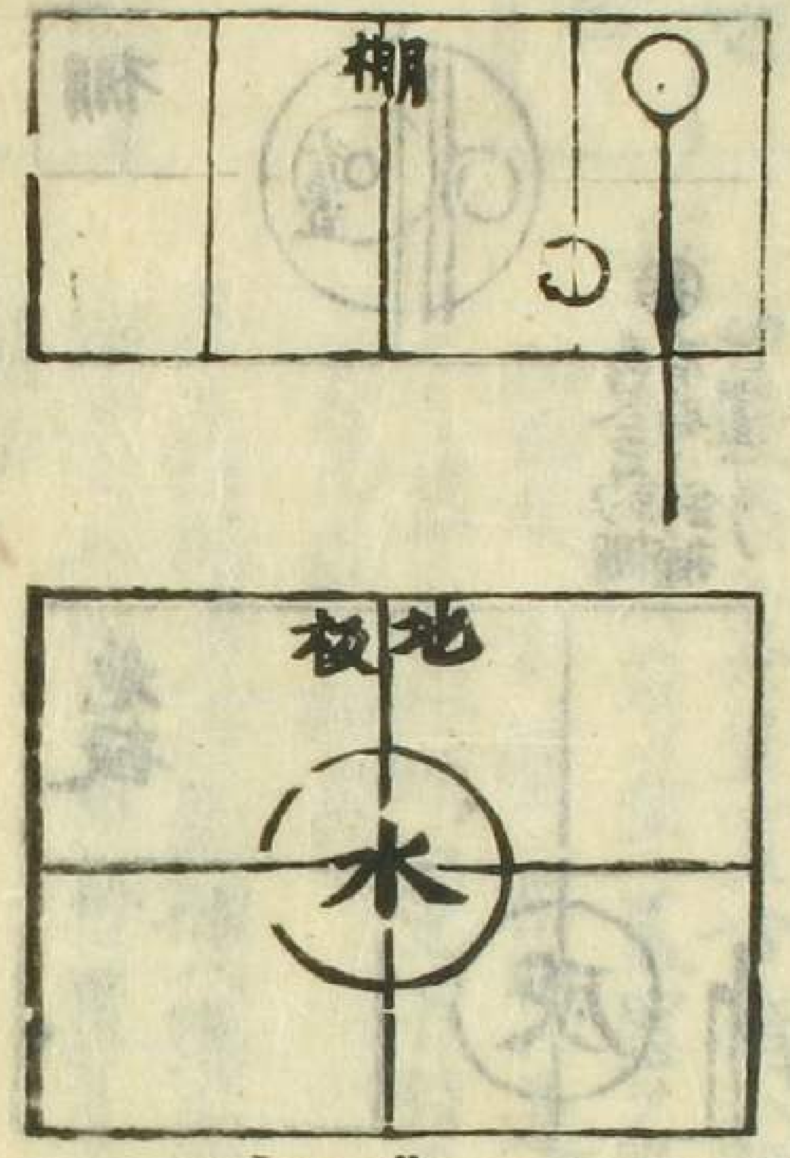
右ニ同



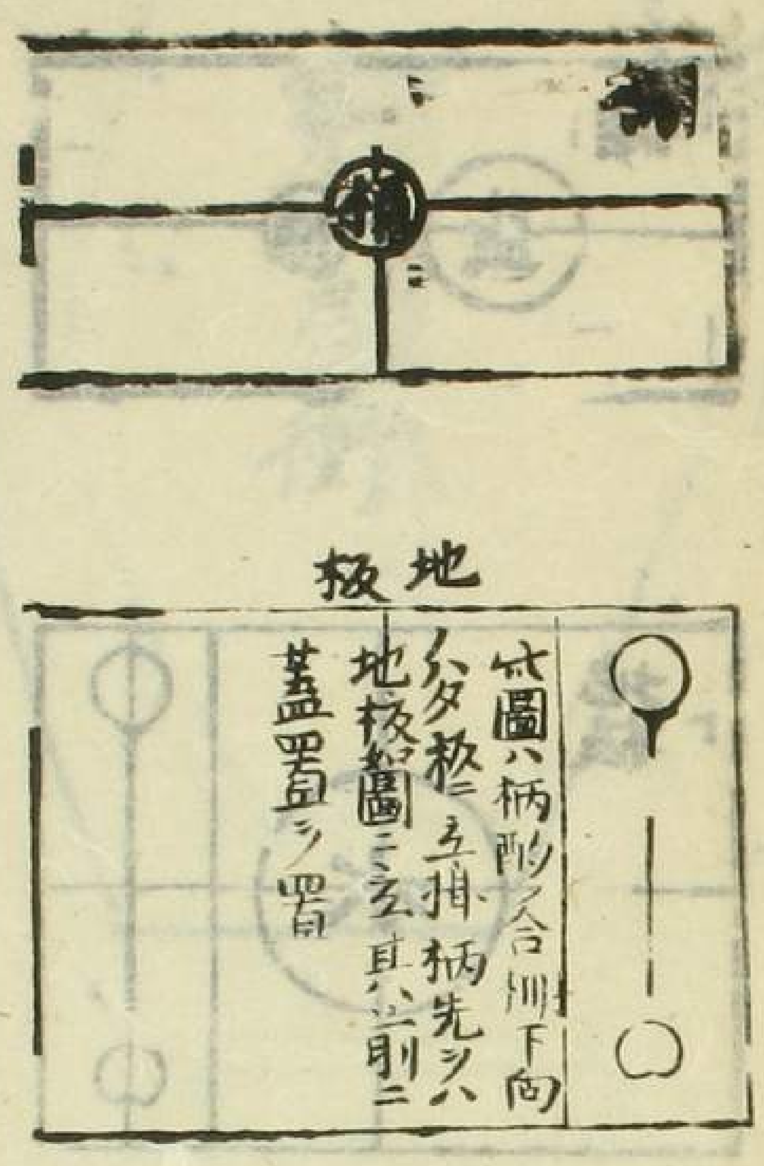
手水間上下ノ置合如是

建水置事前圖五鍋ト同心得也

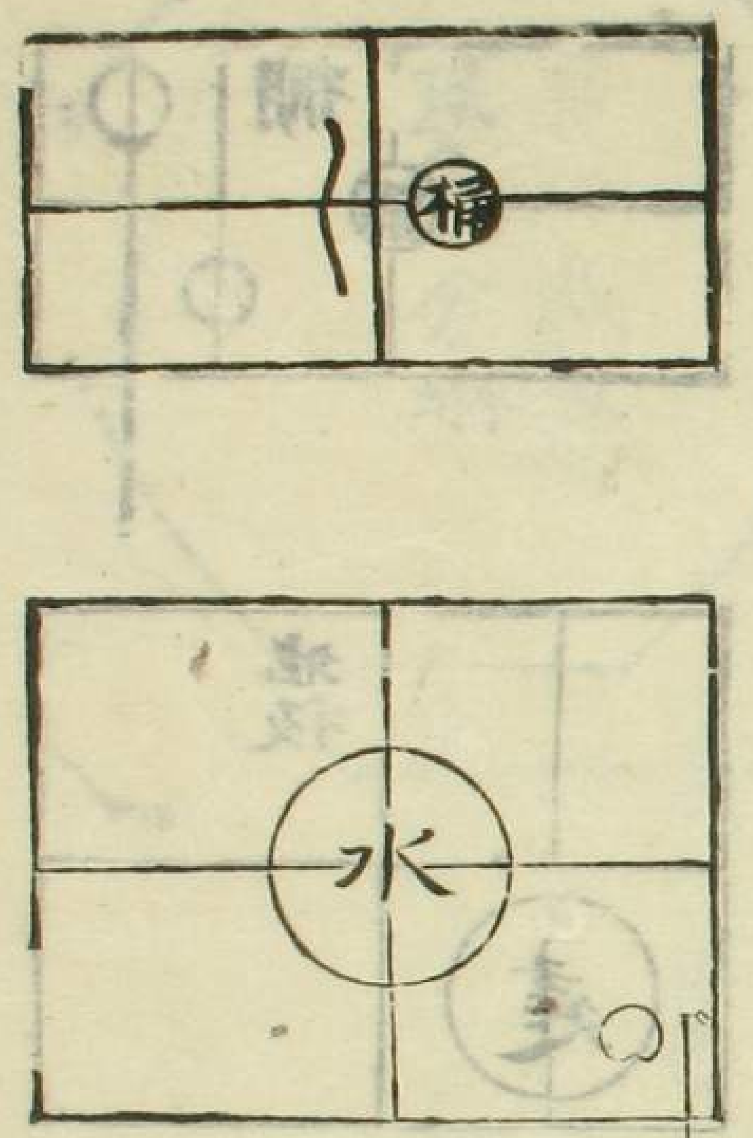
手水ノ間ニ如是置合タル時ハ濃茶仕廻テ後如圖棚ニ柄酌蓋置
置合地板ニ水壷入置残リノ道具共ハ勝手ヘ入ル也片口ニ水ヲ盛持出
指添事如前



濃茶仕廻テ後柄酌蓋置如是ニモ
置也水壷勝手ヘ入ル事モ有

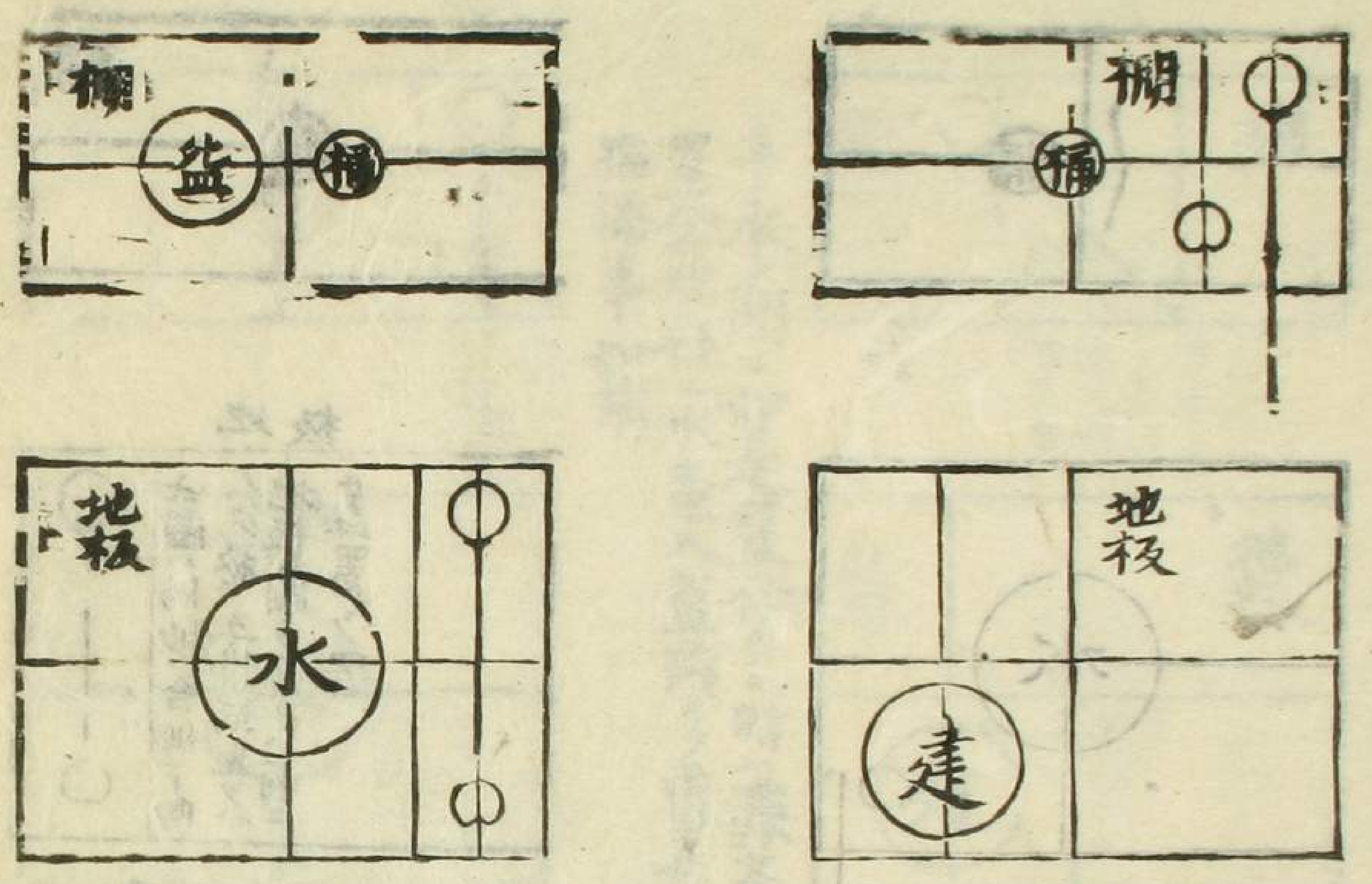


手水ノ間ノ置合上下如是



柄酌ハ釘ニ掛蓋置ヲ圖ノ所ニ置

濃茶仕廻テ後上下ノ置合如是

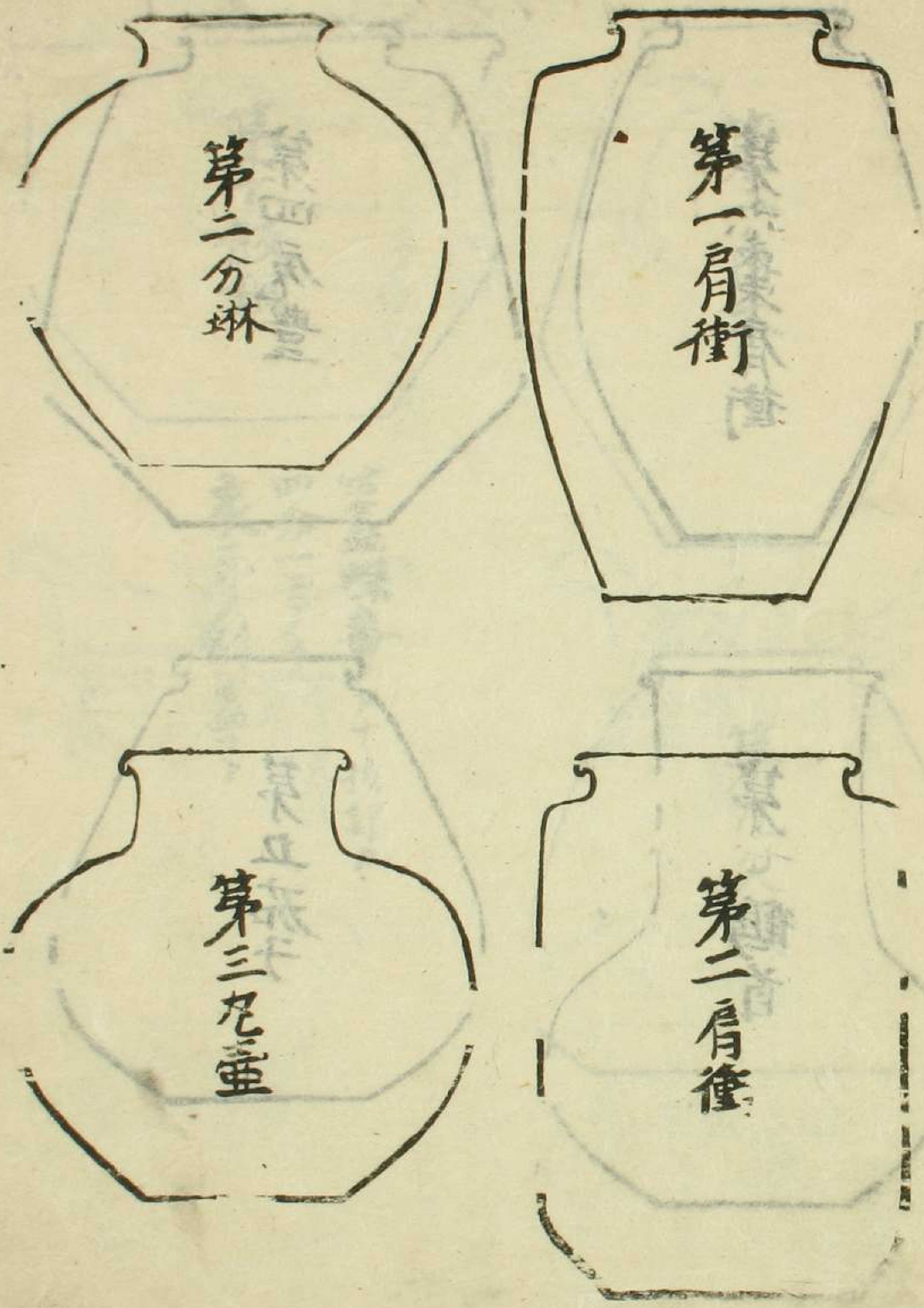


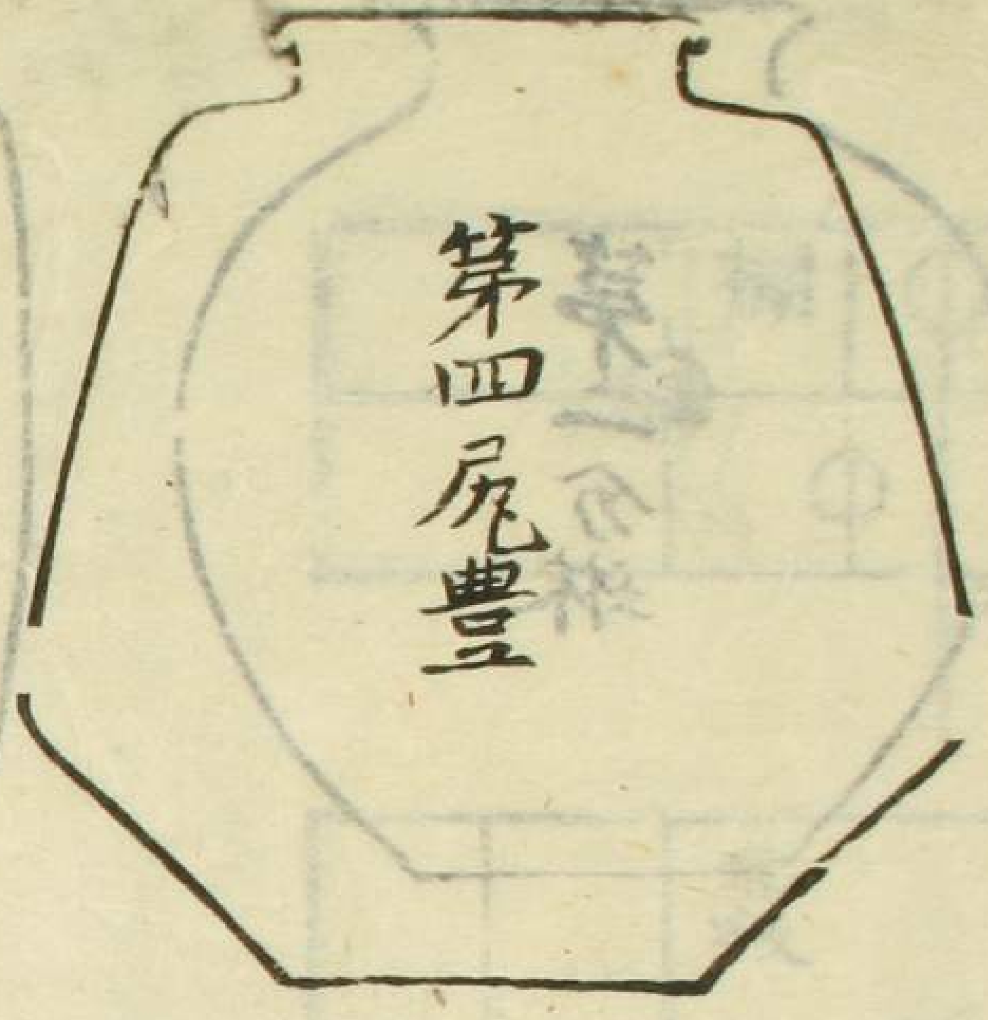
手水ノ間上下共ニ如是ニモ置

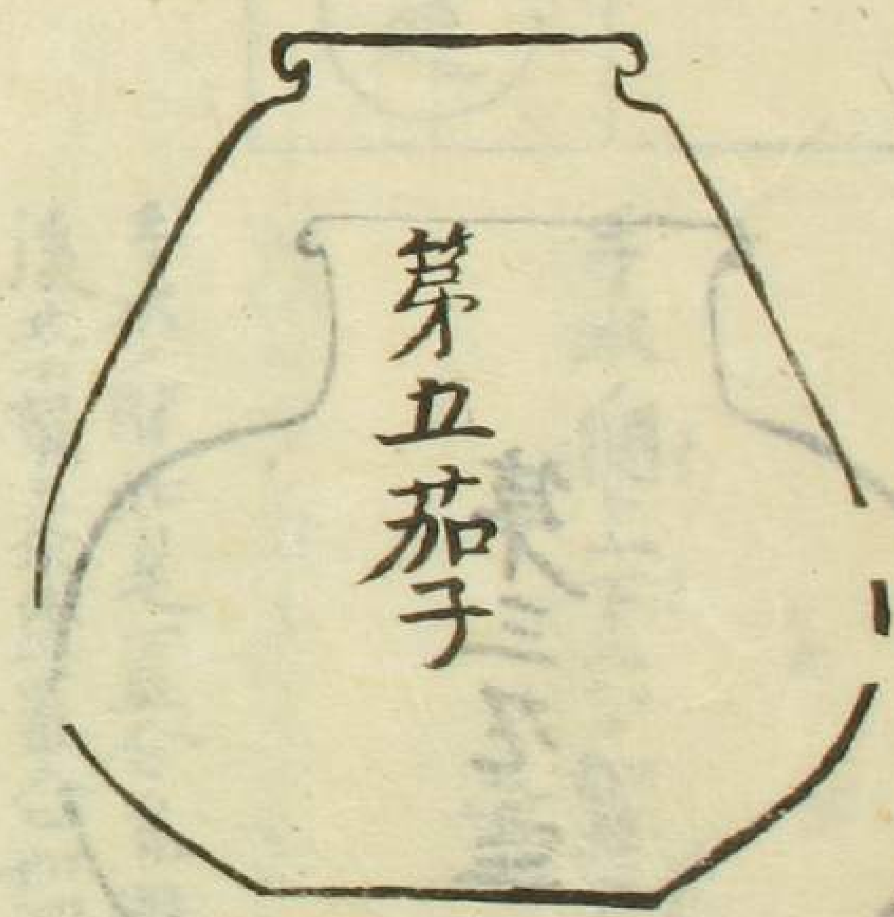
手水ノ間ハ如是置合タル時ハ濃茶仕廻テ
後茶桶ニ茶盌置合如圖水壺柄酌
蓋置入置事残リノ道具共勝手ヘ入ル
事水指添ル事モ右ニ記ト同シ

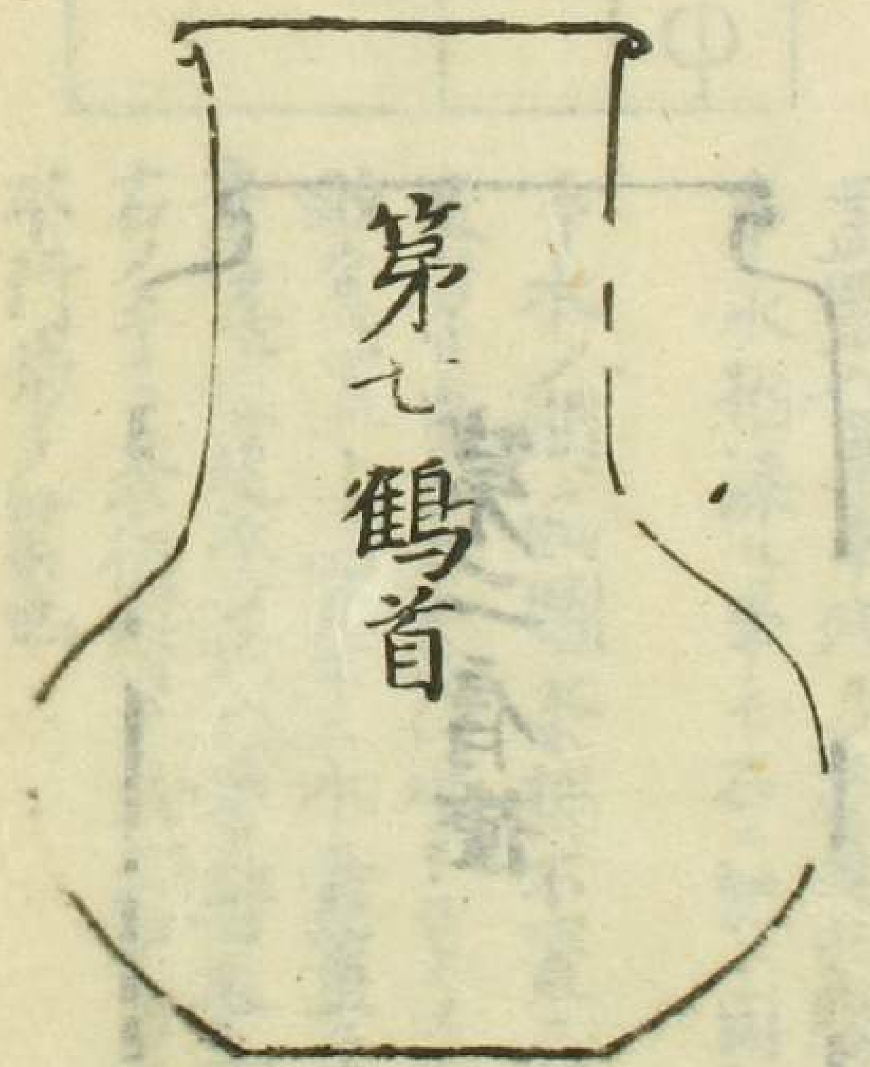
手水ノ間ニ如圖茶桶不置ニ柄酌蓋
置ハカリ置合濃茶仕廻テモトノコトク柄
酌蓋置上ニ置下ニ水壺置テ後薄
茶ニテ建水ノ内ヘ茶盌ヲ入左ノ手ニ持
右ノ手ニ茶桶持テ出ル事モ有リ是ハ
不行歩ノ業也

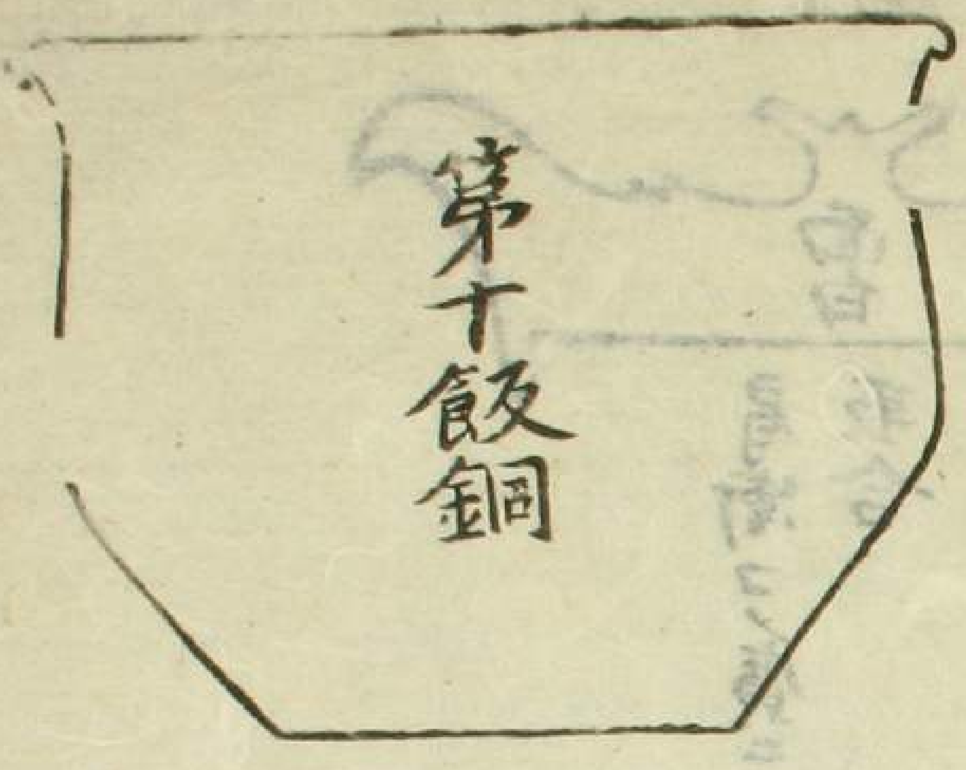
茶入形ニヨリ勝劣之次第



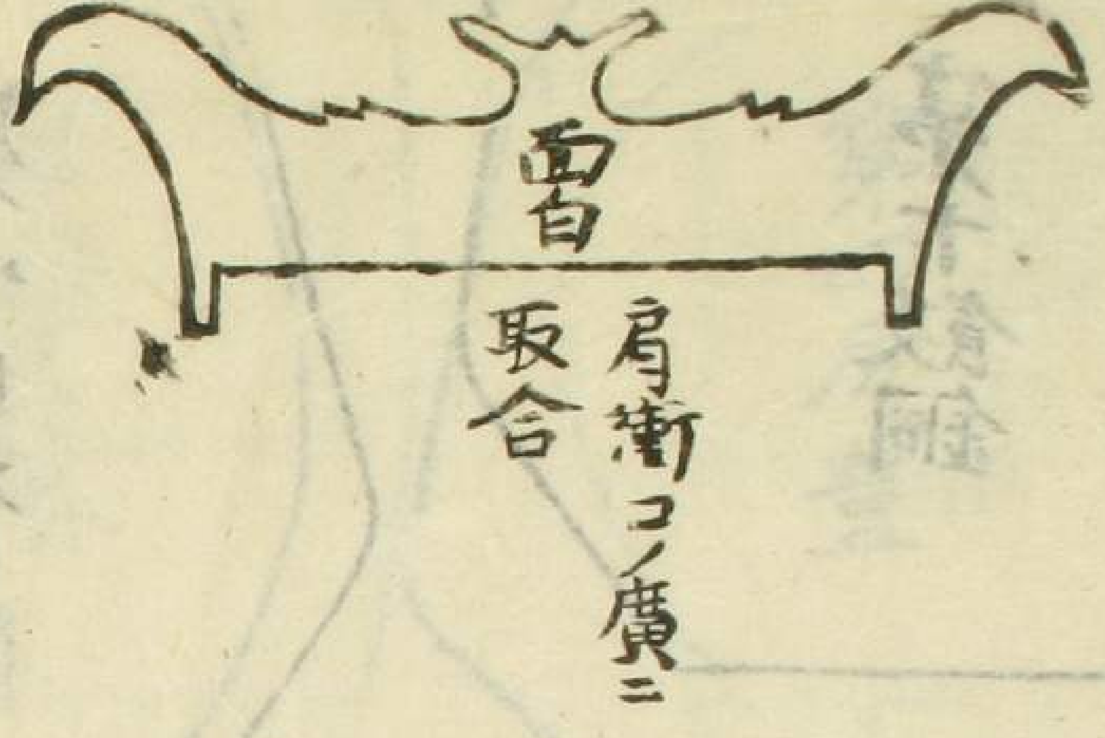








竹蓋蝶番ノカナ物銀カ
四分一ニテスル
象牙ノ副蓋ナト


雷
肩衝コノ廣ニ
取合

落込様子ツク
分琳
丸壷
棗肩衝
鶴首
角木ニ
取合

肩衝
中ニリ
口ノ狭ニ
取合
棗肩衝ノ
大ナルニモ取合

栄螺蓋
尻豊ト
茄子
矢頭
勢ノ高キ
取合

尻豊
茄子
勢ノ低ニ
取合